

に之れを行ひし者のあるとかいふ。今も尙巴里伯林には貞操帯専門の製作師のあるに至つては、思ひ半に過ぐるものがある。

我邦に於ても去る大正十三年の秋「貞操保全器」なるものが出来説明書を手に入れたが遂にその實物を一見する機会を持たなかつた、が最近或る地



(三) 貞操帯

方の警察に姦通のうたへがあつたので

取調べると女房が是を爲て居つたが餘り氣持が悪るので一寸はづしたのをうたがひ深い夫が他に男をこしらへての仕草と早合點してのうたへであつたことが判つたといふ新聞記事を読んで、昭和の今日でも秘かに使用されて居ることを知つた。

右に述べた如く貞操帯は専ら女子の姦通を防ぐ爲めの道具であるが、我國にては、文政天保の頃に行はれた男子の淫氣留めの道具に「悋氣の輪」といふものがあつた。男陰に嵌める金属性の金環である。(「海老鏡」参照)

キネーデ(Kinade)受動的鶏姦者。蟹童。—*nnyvros* Passiver Pädernst. 「蔭間」「鶏姦」参照)

キンダーシエンドウング(Kinderschändung)兒童姦淫。

兒童姦淫とは未熟なる兒童に對する性慾的嚮を云ふ。兒童に對する性慾的襲撃は、多くの場合顛倒的色情にかゝれる者に見られるものであるが、又尋常なる性慾衝動の満足のため、唯、兒童を嗜好するものもある。

兒童姦淫の原因には凡そ三つの種類がある。

- 一 正常なる女子の兒童を嗜好するは性的關係より來たる後難なき爲め。
- 二 同性色情的に基くもの。

三 残忍なる淫樂者によりてこゝろみらるゝもの。

クラフト・エビング氏は之を好色者の淫樂によりてのみ起るものとし色情性小兒嗜好なる名稱を附したが、フォーレル氏は此の意見に賛する能はず、小兒嗜好なる名稱は意義曖昧なり、蓋し性慾的要素を含まざるが故であると、其著「性慾研究」の中に於て反對して居る。兒童姦淫は他の性慾異常例へば同性性慾、残忍なる淫樂、陰部露出症、及び節片性淫亂症の如きものと結合することが可なり多い。

キンデルモルド(Kindernord) 嬰兒殺。

嬰兒殺は子供を持ちたくないといふ志向の内面的な欲求に基いて實現された處の一種の産兒制限である。

産兒の制限を實行したのは敢て近世のことではなく、遠い昔からさまざまの形式に於て人間の間に

キンデ

於ての避妊ではなくて、一旦生んだ子を勝手に殺してしまふことによつて同じ目的を達してゐた。歴史を尋ねて見るとスパルタ人は、總ての子供を國家の所有として生殺與奪の權を言葉通りに與へてゐた。子供が生れると國家は素質のよい丈夫なものだけを選んで生育させ、あとのものは高い谷から叩き捨て、殺してしまつたのである。甚だ亂暴極まる方法ではあるが、良き子だけは生れて見たものゝ中から選ぶのは一番確かな優生學の實行であつて、結果からいへば今日の避妊よりも遙かによかつたに相違ない。

この風は羅馬にも存在し、セネカは「無用なものを健全なものから離別するのは理性的行爲である」と云つてゐる。

この無用なものは殺すといふ觀念に關聯して思ひ出されることは、カリホルニアに於けるある印度人の間に行はれる習慣である。

「こゝでは女は子を産むために、ひとり、河縁

か、水のある洞窟のほとりに行く、さうして、子供が生れるや否や、彼女は子供を水の中に投げ込む。若し子供が水面に浮び上つて泣いたときには拾ひ上げて育てるが、若し沈んでしまへばそのままにして置く。」とスザーランドは其著「道徳思想起源發達史」の中に述べて居るが、この習慣の起原に就ては何も語つてゐない、然しこれも無用なものに殺すといふ考へ方から來てゐるのではないかと思ふ。

古事記に「此子者(水蛭子)入葦船流去、次生淡島、是亦不入子之例」とある。この記事で見ると、さうしてこの事が異常として取扱はれてないところから考へると、不具や虚弱な子を棄てることは日本上代の習慣であつたらしい。

無論この物語の結構から見ても女が男に物を言ひかけた因縁で不具な子が生れた。従つてその子は育てるべきではないから棄てたと考へられないこともない、けれどもさういふ思想が當時あつたかど

うかは分らない。北米印度人は不具や痲疾の子を生れるのは惡魔の仕業だと考へて嬰兒殺をやり、タイチ人はそれをタブーを犯した罪だとか、敵の呪(まじ)の結果だとか判断して殺すが、日本上代にはこの惡魔の考へ方が存在したから、この理由で水蛭子や淡島やが殺されたのかも知れない。

けれども不具な子供を殺す理由はこんな因果觀念の方面から考へずに、單に生活の便宜の方面から考へることが出来る。生命の神聖の認識されない時代——このことの認識され出したのは遠い過去のことではない——にあつては、人間は他の自然物と餘り區別されなかつた。フエンジア人は饑餓の時には犬よりも先に老婆を殺す、その理由を聞かれると、その子供は、「犬は獺を捕まへるがお婆さんは駄目だ。」と答へるそうだが、これと同様の心理で不具や虚弱な子供は殺される。水蛭子の棄てられた理由もこれで同様でないとは言へない。この「役に立たないものは殺す」といふ考へ

方は嬰兒殺の鐵則で、子供を持ちたくないといふ志向の實現の順序は大體この鐵則によつて決定せられてゐる。さうして、この考へ方は精神的宗教が人心に滲透するまでは支持せられたもので、あの華かな文化を生んだ希臘に於てさへも不具の嬰兒殺は公然行はれたのである。

これと似たやうな話は古代から各國に行はれてゐた。殊に野蠻な人種の間には殆んど當然のこととして習慣性をなしてゐたものも多い。ヘンリー・ペインが著した「人類進化上の小兒」といふ書物を見ると、さういふ例が澤山擧げてある。それによると、ギリシヤ、ローマ、ヘブリュー、アリアンの各人種を通じて誠に無慘な小兒虐殺が平氣で行はれてゐる。之は主として神に對する奉仕の心から出た犠牲的精神と、もう一つは經濟上の理由との二つの原因から出たものである。吾々は人口問題は近世の經濟組織の缺陷から生れたものとして見た時始めて重大な意義を持つと最初は考へて

ゐたのであるが、既に／＼幾千年といふ昔の原始時代にあつても、經濟上の理由から平氣で人口の制限をやつてゐたことを知つて一驚するものである。彼等は欲しくない時に子供が生れたり両親が病んだり、食物が不足な時に生れたりすると、どし／＼殺して居たものらしい。

回教聖典「コーラン」の中にかういふ章句がある。「貧しさの怖れのために汝等の子を屠る勿れ。われ彼等に食を與へん。嬰兒殺は大いなる罪なればなり」。

更に迷信から生れた嬰兒殺しは原始時代にあつては、一般的の現象と見て差支へない程であつた。そして、その習慣は今日まで引續いて行はれてゐる。

ペルーでは一時に二百人の嬰兒が王の病氣の時に日の神の犠牲として捧げられ、無慘に殺されたことがある。或種のペルー印度種族では神に何か祈る時には自分の子供を殺して、其血で神殿の扉と

御神體の顔を塗るさうである。フランセスコ・ド・ゼレスはこの光景を記して「土人は毎月其子を殺して屏や神體の顔に塗るので、血腥い臭がいつも神殿に漲つてゐる。彼等は猶餘つた血を墓場に運んで、並び立つ墓の上からそゞぐのであつた。」と書いた。

ヴァジニアに近いフロリダの或部落では、酋長は「神の子」として崇められ、その土人は初めて生れた子供は悉く殺して此神の子の犠牲として捧げられる。犠牲が捧げられる日が来ると、酋長は定め場所に腰を下す。其傍には高さ二尺ばかりの木の臺があつて、子供の母はまづ其臺の前にひざまづき乍ら暫く死んで行く子供のため悲しみ、泣くことを許される。すると今度は母親の親類とか友達とかの中で主だつたものが子供を抱いて来て母親と一緒に酋長に捧げるのである。酋長は之を受け、それから一人が其子を抱いて悦びの歌をうたひ出すと、澤山の土人の女共はまわりに輪を

描いて神をたゞへる踊をおどるのである。それがすむと六人の執行者と其中から選ばれた執刀者などが愈々子供を受取つて木の臺の上へのせ首を切つてしまふ。この無惨な儀式は今日も依然行はれてゐるのであつて、同地に行つてゐる佛蘭西人などは屢々之を目撃するといふことである。「墮胎」「人身御供」参照)

クライダーフエティシスミス (Kleiderfetschismus) 衣類的節片淫亂症。

庶物狂崇ともいふ。異性の身體に着けたものに對する狂崇で、例へばリボン、櫛、ハンカチーフ、襦袢、腰巻、靴、洋傘、時計、紙入其他の種々なる庶物を見、或は之れに觸れる事によつて性慾を亢進し、快感を覺ゆるものである。彼の「タコ釣り」と稱する婦人の湯具をのみ盜む痴漢の如きは、即ちこの衣類的節片淫亂症にかゝれる色情倒錯者であつて、法醫學上頗る重要な意義を有してゐる。



妻くげなてい抱を類衣の夫亡
照參條前

クリマクテリアム (Klimakterium) 月經閉止期。

一に更年期ともいふ。女子の生殖腺たる卵巢が萎縮退化し生殖能力を失ふ時期、即ち四十五歳乃至五十歳の間をいふ。

更年期に入つた女性の精神状態は屢々抑鬱となり又た「メラノコリー」状態となる、これは特にその素質を有せるものに主として認められる、それから性慾の亢進することが尠くない、自制心の無いものは、そのために亂倫の行爲に出づることが

クリマ—クリト

ある。併し他の一面から見れば、更年期に入ることは多くの女性に對して幸福な場合もある、殊に高度の「ヒステリー」に悩んだ婦人は更年期に入ると共に其の症状の大部分を失ひ、又た長らくの間、月經障碍(疼痛、強度の出血、精神の變調、偏頭痛等)に苦しんだ者は月經の去ると共に身心の快活を覺えてくる。

更年期に入つた女性をして特に苦惱を感ぜしめる症状は交感神経系の刺戟性興奮より起る處の心悸亢進、心動疾速、心臓部厭重の感覺、疼痛、怔忡等の心臓狀及び血液の上衝、頭痛、眩暈、耳鳴等には交感神経の興奮に起因する末稍血管の攣縮を去り血壓亢進を除くことが肝要である。陰門搔痒症にかゝるのも此時期に多いものとする。

クリトリテクトミー (Klitoridektomie) 陰核剝除。陰核の發達甚しく大なる女子は、多くは神經過敏にして自慰行爲に陥り易く、成年に至りて歇斯帝

利症を患ふる事が少くない。陰核割除は其療法としてどこされる處の外科的手術を指していふ。往古泰西に於ては姦通せる婦人に此手術を行つたといふことである。

クリトリス (Clitoris) 挺孔。陰核 (Klitzler) ともいふ。

クリトリズムス (Clitorismus) 陰核感覺過敏症。

陰核勃起神経の頗る鋭敏なるものにて、甚だしきは女子淫亂症を來すことがある。

コイツス (Koitus) 性交。

二つの性が有する生物學的意義は、生産を目的とするその結合である。故に、新しい生物を形造るために、繁殖の過程に於て男性と女性の性的細胞が結合するといふことが根本的要素である。是を詳細に區別する時は、次の四階梯となる。

- 第一 性交的準備
- 第二 性器的交合
- 第三 性器官的動作

第四 出精

つまり、右四つの階梯が、斯の如き順序に依つて踏まれ、こゝに始めて性交なるものが完了されるのである。

コケツトリー (Koketterie) 嬌態。

異性を索引せんとする處の女性の容姿であつて戀愛技巧の一つである。言葉本來の意味からいふと、嬌態とは生物學の一過程であつて、動物界全體に存するものである。即ち次第に充實状態に達することの精神的方面が嬌態であつて、つまり接觸を確實にする手段である。が又これは男を彼女等自身の方へ惹きつけて、男と女の支配下に持ち來すところの活動であると定義することが出来る。

シュタインメッツは其著「刑罰の最初の發達に關する人種學的研究」の中で次のやうなことを云つて居る。

「眞に嬌態を用ゐる女は、極めて下らない人間の最も野卑なお世辭に快感を以て聴き入り、彼女が日

々憧れの崇敬者を以て包まれてゐるにも拘はらず最も輕蔑すべき人間の慾望を刺戟するやうにのみ骨折るのである。」と、ヨセフ・ペラダンは、その物語の一つに於て、有名な一貴婦人が馬車に乗らうとして、わざと道傍の貧しい男に足を見せびらかす状を書いてゐる。この女はそれと同時に同じ身分の紳士に向けて大膽な嬌態を見せてゐるのである。「弄媚」「足狂崇」参照)

コプロファギ (Koprophagie) 糞尿嗜喰症。

所謂病的異嗜の者と *Σάφ* (*phävery* essen, *Kotessen unsauberer und verwahrloster Irerer.*) 「尿糞」「尿嗜症」参照)

コプロラグニー (Koprolagnie) 不淨物淫亂症。

性的倒錯の一種であつて、月經の血液、精液、糞尿、痰唾等異性の不淨なる排泄物に對して性的享樂を受くるものを *Σάφ* (*Navyeia Wollust, geschlechtliche, masochistische, Erregung durch lechhafte Dinge, Kotlecken usw.*)

コプロ——ケルバ——キトン

ケルバフエティシズムス (Körperfetischismus)

身體的節片淫亂症。

體部狂崇ともいふ。異性の體部の或る特種の局部に性的狂崇をなすもので、例へば、異性の乳房、臀部、手、脛、足、頭髮等を見、或は之れに觸れる事によつて性慾を感じ、勃起射精等を伴ふのである。

體部狂崇の重いものになると、單に之を見、觸れるのみでは満足せず、其の局所を切るとか、噛むとかしなければ満足しないのがあり、最も甚だしきのは、其の局所の肉を喰らはなければ満足しないがある。「窃視者」「觀淫症」「尿嗜症」「不淨物淫亂症」「婦女双傷症」「斬髻漢」等々参照)

キュンストリツヒ・ペフルフトウング (Künstliche Befruchtung) 人工妊娠。

不妊の夫婦中、女子の方に生殖機關の異常があつて精蟲の子宮内進入を機械的に妨碍するがために不妊となれるものには、人工的に精液を子宮内に

注入して妊娠せしめる事が出来る。此の方法を稱して人工妊娠と云ふ。

今日行はれる方法は、性交後コンドーム内に射出せられた精液を採取し、之を體温に温め、特製の注射器にて子宮内に注入し、或は護謨管によつて吹入し、人為的に妊娠を遂げしめるのである。

キエーンストリツヒ・ペニス (Künstliche Penis) 模
型陰莖。

クス (Kuss) 接吻。

接吻とは、他者の口に又た時としては或る物體上に口唇を壓接することであるが、此の所作は友情尊敬、崇敬、別しては愛の徴標としての行爲だと定義されて居る。

口吸、吮口、親嘴等々種々の異稱がある。之れを大別して次の三種とする。その中の二ツは、

- 一、口唇を相觸れあふもの。
- 二、舌の吸合。

一、は通常異性間に行はれるものであつて、二、

は相思の男女に依つて行はれるものである。歐羅巴民族中には處女の接吻は、死人を回生せしむるといふ迷信がある。



南 洋 マ オ リ 土 人 の 鼻 接 吻

ウングアルンのハルマーと云ふ處では、年に一日「接吻市」(Kussmarkt)といふのが開かれ此際若い女性連が美しく花で飾ざられた葡萄酒壺をたづさへ、この年の市につどひ來つた人々に一回の甘き接吻と一獻の美酒とを提供すると云ふ事である。

愛の表徴の美名を謳はるゝ接吻が往々にして全然本能的享樂手段に墮ちることが多い。宛も性交のそれと類推である、加之、接吻が簡易なる丈け愈々濫用が起り易い。佛國では彼の佛國の革命の源を啓いたルイ十四世の頃まで Daiser de Mariée

なるものが行はれた、權力の濫用を以て其の提供を強要された新婦への接吻である、勿論官能的享樂の受用に他ならぬ。(「初夜の權」参照)

我邦農民間には接吻の味を唄つた民謡がある、楨本楠郎氏編「吉備郡民謡集」に採録されて居るから、茲にそれを抜いて見やう。

様が唇(くち)ウ吸や

甘草(かん)か砂糖か

一夜づくりの

白酒か

はたして接吻にはかゝる甘き味を持つて居るや否や吾人は知らぬが、衛生上より見る時は、接吻は最も危険なるものであつて、之れに依り微毒の感

染したる例は頗る多く、歐洲にては法令を以て是を禁じた國さへある。

L

ライヘンシヤンドウング (Leichenschändung) 好屍症。

色情倒錯上より來たれる變態の現象であつて、(Koitus mit einer Leiche, Form der Geschlechtlichen Perversität.) 本症は快樂的殺人の場合と同じく、普通の健康者や遺傳的素質のない者に取つては當然恐怖を伴ふべき觀念が、却つて快感と共に起つて色情を刺戟し、遂に屍體を犯すに至るものである。

其の方法は對者の死亡を目撃して姦し、乃至墳墓より新しき死體を發き出して姦する等であつて、

犯行者は専ら精神病者に限られて居るが、或る場合には迷信からして正當なる者が屍體を姦するものも少くない。

本症の患者の中には生きてゐる婦人は顧みないでひたすら屍體にのみ直接の興味を有つてゐる者がある。その場合は屍體を犯すだけで、これを切り離すといふやうな殘虐を加へないのを見ると、生命無き肉體といふことがこの種の倒錯者の興味を惹くのであらう。そして人間の形を具へて居りながら、絶対に意思の滅びてしまつた屍體は、少しも抵抗の虞がないから、倒錯者の慾望を満足させる目的に適つて居るのである。「偶像姦」参照)

Die sexuelle Befriedigung an einer Leiche, oft mit den scheusslichsten und dem normalen Empfinden widerstrebendsten Handlungen verbunden. Berührt, wie der Leichenfetischismus auf der sexuellen Perversität der Nekrophilie (s.d.), der man gewöhnlich nur bei

schwer degenerierten Individuen begegnet.

之れを東西の文獻に徴すれば「後漢書」に左の文がある。

赤眉發掘諸陵。取寶貨汗辱呂后。凡有玉匣者。皆如生故赤眉多行淫穢。

又「列異傳」には左の記事がある。

「漢桓帝馮夫人病亡。靈帝時有賊盜發家。七十餘年顔色如故。但小冷。共姦通之。至鬪爭相殺。竇太后家。誅欲以馮夫人配食。下邱陳公達議以。貴人雖是先帝所幸。屍體穢汚不立配。至尊。乃以竇太后配食」。云々。「屍愛」参照) レスピツシュリーベ (Lesbische Liebe) 女子同性愛。

男性が女性を求め、女性が男性に對して愛情を起すのは自然の理であるが、女性にして他の女性を慕ふものは女子同性愛 (Urinde) といふ。俗に「レスボスの愛」と稱へる。これはレスボス島の婦人に之れを好む風が大に盛んであつたので、今日

に於ても女子同性愛を一に「レスボスの愛」と稱する因縁である。蓋し此風習はもとエオリアから起つて全希臘にひろまつたのであつて、レスボスの女詩人ザツノオの如きは女性の同性戀愛者として最も有名である。

nach Lesbos, Heimat der Sappo, Unzucht Sapphos Leben und Dichten ist durchaus erfüllt von der Liebe zum eigenen Geschlecht; sie ist mindestens im Altertum, vielleicht aller Zeiten die glühendste Prophetin der weiblichen Liebe, so dass dafür schon bei den Alten der Name „lesbische Liebe“, aufkam.

此の關係は極めて密にして、恐るべき嫉妬情炎等を發することがある。女囚、寄宿舎生活の女性、女工等に此の類のものが多し。彼等は夫婦或は情人としての約を結び、永久貞操を要求し、其相互の情交は、宛も異性者との間に於けるが如きものがあつて、間々相携へて「駢落ち」を爲し、甚だ

しきは、共に「情死」を遂ぐるのもさへあるを見る。「双女對食」参照)

レヴィラトスエーエ (Leviratshe) 逆縁婚。

英語では Levirate といふ。寡婦が、亡夫の兄弟と結婚しなければならぬ風習を云ふ。古代の猶太人間に存した結婚制度であつて、ノイハウス氏は其著「獨領ニューギニア誌」の中で、カイ民族にもかゝる風習があると次の様に述べて居る。「此民族間では、夫が死ぬると、その寡婦は更らに何等の煩勞も無くして、亡夫の兄弟と結婚するのである。之れは、結婚代償——日本の結納金に該當する——を亡夫が彼女との最初の結婚の際に支拂つて置いたからである。それに反して、若しも他人と婚姻を結ばなければならぬ時は、新に結婚代償を——たとへ初婚當時に支拂はれたそれよりも少額であるにもせよ——支拂はなければならぬからである。聞く處によれば、斯して貧しい男子は安價妻を迎へ得るのであると言ふ。云々」

我邦にもこの慣習が今尚は存して居ることは衆知の事實である。これは其家長の子孫を絶さぬために行はれるのに外ならないことは、舊約聖書創世記第三十八章自七至九章に現はれた、ユダの次男オナンの行爲に徴して明かである。曰く、

「ユダの長子エル、エホバの前に悪をなしたればエホバこれを死しめたまふ、茲にユダオナンにいひけるは汝の兄の妻の所にいりて之をめとり汝の兄をして子をえせしめよ、オナンその子の己のものとならざるを知られば兄の妻の所にいりし時兄の子にえせしめざらんために地に洩したり云々」。

リビド—セクスアリス (Libido Sexualis) 性慾。

生殖慾。

人類は其器臓の能動作を完全ならしむる慾望を有つて居る、生殖器にありても亦この轍を離れない。此の如くにして其初は無意識的に生殖器の動作を全からしむる能動がある、之れを性慾と名づけるのである。而して其動作の終了する時は之れを性

慾を遂げたりと稱するのである。

人間の交媾器官は生殖器の一部であつて、交媾機能完了せんとした慾望を名づけて色慾と曰ふ。併して此機能は自然的方法としては男女兩人の肉體的交接に依りて遂行せらるゝものであるが、又他の方法に依つて色慾の満足を得ることがある、之れを名づけて不自然的の色情満足 (Abnorme sexualempfindung) とす。

リーベ (Liebe) 戀愛。

青春期の男女は、何んとなく異性を要求する様になつて来る。此れ方に性慾 (Libido Sexualis) の然らしむる所であつて、この異性に對して起る處の特別の強き性的感情を即ち戀愛と稱するのである。

性慾は常に賤まれ、戀愛は神聖であるとし、幾多文藝の材料を供給してゐるが、如何に美しく装つて見た處で、性慾と戀愛とは同性質のものである。されば性慾は決して賤しむべき性質のものではな

いと同時に、戀愛も亦然りである。

戀愛にも種々の程度がある。片戀と云つて一方のみが盛んに戀してゐても、相手は平氣で他の異性に思ひを焦してゐる場合がある、其場合この片戀をして居る一方が、深窓の處女である時、彼女は自己の戀情を満すことが出来ず、悶々の果戀の病 (Liebesschwindsucht) にかゝる事がある。又相思相愛の樂しき關係を繼續してゐる者でも、一朝相互の戀愛に或る破綻を來し末長く添ひ遂げる事が出来なくなつた場合情死 (Liebes-doppel Selbstmord) をくはだてることもある。

異性に戀着するにも種々ある。甚だ無雜作に戀愛關係となり、又は深き交際の後、始めて成立した戀愛もある。

シエークスピアに斯う云ふ事を云つた「一目して戀せずして誰か戀情を起すものあらむ哉」と、之れ俗に云ふ「見惚れ」であつて、異性を要求して本能を果さんと欲する、自己の善良なる結合者を

大いに要求し渴求して居る矢先に、一見善良と見られた異性に忽ち具體的に戀の發作となつて、思ひ煩ふところのものである。ダンテはピアトリスを往來で瞥見した許りで、高度の戀情を湧起したと云ふ。恚う云ふ點は外人も日本人も變りはない。日本にも數多のダンテあるは疑ひを容れぬ。又「聞き惚」と稱し、唯人々の褒め慕ふ話を聞いて、さう云ふ人なら妾も共に苦勞がして見たい、と云ふのが基いに見ぬ戀に憧れる事があるが、多くは好き嫌の多い容貌に重きを置かれる爲めに、一目せなければ戀と云ふ戀、即ち具體的の戀には成り兼ねるのが普通である。(「ドン・ファン型」参照) 戀愛の起源について回々教聖典「エル・クタブ」は、かういふ事を言つて居る。「兩性具有者であつたアダムは神に反いて罪を犯した叛逆の贖ひとして、その體を二分——即ち二個の原質に分離——されて仕舞つた。一は能動的即ち男性、一は受動的即ち、女性である。男性的原質は最初エーシユ

(Aish)そして女性的原質はエーシャー(Aischah)と呼ばれた。而して、二分されてある時、エーシユとなつたアダムは、上氣させる樂園の最初の陶酔と香ぐはしく酔はず如き喜悅にそゝられ、エーシャーを美しと見た。斯くして彼な始めて女性に對する戀を覺えた」かうして人間に戀愛といふものが發生したのであると。

この話は、恰もプラトンの『戀愛論』(Platon, Symposium)の中に出た原人説話に似て居る。即ち、

「原人の全體は球形をなしてゐて、背中と胸とは輪のやうに連つてゐて、四本の手と四本の足を有してゐた。圓形の頸の上には反對の方向に向いた二つの顔がついてゐて、おなじ一つの頭を載いてゐた。その顔は二つとも細かなところまで同一であつた。耳は四つあるし、陰部は二つあつた。その外すべてこれに準ずるものと思つてよろしい。原人は今我々が歩くやうにして何處へでも歩

いて行つたが、若し大急ぎで行かなければならぬ時には、その四本の手と四本の足と合せて八本で身を支へて車輪のやうに轉つて行く事が出来た。彼等の威力と脊力とは恐ろしく強大なものがあつて、また頗る雄大な觀念を抱懷してゐた。ホメロスの傳へてゐるところによれば、そのうちのエフイアルテスやオチユスの如きは、天に駆け昇つて神々を打仆さうと企てたと云ふ。

そこでゼウスを始め神々が會議を聞いて、彼等の處分法を協議したが、議が一決しなかつた。といふのは、神々が若し會つて巨人族を滅ぼしたやうな方法を用ゐて、雷霆をもつて一撃のもとにこれを絶滅させてしまふのは容易なことであるが。それでは彼等がこれまで奉納して來た犠牲や禮拜が絶えてしまふからである。さればと言つて、神々はまた人間どもの暴慢無禮を忍ぶことも出来なかつた。

そこで、つひにゼウスがいろいろ考へた末に言つ

た、「余は今一つの名案を得た、この方法によれば彼等人間どもを滅ぼさないで、しかもよくその傲慢心をくちぎ、その行動を改めさせることが出来る。それは彼等を二つに斷ち切つてしまふのだ。



戀の斷判

かうすれば、彼等はその力が弱くなると同時にその數を増すから、我々に取つては益々好都合である。そして彼等は二足をもつて直立して歩くやうになるだらう。然も彼等が若しなほ無禮をやめな

いに於ては再びこれを二つに切つて、今度は一足をもつて跳び歩くやうにしてしまはう」かう言つてゼウスは丁度我々が鹽漬けにする果實を斷つやうに、また毛髪をもつて卵を切るやうにして、人間を一人づゝ兩斷してしまつた。それからアポロンをしてその顔面と半頸との方向を變へさせた。これは人間に自分の截斷面を觀させて、彼等に謙遜の心を起させようがためである。アポロンは彼等の創傷を治療し、彼等の顔面を向きかへらせ、切斷した皮膚を、我々が今腹と呼んでゐるところに、丁度囊の口でもくゝるやうに引き寄せて、その中央にくゝり目をこしらへた、これが今我々の臍と呼ぶところである。それから今度は胸部を形成して、丁度靴匠が靴型の上で革の皺襞を延ばすやうに澤山の皺襞を延ばした。けれどもその少しばかりは腹部及び臍部に殘して置いて、原始の變化の記念とした。人間はかうして兩斷せられると、互ひにその半分を求めて兩手で抱き合つて、一體

に還らうと欲つた。こんな風に彼等は互に離れようとしなかつたので、饑餓と怠惰との爲めにどんどん死んで行つた。若しまた一方が死んで、他の一方が生き残つた際には、他の片われを求めて、それが全男または全女の兩断せられたもの、即ち我々の男子又は女子と呼ぶもの、そのいづれであらうともこれを抱いた。そんな風にして彼等は破滅して行つた。ゼウスはこれを見て憐れに思ひ、一つの新しい方法を創つて、陰部を身體の前側に廻はしてやつた。なぜと言へば陰部は始めから外側についてゐたものではないからである。始め人間の種子は、蟋蟀などのやうに、相手の胎内に生みつけないで、地中に生み付けたものであるけれど、陰部が置き替へられると、男性は女性の胎内に生殖するやうになつた。かうして男性は相手の女性を得て生殖するを得、もつて人類を絶滅せしめる事から免れるに至つた。また若し男性にして他の男性と結合することを得れば、大に満足し、

元氣付いて各々の仕事に専心するやうになるのである。かやうに人間には太古から相互の間に愛が存しゐて、二人一體となつて、再びその原始の状態に還らうとするのである。

そこで我々はいづれも、その別々になつてゐる時は丁度割符か、又は一面しかない平目魚のやうなものである。それ故常に他の半分を探し求めてゐる。兩性人、即ちアンドロギュノスと呼ばれてゐた者の兩分せられて出来た男子は、女子を愛するもので、かの多情な男子は通例この種族から出たものである。また男子を愛する多情な女子もさうである。けれども女性から兩分せられた女子は、男子を愛して顧みず、たゞ女子のみを愛する。かの女性の愛者はこの種の人である。それから男性の兩分せられて出来た男子は男子を求め、その少年時代には、その男性の半分として成年男子を愛してその傍らに横はつてこれを抱擁することを好む。この種の人は天性最も男性的であるから、少

年及び青年として最も有爲なものに屬する。彼等を無恥なものやうに言ふ人もあるけれども、それは誤つてゐる。云々』

リーベス・ドツベル・ゼルブストモルド (Liebes-Doppel Selbstmord) 情死。

情死とは主として相思の男女が種々の事情からして、末長く添ひ遂げられない時、思ひ迫つて語ひ死ぬことを云ふのである。英語の所謂複數自殺 (Double Suicide) に該當する。我國徳川幕府の法律には多く之を相對死 (対死) と言つたやうだ。俗に心中とも云はれて居る。又同性色情者に依つて行はれることもあつて、之を同性心中と稱へる。『御定書百箇條』第五十條の「男女申合相果候もの事」の條に江戸時代の情死者に對する罰則が次の如く載つて居る。

- 一 不儀にて相對死いたし候もの 死體取捨爲吊
- 申間敷候 享保七年條 但一方存命に候はゞ下手人
- 一 双方存命に候はゞ 三日晒非人手下

- 一 主人と下女相對死いたし主人存命に候はゞ非人手下

然して寛政五年二月某日情死せる男女を大阪千日墓所に晒した處、女の多毛が評判となり見物が夥しかつたので其後心中の晒ものが止んだ、と『南水漫遊拾遺』にある。當時情死者の屍體を丸裸にして晒したらしい。扱て情死の最重要の原因は、前述の如く戀愛關係にあり、戀愛關係によりて異性二人が相對自殺せるを自殺の常型とし、他を變型と見做すを正當とする。されば戀愛關係を離れた女同志、男同志、其他の複雑自殺を情死と云ふは不穩當である。戀愛の情は東西古今を通じて人類に存する本能である。然しながら情死を遂ぐるものは一部分に過ぎない。是に由りて之を觀れば情死は戀愛のみにては成立せず、別に之を抑制し、束縛する事情があるに相違ない。これを次の如く三種類に別つことが出来る。

- 一、戀愛と道德との衝突

情死者は戀愛を重じ、道德を破る結果、生存の餘地を失ふに至るのである。

二、戀愛と經濟との衝突
自己の社會的位置を顧みず、戀愛を重じ、財を捨て、人の信を失ひ破滅の域に陥るのである。

三、戀愛と家庭との衝突
家格、家風、婚姻の習慣等を離れて戀愛の關係を遂げんとすればこゝに衝突を生ずるのである。
第一類は共通し、第二親は藝娼妓との關係に多く、第三類は普通娘との關係に多い。情死を執行するには以上の三因に尙ほ他の關係を有するものであらう。

一、衝突の程度の強弱

二、主體の性質

三、年齢と境遇の影響

戀愛と道德、經濟、家庭との衝突強く、之と調和する勇氣と知識とを缺き、青春の年齢にして境遇も亦之を誘導すれば情死を執行するものであらう

か。否、必ずしも然りと云へない、此條件は異性雙方の間に存するを要する。同時に熱烈の情極度に達し死の外にとるべき道なきに至りて初めて情死の現象を起すのである。

世界歴史上最古の情死は希臘神話に現はれたピラムスとチベスとのそれであらう。

昔バビロンにチベスと言ふ娘がゐた。隣の家にはピラムスと言ふ若者がゐて、思ひ合つてゐたけれども娘の親父が結婚を許さぬので兩家の間の塀の穴から、果敢ない思を語り合つてゐたが、遂に時を約束してバビロン市外のニヌスの墓の桑の樹の傍で待ち合はせる首尾となつた。女の方が先に行つて待つてゐると獅子が突然顯はれて來たので急いで逃げる拍手に面巾(ベ)が落ちた。獅子は面巾をすたく／＼に引裂いた。所へ來たのはピラムスである。これは必然女が獅子に食はれたものと早合點して自殺した。そこへ戻つて來た女は男の死んでゐるのを見て跡を追つて又自殺した。其時傍にあ

つた桑の實が血潮を浴びて赤くなつた、而してその桑の樹は今に到るまで赤黒い實を結ぶに至つたといふ。この情死をシェイクスピアは「眞夏の夜の夢」に換骨脱體して用ゐてゐる。

我が國史上、情死の嚆矢と云ふべきものが、上古時代に僅かに一つ見られる。

然るに奈良朝平安朝時代に至つては、情死と認むべきものを當時の歌書及び物語の中に發見するところが出來ない。たゞ「大和物語」の中に記せる少女塚傳説は、二人の男が一人の少女を戀ひ慕つたので、少女はいづれの意にも應じ難く入水したのを、二人の男もその跡を追ふて投身したといふことが記してある。これは「萬葉集」にある茅渚男の情話の轉訛であるが、決して合意の自殺では無く、言はゞ殉死と云ふべき者であるから、固より情死と看做すべき傳説でない。

王朝時代より鎌倉時代に至る迄の間にも情死らしい事實は無いが、南北朝時代に至つて始めて情死

の一實例が現はれた。それは「吉野拾遺」の中に見える記事で、里村主税の若黨と内侍の女童とが身の措き處のないので、山林に分け入り、共に互に伏して自殺したことである。この兩人が「此世こそ、つたなからめ、後の世は久しう」と語つたとあるのは、後世江戸時代に於ける心中思想の先驅である。後の世までも添ひ遂げるといふ二世の契りの思想は南北朝の時代より漸く開けてきたが併し江戸時代の初期に至る迄は再び情死者の跡を絶つたのである。

江戸時代に於ける情死の初とも云ふべきは、寛永十七年、伊丹左京といふ美少年が自分を戀慕した細野主膳を殺して切腹を命ぜられた處が、左京と愛し合つた丹川采女といへる少年も共に自殺したことで、此の事實は「漢屑物語」に詳記されてゐる。併しこれは男色關係から起つた同性の情死であるが、相思相愛の男女間に死を共にする者の現はれてきたのは實に延寶時代の頃からである。そ

の中、最も早く人口に膾炙されたのは白井権八と芳原の遊女小紫との仲である。

リースビツセン (Liebesbissen) 愛咬。

抓りや紫、喰ひつきや紅よ

色で仕上げた、このからだ

といふのがある。此の如き行爲は愛人同志の間に能く演ぜられるものである。印度の婆羅門神學「迦摩須多羅」中に這般の事實が詳細に述べられてゐる。そしてまた「斯く互ひに咬み合つて生じた處の疵傷の痕をば愛人同志が互に見せ合つて、その愛情を久しく持續する」とある。

前述の如き愛咬は、言はゞ軽度のザダイスムスに過ぎないが、併し異性の咬嚼することによつて絶大の性的快感を覚え、慾情を満足するが如きものは慥かに變態性慾に屬する。「能動的淫虐症」参照)

リースシュウインドズフト (Liebeschwindsucht) 戀の病。

愛癆。Liebe「愛」、Schwindsucht「癆」、「瘦削」の意から出た語である。

片思ひや失戀よりメラノコリー (Melancholie)、または神經衰弱症を惹起して身體が枯槁憔悴し或は之より更に結核病に感染して瘦削衰弱するものが即ち所謂戀の病である。

歴史上、戀の病を全治せしめることによつて名高い醫者は、ヒボクラテースとエラジストライトスで、前者はマケドニア王ペルチツカスの戀の病を一度に治癒し、後者はシリア王子ドン・カルロスがその父王の妾の美貌に戀ひ焦れて病となつたことを看破して兩人を結婚せしめ、拭ふが如く王子の病を全治せしめた。

片思ひや失戀に因る悲哀煩悶から身體が弱くなつて、結核病に侵されることの多いのは明白な事實であるが、江戸時代に於ては、今日謂ふ處の肺結核、即ち漢方の「癆咳」「癆瘵」が戀の病の別名のやうになつてゐた。寛文版の「花花草草」に、「癆瘵、

戀也」と見え、「新色三のE」には、「思ひきれぬわくの絲の亂れ、心の結ばれば、慕ふ戀男にとかさねば癆咳と云ふ病なり」といひ、「吉原徒然草」に、「寛永の頃、おしなべて二三日、人の咳氣煩ふこと侍りしとぞ、彼の若衆女を見たがりし戀風なりと云ひ侍りし」とある。

我國の俗諺に「お醫者さんでも有馬の湯でも、戀の病は直りやせぬ」といふのがあつた、事實この病は、その原因が失戀或は片戀に由來するのであるから、結婚を措いては他に良い療法がないのである。「戀愛」参照)

ルストモルド (Lustmord) 淫樂的兇殺。

性慾の満足或は性的感興を求めんがために異性を殺害するもので、精しくいへば、之れを姦淫しつゝ殺害するもあり、姦淫して後に殺害するもあり、或は單なる殺害に止まらずして、内臓剔抉や、四肢截斷等の殘虐を行ふもあり、更にかゝる肉片血塊を喰ふもあり、玩ぶもある。後者の如きを喰人

症といふ。専ら淫虐症の人間によつて行はれる。

〔「屍姦症」「吸血症」参照〕

M

メーチヘンシュテツヘル (Mädchenstecher) 刺嬢

漢。

刺嬢漢とは、途上に遭遇せる未知の婦女を襲うて傷つけ、快感を覺ゆる處の淫虐的行爲をいふ。専ら色情倒錯症の男子に依つて遂行されるものであつて、古今東西を通じて尠く無い。茲に極最近我邦にあつた稀有な實例を挙げやう。去る七月九日の讀賣新聞に載つたもので、見出しは「縁日の女を惱す慶大生——霞町で一晩に六人の腰部を斬つて捕はる」といふのである、其報道に曰く

二三日來麻布六本木署では麻布區霞町八戸田け

い方同居慶應義塾豫科三年生竹崎進(三〇)を引致取調べ中であるが、進は去る六月十八日霞町鬼子母神縁日で同區材木町四一大川源藏妻みよ子(二七)を安全カミノリの刃を以て腰部に長さ三寸深さ二分の傷を負はせたのを始めとし、同夜の内に同區櫻田町一八田中きん子(二五)同町二一某料理店女中川崎はる(二八)同區斧區一二〇石崎ひで(二九)同町同番地齋藤さよ(三〇)同町一一二山田きん(三一)の六名の腰部の着物を切り或ひは臀部に傷を與へた事實を自白したものである、進は島根縣津和野藩士の令息に生れたが故あつて幼時父と生き別れ、目下母親ととも前記叔母の家に同居してゐるが、家庭が嚴格なため變態的な傾向に陥つた上、不良青年の仲間入りをし遂ひにかゝる犯罪を行ふにいたつたもので尙ほ餘罪ある見込みにて嚴重取調べ中である。云々

〔能動的淫虐症〕〔性的犯罪〕参照)

メーチーヘンハンデル (Mädchenhandel) 少女賣買。少女賣買とは、少女が、それ自身の親に依つて、或ひは道徳的感情の微塵もない他人に依つて金錢の爲めに、賣淫を營むべく取引されることである。

メーチーヘンエーガー (Mädchenjäger) 女追ひ。色情狂的現はれの一つで、絶えず婦女子の尻を追ひ廻はす人を指していふ。其變態性慾的なものは婦女を汚濁し、又は傷けることがある。〔摩擦狂〕〔刺嬢漢〕参照)

マンマ (Mamma) 乳房。

廣義に言へば、乳房に二様の意義がある。一は無意味なるものであつて、他の一は意味あるものである。前者は男性に存する乳房であつて、後者は女性の有する乳房である。

女性の乳房は生殖と密接なる關係があつて、之れを生殖器の一部とさへする者がある。故に單に乳房と言へば、女子の乳房のことであつて、性的特

徴の一つで、女性美を助け之れに依りて異性の目を引くところの、誘引器官となるものである。されば中世紀の終りから文藝復興期内にすつと入り込んだ時代には、歐洲に於て、女子は着物の前、胸の部分を思ひ切つて深く裁ち下げ、従つて乳房は全部露出して、恰かもそれが全世界の注目を誘はんと欲する商品であるかの如く陳列して見せた奇抜な流行があつた。

女子の乳房は、前胸壁の第三肋骨から、第六肋骨に跨つて、廣き面積を占め、其の中心は第五肋骨に對して居る。乳頭が即ち其の中心で、それから圓く周圍に擴がつて居る。

幼時は僅かに隆起する小突起物であるが、十四五歳になれば發育し、妊娠すれば著しく増大するものである。乳房の中央突出せる處を乳頭と云ひ、其の周圍の暗褐色なる部を乳暈と云ふ。

而して乳頭は神經に富み知覺甚だ鋭敏である、そして子宮と連絡があるに依り、乳房の激烈なる刺

戟は、子宮の收縮を來たして、妊娠の際には流産を來たすことがある。又乳頭には數多の小孔があつて、乳汁を分泌する乳房の皮下には多くの脂肪組織があつて、其の中に乳線がある。乳房は妊娠末期より授乳期中は、絶えず乳汁を分泌して輸乳管に送り、輸乳管は之れを集めて乳頭の毛孔から排出するのである。

乳汁に就いては次の如き興味ある神話が物語られてゐる。

太古天神ゼウスの子に、ヘルクレスといふ嬰兒の頃より強力の子供があつた。母の女神ユノーは生さぬ仲であつた爲め、兎角嬰兒ヘルクレスを虐めた。然し無邪氣な子供の事として何の感じも無く、ある時ユノーの假睡してゐる膝に登つてその乳を強く吸ふた。ユノーは不意に夢を襲はれたので驚きの餘り嬰兒を強く投げ出した、其瞬間に、彼女の胸から迸つた乳汁が、天に懸つては光り輝く銀河となり、地に落ちたは美しい白百合となつて

咲き出でたと云ふ。



照参文本 [來由の河銀]

さまざまに變化するが、大體に於てこれを五種に

乳房の形は年齢結婚妊娠分娩及び授乳の有無、他の事情に依つて

區別することが出来る。即ち圓盤形、半球形、圓錐形、鐘形及び播形等で、處女の乳房は、半球形で一名ヅキーナ型と云ふ。一般婦人の乳房もこのヅキーナ型を以て理想的の型とされて居る。勿論民族にも依るが、風俗及び習慣に依つて、胸部より來たる刺戟を、腰部以上として、これを秘密にする民族がある。例へば支那の廣東にては、腋窩を秘密にして異性のそれに對するときは、生殖器以上に充奮するといふが如き此の類である。歐洲にても佛國では十七世紀より十八世紀の初めまでは乳房を神秘的のものとして、陰部同様に恥ぢたことがあつた。嘗つて佛國の恐嚇政治時代に時の巨頭マラーを刺殺した少女シャロット・コルデイが、法廷に引かれて審問を受くる際、守衛が法官の命令で、コルデイの懷中せる書面を奪はんと、其の胸襟を披いた時に流石のコルデイも顔を赤めて、打ち伏したといふことである。それと反對に前にも述べた如く、乳房の美を殊更に表示し

其最も尊しとする特性——其硬いこと、其誇りかな弾力性——をば極めて目立つやうに示威するため、時としては乳房に金剛石を附けた輪や冠を飾り立て十字架其他の裝飾で重みを持たした鎖を兩乳房の間に渡して結付けさへもした時代がある。カタリーナ・フォン・メデイシーは其宮廷裡の貴婦人連のため、乳房に注意を集中する一服裝を案出し、上着の左右に圓形の切込み窓を設けて、其處からは乳房ばかり、——さして乳房だけは全部完全に、而かも多くは裸で露出するやうに仕立て、さもなくば、外見實物と少しも違はないやうに模したものを是に附したといふことである。宮廷詩人クレメント・マロトは其詩『バルプちゃん』とハン「バルプちゃん」が、胃袋の邊迄しか届かない祭典衣裳を着たのを見れば白い肌は

424

よく磨かれたダイヤモンドの如く輝き煌はぬ。ハンちゃん、質素な着物に體軀も乳房も固くびちんと縫ひくるまれば私は言ふ。おや、おや、お前は匿れたね！ お前の四肢を、壓迫してゐる灰色は、永久の火を埋らせてゐる灰だよと。乳房は一生涯の間に種々に變化するものであつて、其の變化が、恰も顔の變り行くと同一である。これは餘り人の心着かざるところであるが、法醫學者の目より觀れば、乳房は婦人の第二の面貌といふ格にして、嘗だに其の性的行爲と關係するのみならず、婦人の性格及び其の精神状態とも關聯

して、容易に變化することが了解される。斯かる故に乳房に依つて、處女と非處女とを區別し得ることは之れが爲めである。

土俗學上から見た乳房といへば三宅島の女兒等に玩ばされてゐるオンバツコ人形のことと想起される。この人形のことについて、藤木喜久麿氏はそ



大の「三宅島の玩具と遊び」の中で次の如く述べ

て居る。

「オンバツコ、これは此島の南端、坪田村だけに有りまして他村では見當りませんでした。十歳位の女の子が二三人も寄ると「オンバツコシンベア」と云つて路端や庭の隅等に藁を敷いてこの人形を持ち寄りたり、古布でもつて其場で稚ない手付き

で作り上げて、所謂おばさんごっこをして遊ぶのです。

この人形の特に變つて居るのは、古浴衣等の小切れで四寸前後のお猿さんを作つてその頭にキツネと云つて織物の機を織仕舞に出来る糸の束をとち付けて細竹を筭にした房々と大きな筭巻きとか島田髷に髪を結んで、其胸部には必ず白木綿で二つの大きな乳房を作つて縫ひ付けてあることであります。一目見たら誰でもこの稚拙な裸人形からも、髪の毛の房々と長い、體格の豊かに美しい島の女

の特色を胸裡に描く事が出来るかと思はれます。この裸體のオンバツコに着物を着せたのもありません。又首だけを作つてあとは布の餘りを長く下げたまゝの手も足も無い者に着物を着せた幼稚なオンバツコでも、其の胸に乳房を付ける事を決して忘れません、そして着衣のものには小さな赤坊を作つて胸に直に付けて抱かせて着物を合せて前掛の紐で其上を結んだ土地の風習そのまゝのもの等

がありました。

こんな小さな古拙な人形から其の土地の風俗や習慣が窺はれた事は私の心を非常に狂喜させて呉れました。云々」

圖で見らるゝ如く、この人形は二ツの完全なる乳房を持つて居るのがその著しい特徴なのである。それから吾人の最も奇抜と思つたのは大正十三年三月一日發行の「丸之内新聞」第五十九號に日比谷公園國際の割烹旅館草津がその廣告に左右の乳房を露はした西洋裸體婦人の寫眞を挿入したことであつた。

半陰陽のものを、乳房で判定して男か女かを定むることは出来ぬ、それは男の半陰陽で女性の乳房を持つて居るものがあり、女の半陰陽で男性の乳房を持つてゐるものがあるからである。

然し、女か男か一寸わからぬ屍で、乳房の状態でその性を定むることの出来る場合がある。又性慾の刺戟物として、若しくは同性愛の目的に乳房を

用ふることがあるから、この場合には乳房の法醫學上の意義は重大である。

マルサシアニスムス (Malthusianismus) マルサス主義。

英國經濟學者マルサス(一七六六—一八三四)の唱へたる主義。即ち人口は食物に依つて制限せられ、且つ食物の増加に伴ひ繁殖するものなれば、人口の増加を積極的に制限し食物の存在額に適應せしめんとするもの。(「新マルサス主義」参照) マンリツヒ・プロステイチユチオーン (Mannliche Prostitution) 男娼。男女郎。紫帽子。陰舞。娼童子。娼褌子。

男娼とは後庭を鬻いで娼妓の如く之を専門に營業する男子の稱である。かゝる風習は古來より何れの國にも行はれたることであつた。歐洲の大都として、將たまた文明の中心として、世界に其の偉を誇れる倫敦、巴里、伯林、維納、瑞西のストツクホルム、丁抹のコツベンハーゲン、諾威のクリ

スチアナ、和蘭のアムステルダム、露西亞のモスコイ等にも盛んであつて之れを買ふものが多かつた。

デュレンの著「英國に於ける性的生活」に依れば「婦人のための青樓」(Bordell für Damen)と云ふべき Fleischnisches Institut があつて、此處に訪れ来る婦人には、地位及び財産のある夫人もあれば、唯單に「愛の友」を得んとする未婚の女性もあり、いづれも假面を以て顔を隠し、薄暗い窓牖より部屋の内居るあまたの男娼を瞥見して品定めをする。美しく着飾つた年の若い男娼はカルタ遊びをしたり、或はバイオリンを奏して居るものもあり、また體格の見ごとな男娼は裸體姿のまま角力を取り或は沐浴などして、その逞ましい豊かな男性美を示してゐる者もある。此等の男娼の中より自分の氣に入つた相手を見立てた女客は、窓に備へつけてある呼鈴を鳴らして、仲居とも云ふべき女を呼び、己れの好んだ相方を定める

のである、もとより假面を着けて居るので、その顔の分りさうな筈はなく、一時間位で歸るのもあれば、一夜を明かす者もある。女客の中には七八十歳の老婦人もあつて二十歳前後の若い男娼を相手にするものもあるといふことである。

此の男娼は更に歐洲より西漸して、米國の東海岸



支那の相公「支那の相公」

に傳播したのは、獨立戦争の以前であつたが、今では各地に流行し、桑港、紐育の如き都市には巴里の如く之を專業とするものがあると聞く。支那の上海には男色を業とする賣淫及び青樓が今なほ盛んに繁昌して居る。彼地では之等の男娼を「相公」(コイヌ)と呼んで居る。

中野江漢氏の「支那の賣笑」に

熹宗の時北京城内に「花柳街」「胡同巷」といふ二つの廓が出来た。前者は其門上の額に「不夜宮」と認め、娼妓の媚を賣る處とし、後者の門城には「長春苑」の額を掲げて専ら「相公」即ち美少年の男妓を集め、客を招いで盛んに風俗を亂した。云々と述べてある、そして序に述べて置くが、前清時代には「相公」(シイヌ・コオヌ)即ち「龍陽」(ロオヌ・ヤヌ)と稱する男妓を著ふる家を「清下處」(チヌ・シイヤ・チュー)と稱し、班子に準じて課税をした、「樂戸捐章」の中に一項が設けてあつたが、近來男妓の自滅と共に削除された。と、茲に同書に載つて居る「叫相公(竹枝詞)」を引用して置く。

厚底靴兒イ于行

入門一笑最關情

三拳勝兩匆匆去

マンリ

十吊錢改日清

(如當時付局錢係短客並且人謂外行也)

我邦で男娼の弊風の殊に盛んであつたのは、徳川時代であつて、戰國時代には一般に、男色(Derastie)が愛せられたので、その餘風に伴つて起つたものである。

元祿、明和の頃に至つては、「かげま茶屋」といつて、娼樓の如く、金に代へて其の後庭の淫を賣る、優柔女の如き若衆、蔭間なるものが顯はれた。此の男娼、蔭間を買つて、不義の淫樂を貪ほつたものは、諸大夫、旗本、僧侶に多く、其當時、流行を極めた「向ふ通るは蔭間ぢやないか」の手鞠歌にても、其の流行の度を知るべきである。

而して、其の流行は、皆風俗墮落の結果であつて、女色を禁じられたる者か、或は女色に飽きたる、珍奇を好む淫蕩の反映と見るべきである。「洞房」蔭間「鶏姦」参照)

マンリヌムス (Masochismus) 受動的淫虐症。

この名稱は、奥國維納の小説家ザツヘル・マゾツホ (Sacher Masoch) の名より出でたるものである。彼は眞面目に斯かる色情倒錯の事實を小説に書きたるのみならず、作者もまた此の症を有して居た。我國でも谷崎潤一郎氏が、さかんにマゾヒスム者を題材にして小説を書いて居る。「痴人の愛」、「富美子の足」などはその尤なるものであらう。

此の症は異性から苦痛を受けて性的享樂をなすもので、この病癖の所有者は主として女性に多い。それは女子は一般に其本性として受動的であつて或刺戟に對して其苦痛を忍び得る素質を備へて居るのみならず、進んで暴力に服し苦痛を忍ぶやうになるものであるからである。

殊に我國の女性の如く、昔より受動的の美風の下に養育せられ來つた者は、一般にマゾヒスムスの性質を有するものである。この性慾的隷従は、心理學的に云へば、一層重要な意味がある。即ち

見いだす場合が少くない。男は女を虐待し、女は男に虐待されるための夫婦喧嘩なのだから、その目的さへ果たされれば、喧嘩はおのづから圓滿に終局する。もし第三者が喧嘩半ばに飛び込んで、

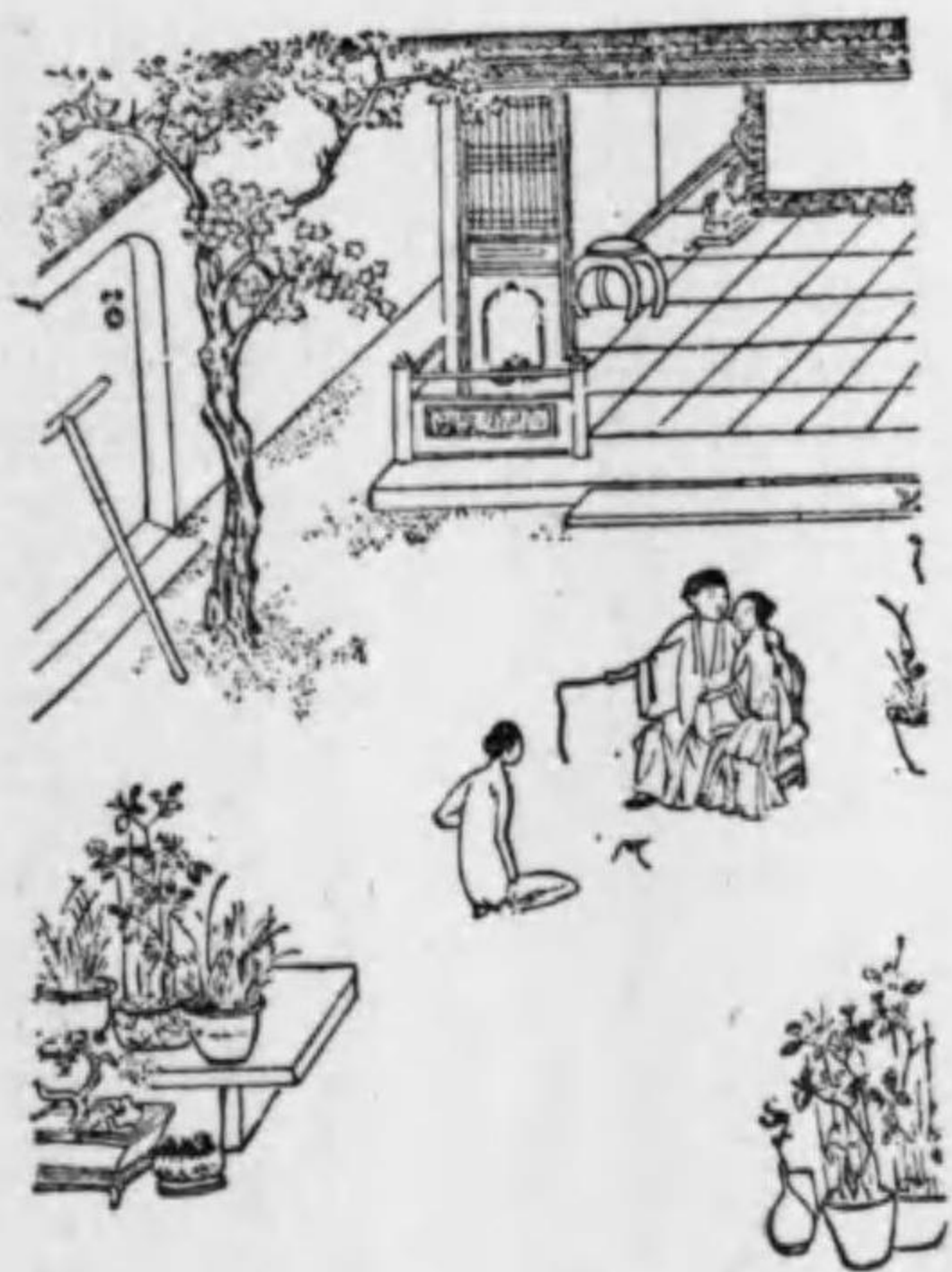


マゾヒスムスの男「痴人の愛」より

水をさすやうな事があつては、彼は夫婦から感謝されるかはりに反つて恨まれるかも知れない。フェレはアルゴフキリイ (Algophilie) といふ言葉がこのマゾヒスムスに適用して居る。そして又

メノラー—メンシ

性的に飽くことなき婦人の魅力に陥つた男子は、情慾が強照なる場合、換言すればフェティツシユ的感溺となり、道徳的抵抗力が微弱となつた時は重大なる罪惡を犯すに至るものであるからであ



マゾヒスムスの女「金瓶梅」より

る。

昔しから「夫婦喧嘩は犬も喰はない」といふ諺がある。男のザディスムスの傾向と、女のマゾヒスムスの傾向との交渉が、その一致點を夫婦喧嘩に

シュレンク・ノツィングは刺戟された苦痛に依つて受ける性的快感にアルゴラグニー (Algolagnie) なる言葉を採用してゐる。「鞭打」「能動的淫虛症」(参照)

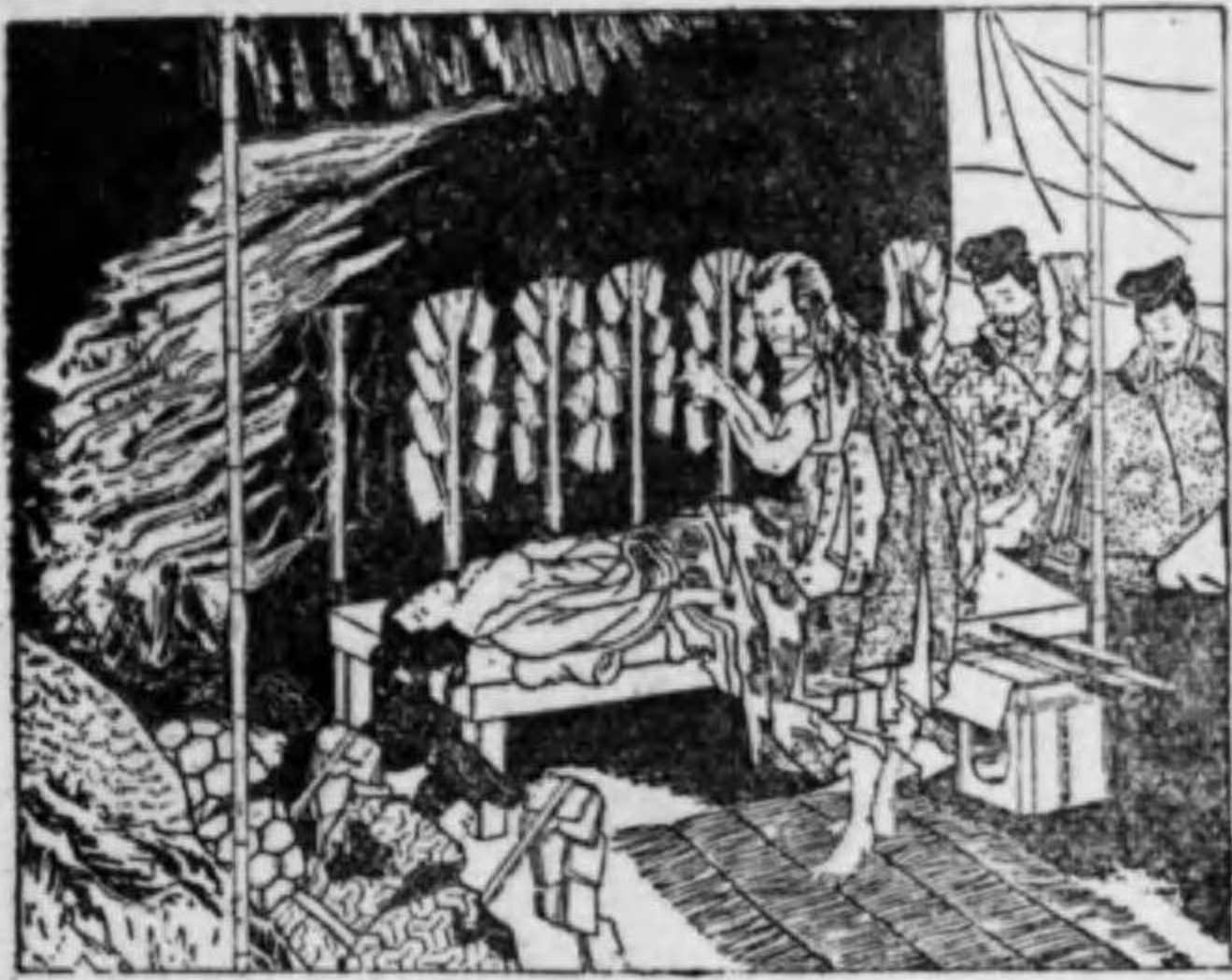
メノラギー (Menorrhagie) 月經過多。

月經の量が通例の人より多くあつて、久しきに亘り健康を害する障碍症である。

メンシエンオツプエル (Menscheneopler) 人身御供。人體犠牲。

食人風俗 (Anthropophagie) の流行した社會に在りては、當然の結果として人體犠牲の風俗が之れに亞いで起るのは自然の事である。蓋し人體犠牲とは申迄もなく人間の生性を以て鬼神に供して其崇信の敬意を表するもので、本邦にいふ人柱の如きは即ち是れである。但し人體犠牲の中直接に食人風俗に關係なくして起つた事もあるが、其大部分は確かに其淵を茲に發することは疑ない。今少しく茲に其詳細なる分類を擧げて見やう。

- 甲、死者に食物として人體犠牲を供するもの
- 乙、神前に食物として人體犠牲を供するもの
- 丙、神前に敬意を表する爲め人體犠牲を供するもの
- 丁、死者は神前に怨を晴さしめん爲め人體犠牲を供するもの



戊、首狩の風習
 人、人體犠牲
 身、と殉
 御、死等であるが、迷信、禁厭呪術其他惡神の怒りをや

らぐる爲め人體犠牲を供した事もある。而して犠牲者は専ら小兒、婦女等が多かつた事は恰も食人風俗に於けると同様である。尙ほ農民風俗として豊作を祈る爲めに、田植に際して穀神の祭壇に女子を犠牲にしたことがある。上の圖は瀧澤馬琴の著作なる『皿々郷談』に載せた下總國印旛郡彌富村大字坂戸の坂戸明神の人身御供の挿繪である。彼の稻田媛の神話の如き、とりも直さず媛を穀神の犠牲として供へた意で、我國の各地に残つてゐる嫁殺し田の傳説は、即ち其確實性を裏書するものと考へる。

メンスツラチオン (Menstruation) 月經。月役。

(ついで)。廻り(めぐる)。經水。猿猴。天癸。月華。手桶番。お客其他種々の異名がある。

女子の生理的特徴の一つで、子宮より出る血性の排泄物で、一般女子は春機發動期より老年期に至るまで、四週間に反覆して來るものである。即ち四週目に一回づゝ卵巢中グラーフ氏腺といふも

のが破裂して、其中から一個の卵子を吐出する、これが輸卵管を通つて子宮腔内に達し、子宮内に充血を起し、其結果子宮内面に血液の滲漏を起し、腔内に液下するに至るのである。これを吾人は月經と呼んで居る。

初經來潮は一般に十五、六歳であるが、中に早熟のものには十二、三歳で既に月華を見るものもある。そして其閉止期は通例四十歳乃至五十歳とする。古來矇昧の人は、女子の月經を以て不淨となし、月經中の女子を別の小屋に送る慣習があつた。我國でも、今尙ほ、月經中の女子を別の小屋に入れる風習を存してゐる地方がある。かゝる小屋を其土地の人々は他家(ヤ)或は別家(バツ)など稱して居る。この月經不淨觀はやがて佛教の『血の池地獄』となつて現はれてゐる。

南洋諸島の風習には初經來潮の娘を祝して『月華祭』なる盛宴を催ほすといはれて居る。我邦に於ても古來、赤飯をたいて之を祝つたことがある。

然し現今は或る地方を除いた以外餘り此風習を見掛けない。

月經を取扱つた小説に伊藤鶴子作の『血風呂』なるものがある、今其一節を引用して見やう。

『大理石の浴槽、大理石の柱、大理石の流場、大きな鏡が瓦斯の光を受けて血腥い湯氣の濛々する中に、時々大きな刀が互ひ違ひに空に打合ふ様な聞きを見せて居る、どこかで微かに呻き聲が、幾つも重なり合つた様に聞こえたが、又自分の自體の組織分子の一つ／＼が嘔き合つて、自分にさう聞こえたのかとも思はれた、キヤツと云ふ若い女の悲鳴が耳を貫いた、助けを呼びながら逃げ廻る音が手に取る様に聞こえた、跳く音が聞えた、だん／＼細くなつた泣聲が、前に聞こえた呻き聲と一所になつて、耳から頭の中へ、細い／＼血管の一筋々々を傳はつて、流れ込み浸み込む様に思はれた。スーッと目の前に立つた物象がある、女の後姿だ、黄金の髪を肩に波打たせた、全裸體の背か

ら腰を通して、ひかゞみ迄の間に、何とも云へぬ肉着と肌色との美しさを見せて、一足々々宙に浮いて、浴槽の方へ近づいた、淡桃色の湯気が、神秘の帳の様に腰を包む、爪先から足頸、膝、大腿、腰、腹、胸と順を追つて、浴槽の中に隠れて行く、ねば／＼して血の波が、孕んだ鳩の胸の様な乳房を大きな唇で接吻する様に高くなつた、そして大理石の滑かな浴槽の縁を傳はつて、どう／＼と幾筋かの眞赤な瀧が懸つたと見ると、無雑作に拗ひ上げて、ぶるん／＼と顔を撫でた、そして、引入られる様な美しい顔を、血みどろの上向きに、鏡を睨めてニツと白い歯を見せた、身體が剛強つて何とも云はれぬ無形の力に縛られながら、誰やら耳の傍で、デザレー伯爵夫人だと教へたのに首肯した。

背や脇の下がひやりとして、應子は慄と目を覺ました、グツチヨリかいた冷汗は、何世紀の頃か歐羅巴に妖艶の美人と歌はれたデザレー伯爵夫人が

数多い青春の乙女の生命を奪つて、血風呂に漬かつて玉の肌の誇りを満足したとの話を、其儘夢に見たのだと知つた。云々

これは十五歳の處女が初經來潮の不安と恐怖とにおびやかされてまどろんだ夢の描寫である、大抵の處女は、此の小説に現はれた女主人公應子のそれと同じ様な恐怖感念に捕はれるものである。されば此期に達した娘持つ母親は豫めそれ等の智識を授けて置く必要がある。

越中國では、子女成女期になれば胸中に小蛇入りて血池に棲み、其血月毎に流れ下るを經水とすと云ふ俚傳があるさうである。由來女に蛇は付き物であつて、古代月經の起源に付ては、之れと同様な信仰が何れの國民にも持たれて居たやうである。

ポリビヤの「チリグアノス」族では、月經を蛇の仕業と考へ、月經が始まると、老女が娘を傷けた蛇を探す爲めに棒を持って附近を走り廻ると云ふことである。

南濠の「ポルト・リッコン」種族の間では、月經は蜥蜴が男女間を遠ける爲めの仕業であると思はれた。此意味が多少轉じて、ポルトガル地方では、月經間は蜥蜴に嚙まれると思はれ、此危険を避くる爲めに、婦人は月經期間は股引を着用する。ブラジルの或地方では蛇の攻撃を受くると云ふて月經期に入つた女は森の中へは行かない。

又亞弗利加のバサトス地方では月經期に際しては土製の蛇を持つて舞踊する習慣がある。其他希臘の物語中には月經期の皇女は太陽の光りに觸れないやうに注意せなければ蜥蜴になると言はれ、獨逸に於ても十八世紀頃迄は月經中に婦人が死せば埋葬後其頭髮が蛇になると信ぜられて居た。

南方熊楠氏の説に依れば、我國古代の女子は未婚既婚を問はず年頃に成れば、涅齒するの風があるが、之れは月經の不淨を齊忌する意であるのとことである。

花柳界の婦女はすきな客を呼ぶ呪として月經の折

の汚紙で小捻を製して人形を造り、その頭に赤蝦夷の尻尾の肉へ劍を刺しておく風習がある。

支那では處女初經の血液を不老長生の藥とすといふ。その經血の採り方と秘藥の製方は井上紅梅氏の「閨丹術」中に詳記されてある。之れは決して支那人の好色なるを意味するものに非ずして、彼のヘモグロビン(素血)が人體を強壯にする効果あること、處女の血は一種の醫藥的價値ありとの迷信に基いたのに外ならないと思ふ。

メンストラティオ・フィセリア (Menstratio vice-ria) 代償月經。

月經は、成年女子に於ては、經閉期 (Klimakterium) に至るまでは、妊娠、哺乳或は或る病氣等の外に閉止することなく、必ず一ヶ月に一回づゝ來潮するものである。然るに代償月經にありては、本來の月經即ち子宮粘膜炎より出血を缺き、其代りに月經の來潮する時期に於て、鼻腔、口唇、口腔或は腸等より出血するものであつて、此等の出血

は、月經の代償として起るところのものである。
〔月經〕参照)

メルキン (Merkin) 局部義毛。

局部義毛はもと陰部無毛の婦人の爲めに製作されたものであつて、我國では古來無毛の女子を迷信的に嫌つたので秘かに之れが使用されて居た。

これは無毛者を娶り、若くは之と接する時は不運を招くべしといふ俗諺に基くのであつて、かゝる女子はこれを耻づること頗る切にして、之れが爲めに屢々水死を遂げる美人すらある。

英國ではメルキンなる語を我邦の吾妻形に類する淫具の名稱として居る。〔恥毛〕参照)

ミカオーペラチオン (Mikaooperation) ミカ手術。

永井潜氏の「人生論」の一節に曰、

「性慾生活に關しても亦、アウストラリヤ人は頗る原始的である。プロツス氏の記載によると、アウストラリヤ人に於ては、一定の季節に性慾が非常に亢進することと、恰も獸類の交尾期を聯

想せしめる。又陰莖の包皮を切斷することは、非常に廣く行はれて居る風俗で、亞米利加、小亞細亞、バルカン半島、印度の一部、南洋諸島、亞米利加の一部に至り、殆んど二百萬の人類を支配して居ると云ふことであるが、其の基源を尋ねると、頗る舊く、耶蘇降誕前二〇〇〇年の昔、既に埃及人の間には此の風俗が行はれて居たので、アブラハムが之れをヘブリーユ人に傳へたのが、猶太人に於ける宗教上の儀式となつて、今猶嚴然として固守されつゝあることは疑ないのである。

併し此の奇異なる風俗の起りは、恐らく猶一層舊くして、遠く原始人類の昔、即ち石器時代に遡ることが出来る。蓋し此の手術に用ふる小刀が、儀式的に今日と雖も猶、大多數の場合には石器に限らるゝのを見ても、よく其のことが分かる。

此の風俗を起した理由が何であるかは、種々議論のあることで、或は單に清潔の爲めであるとか、或は快感を多からしむる爲めとか、或は子孫を澤

山ならしむる爲とか、或は子孫の標識となす爲めであるとか、或は元服の徴であるとか、其の見解は一定して居ない。

要するに其の動機は何であつたにせよ、今日に於ては寧ろ一種の慣例として之れを固守して居るのであらう。云々

ミクソスコピー (Mikroskopie) 觀淫症。窺視症。

川柳に「浴衣にて拭くを師直よつく見る」

と詠まれた高師直は鹽谷判官の妻顔世御前の湯上の半裸體姿の美しさを垣間見て之れに懸想し戀歌を送り問題を惹起したるは、彼の四十七士の仇討物語と共に名高い話である。北齋の「女今川」の中にこれを取扱つた繪がある。

女の裸體姿を隙見するといふことは、半ば異性に對する好奇心が伴ふにもせよ、殆んど男の通有性ともいふべく、遠く古代の神話傳説にさへ物語られて居る。彼の希臘神話の獵師アクティオンが、森の女神ダイアナの裸體となつて泉に水浴びをし



西鶴「一代男」に見せぬ所
はんとして裸體となつて馬に跨り市中を練歩いた時

その姿を一人覗いて後兩眼を抜かれたといふ「コベントリー市の隙見のトム」(Peeping Tom of Coventry) の話など泰西に於ける最も著名なる説話であつて、彼國の畫家が競つて之れを題材として麗筆を振つて居る程である。

我邦では井原西鶴が其著『一代男』の中で主人公世の介が人の女房の行水姿を遠眼鏡で覗いた話を書いて居る。(「窃視者」参照)今村蝶炎氏の『朝鮮風俗集』に彼地では新婚の當夜、若夫婦の寢室を仲人や兩親が覗く風習がある、それは花嫁に化けて忍び込んだ刺客を観破する爲めだとある。

モノガミー (Monogamie) 一夫一婦制。單一結婚。一夫一婦の制度は婚姻の進化によつて生じた最後の形式で、社會史上の事實としての現象である。其起源及び根據に就いてエドウアルト・フックス氏は其著『中世より現代に至る繪入歐洲風俗史』中に次のやうに述べて居る。

「光芒煥發、千様萬態の進歩を遂げて來た吾人の文明總體の基礎となつてゐるものは私有財産の制度である。見よ、高尚至極な人間精神の發露も、平々凡々たる日常生活の些事も悉くこの私有財産制の上に築かれ孰れ劣らず緊密に是と結ばれてゐる。従つて性道德の方面に於ても其根本形式を條

件づけ、之を形造るものは私有財産制の傾向であつて斯くして出來上つた根本形式が一夫一婦制即ち單一結婚である。

此單一結婚は通常個人的性愛の成果と見られてゐることは今も昔も變りが無いが、是が折々凡ての誤謬の基なのであつて、本來性愛は原理に於ても又は其果すべく、さうして果して來た目的に於ても、單一結婚とは些かの交渉も無いのである。個人的性愛を單一結婚の根據とすること、——それは高々制度としての單一結婚が到達せんと努むる理想に過ぎない。事實單一結婚なるものは此理想に依つて成熟させられたものでなければ又、偶々一時的に若くは彼此の階級に於いて成熟したといふ以上に其理想を達しもしなかつた。元々一夫一婦制は個人的性愛とは全然別個の文明成果、全然別個の社會的必要に因つて生じたものである。レヴィス・ハー・モルガンが其著『家族發達史』に於て遺憾無く指示してゐるやうに、其發生は實に一

人の手中——それも男子の——に、より大なる富の集中する事及之等の富を當該男子の子孫に繼承せしめ、餘人の子孫に繼承せしめざる事に在る。合法的繼承といふことは富の最初の、而して最後の目的であり、幾世紀間を通じて其唯一の目的であつた。婦人は、疑を容るゝ餘地無き確實さを以て一定男子のみが孕ました子等を産むべきであつた。單一結婚が其處に最初の發達を見た。希臘人は、直截に、此一事が單一結婚の絶對的目的であると告白してゐる。従つて一夫一婦は男女和合の結果でもなければ最高の結婚形式でもなく之より真相を明めんとする「(人類)有史前時代を通じて知る事無かつた兩性相闘の宣戰布告」である。是が單一結婚の基礎であり終局の目的である。されば這の性行爲の内的論理を辿る時は兩性相互の性交は、一人の男子は一人の婦人と、一人の婦人は一人の男子と交はる事に局限し絶對的に兩者の間に結婚以内に於てのみすべきだといふ要求が生

れる。其結果は言ふ迄もなく結婚前に於ける男子及女子の絶對的貞潔及結婚期間中に於ける兩者の絶對的誠實といふことになるのであつて、是が單一結婚制度が最後の根底に於て人間に要求する論理的結論である。確かにまた此法則が公式に設定された。が曲ぐべからざる頑固さで適用されたのは常に只女子に對してのみであつて、男子に對しては有ゆる時代高々半公式に其適用を見たに過ぎぬ」と。

現代文明國は一般に一男一女の結合のみを認め、一夫多妻、團體的婚姻、多妻一夫等を認めない事は勿論である。又一時的婚姻をも認めぬのである。我國も亦婚姻は一夫一婦に限られて居る。その結果重婚(Bigamie)、即ち配偶者である夫又は妻が更に他の女子又は男子と婚姻した場合は刑法上に於て刑罰規定があり——刑法第百八十四條——民法上では裁判上の離婚の原因となる。民法第百八十三條一號——そして前婚に付ては離婚、後婚

に付ては婚姻取消の原因となるのである。然し乍ら一度婚姻した者は再び夫又は妻を得ることが出来ないと言ふ、所謂絶対的一夫一婦主義ではないのであるから、離婚其他に依る前婚解消後は法律で禁止されない範圍——妻は離婚後六ヶ月間、懐胎して居る場合は分娩後——に於て再婚が出来るのである。——民法第七百六十七條——即ち未亡人の再婚、死亡又は離婚後後妻を娶ることが出来るのである。

又婚姻は一夫一婦の法律的結合關係を謂ふのであつて、其の婚姻に條件や期限を附けることは出来ないが、必ず終身其の一夫一婦が結合せねばならぬと言ふことはないのであるから何時でも離婚することが出来る。

一夫一婦主義の最高の美德は、婚姻當事者が互ひに愛情によつて堅く結び付かぬばならぬといふ點に在る。世には愛も熱も無く種々の社會上や物質上の理由を以て結婚生活に入るものゝあるのは事

實であるが、一夫一婦制の理想は男女間の愛に純粹な情熱を表現する點に存する。

自然的に發達し、宗教上の信仰によつて形式を與へられたり或は統御されたものでない一夫一婦制は今猶英國では最も高い性的關係の形式として認められてゐる。

ハヴェロツク・エリス氏は「婚姻を認可するものは法律上或は宗教上の形式では無くて、形式を認可するものは實に婚姻の眞實性である」と言ふて居る。

一夫一婦主義の婚姻制度に於ける求婚の風習は婚姻の豫備である。求婚の期間に於て男女は少くとも戀人の長所や缺點を知る機會があるので、斯る試練が平和な婚姻關係の準備となる事が屢々ある。然し東洋のやうに贖婚をやつた仲人を介して結婚する所では、斯ういふ求婚の時期を得る事は不可能で、大抵の場合結婚の當事者は互に一面識も無いし、時によると結婚の日まで相互に顔さへ

知らない場合もある。斯ふ云つた風習は中世の歐洲にも存じたことはフックス氏の「輸入風俗史」の中に詳かに述べられてある。然し求婚の時期がありさへすれば心理的の不一致とか肉體上の病氣といふやうな危険はどうしても少くなる譯である。舊約聖書、印度のマヌ法典、波斯のゾロアスター經などは一夫一婦制を道德的なものとして奨励してゐる。「一夫多婦」「一妻多夫」参照)

ムツテルレヒト (Mutterrecht) 母系制度。母權制。太古の世に在つては、人間の社會は女を中心として團體を作り、父子の關係は十分明瞭でなかつたので、自然に女子より女子に系統を繼いで行く事となつてゐた。これを母系制度といふ。

臺灣の生蕃などの間には今も此の風習が存じてゐる。(「擬婉」参照)

ムツタートロンベテ (Muttertrompete) 喇叭管。喇叭管は女性生殖器中卵巢に次いで必要なる機管である。此の管は一に輸卵管と稱し、内端より卵

ムツテ——ムツタ——ミゾフ

珠を取り、これを輸送して外端に至るのである。

喇叭管の内面は粘膜にて被はれ、卵珠を送る間は盛んに粘液を分泌して、卵珠を養ふものとする。

喇叭管の形は、恰も護謨の紐の如く、下端は子宮と接続し、上端は遊離して伸縮すること自在である。其の子宮に近き部分の管孔は甚だ細いけれども、卵巢に接したる端は廣く、殆んど漏斗の形を爲して居る。これは卵巢より落ち來たる卵珠を受納する處であつて、剪綵と稱せられて居る。「子宮」参照)

ミゾフオビ (Mysophobia) 水淫性迫想。希臘語の *μυδος* 嫌忌、並に *φοβος* 恐怖の二語から成つた術語で、汚される——つまり汚穢に接觸することを恐怖する (Krankhafte Furcht vor Beschmutzung = Berührungsfurcht.) 精神病の一種。即ち患者の身體及び其の周圍の物體の不潔を忌む迫想であつて、終日反復洗濯洒掃をなし、周圍の人の觸れて汚さむことを恐れるものである。佛蘭

西の學者は之れを「畏觸狂」(Delire du toucher)と稱へて居る。所謂水淫、潔疾などいへるものもこれに屬するものである。

ミートロジー (Mythologie) 神話。

神話とは、太古、人類の知識が未だ幼稚だつた時代に宇宙の諸現象を以て、神のしわざなりと想像して尊びしより生じた諸種の説話をいふのである。故に其話の筋は實に荒唐無稽であるけれども、神話としての價値は別にある。之れを吾人は自然神話と稱する。其後史上の人物と混和して半神半人の如き古説話をなすこと希臘、印度、日本等皆然りである。之をも亦吾々は神話といつて居る。是等神話の中には性的色彩に富むだものが甚だ多く、性慾學研究上に於ける重要な位置を爲して居る。次に其中で性愛に關するもの、二三を擧げて見るならば、
冒險癖、希臘神話に天神ジュピターが黄金の雨となつて愛人の許に通ひたる話がある。

鎖陰、に關するものでは、臺灣生蕃ブヌン族郡

蕃東埔社の説話に「蚤」といふのがある。

獸姦、では、琉球の或地方の婦女が牡馬と交婚した話がある。又希臘神話にパシファエと牡牛の話がある。

性交、に就いてはアイヌの説話、臺灣生蕃の説話、日本古事記神話にそれ／＼興味ある話がある。

露出症、には、アイヌ神話の神鳥ケソラツプと英雄ボン・ヤ・ウン・べの話がある。

生殖器、に就ては各國の神話に數限りない話が傳へられて居る。

半陰陽、には希臘神話のヘルマフロディーテの話があり。

自己色情、には希臘神話の美男ナルシサスの話がある。

女子淫亂症、は希臘神話のニンフの名に基き。親子間性的錯綜、は希臘神話のエディプスの話

に因つて名命され。

生殖器崇拜、には印度神話のシヅとバルヴァテイの話がある。

陰莖勃起症、には希臘神話のプリアポス神の話があり。

男子淫亂症、には希臘神話のサチールの話があり。

女子同性愛、にはハワイの神話がある。腫療癩、には古事記神話の童子女松原の話。

等々がある。

N

ナルシスムス (Narzissmus) 自己戀愛。

自身の體像に戀着する變態性慾であつて、自己の容姿にのみ戀着し、異性に對しては比較的或は

ナルシ

絶對的に冷淡なるもの、つまり自家色情の極端なるものを謂ふ。

ナルシスムスの語源は次の神話に基いたものである。



王子ナルシスムス

昔、希臘のセフキサスと云ふ王と、水精女リリオベとの間に、ナルシスムスといふ女にも見

まほしき、一人の美はしい王子があつた。或日彼が森の中を逍遙して居る時、エコーといふ水精女が垣間見て、これに懸戀し、言ひ寄つたが、一向應じなかつたので、焦れ死んだ。然るにナルシス

スは復讐の女神に罰せられ澄める泉の中に映る己が姿を、水精女とのみ思ひ極め戀着して日毎その影を眺め入り、遂に焦れ死んでしまった。そして其跡に美しい一本の花が咲き出でた。それが今の世に傳はる水仙花であると。

オスカー・ワイルドの創作『ドリアン・グレイの肖像』の主人公グレイは、此の種の變態性慾の持主で、毎朝その肖像の前に座して自らその美しさを賞讃し、時には恍惚として見とれることもあつた。學問上からナルシズムを初めて研究して、學者の注意を惹起したものはエリスである。その實驗した二十八歳の婦人は自身の體、就中、下肢に對して、性的興味を持つてゐた。ネツケの研究に依れば、千五百人の精神病患者の中四人の男子、一人の女子に於てナルシズムを認めたといふことで、その中には鏡面に映じた自身の姿像に接吻した早發痴呆症の一患者もあつた。フェレーは自身の手に接吻する際性的興奮を來す一婦人のことを

記し、モルは自身の體を鏡にうつして快樂を感ずる壯年の法律家や、また自身の臀部を鏡にうつしてその美しさ、見事さに見とれる同性愛の男子に就いて記述し、また自身の體を見んが爲めに、鏡の前を過ぎると眞つ裸になりたがる衝動のある一患者を記した。此のやうな變態性慾をばナルシズムと云ふ他に、アウトモノセクスアリスムス (Automosexualismus) と云ふ名稱を賦與した。

(「自家色情」参照)

ネクロフキリー (Nekrophilie) 屍愛。屍姦。

屍愛とは、異性或は同性の屍體に愛着する性慾倒錯である。

上田秋成の著作『雨月物語』中の「青頭巾」には、一僧が美童を寵愛の餘り、其の死屍に戯れ、終には其の肉を食ひ盡した話がある。是は同性間の屍愛であるだけ事煩る異常を極めて居るが、異性間の屍愛では、寛永四年版『千尋日本織』二の四に或る道心が生前愛した娘の屍體に觸れて、微毒を

受け鼻を落したといふ懺悔話が載つて居る。

ネオマルサシズムス (Neomalthusismus) 新マルサス主義。

舊マルサス主義は人口調節の目的を以て、出産率を禁慾的手段によつて達せよと唱導したのであるが、それには誤りが多く、とても實行出来ぬものであつたので、その反動として起つたのが、この新マルサス主義である。亞米利加では之れを産兒調節 (Birth Control) と云つて居る。

其の方法は一般に豫防器具を用ゐて其目的を達するものである。彼のベツサルなるものは新マルサス主義者の唯一の武器とされて居るが婦人の健康上から見る時は餘り其使用に賛成は出来ない。

ネルフエンクランクハイテン (Norvenkrankheiten) 神経病。

神経系に故障ある症で、神経病質の人は意志の發達が不健全なるが爲めに、本能に屬する性的衝動の刺戟は中々旺盛であつて、加ふるに感情は亢奮

性であり、理性の統御が不十分なるが故に、性的生活の上に、往々著しい失策を仕出かすことがある。一般に春機の發動は早くて、自己遂情の頑固なる習癖を作り、後年配偶を得て後も、永く持續することがある。かくしてその精神生活も性慾方面の支配を受けること甚しきときは所謂性的神経衰弱症となる。

ノーラセニー (Neurathenie) 神経衰弱症。

本病は、米醫に依つて命名されたもので、多くは遺傳素因を有し、特性は神経機能の異常に興奮し、疲勞し易く、其症狀は多様であつて、杞憂的觀念により恐病症を起すものである。

ノートツフト (Notzucht) 強姦。婦女凌辱。

強姦とは、女子の意志に反して強行的に性交を營む行爲で、或は婦女子に對して其の生命に危険なる脅迫を試み、或は實際の暴行を施し、或は其の意識知覺の喪失して抵抗不能の状態にあるに乘じ安りに婚姻意外の性交を行ふことを謂ふ。

性的犯罪の中にて、強姦は最も重大なるものであつて、之れに越したる罪惡のない事は言ふまでもない。従つて此の種の者は、世に甚だ多くあらうけれども、之れに依つて罰せらるゝ者の比較的少ないのは、被害者が名譽を思つて、之れを公にするを恥ぢ、其の結果、泣き寝入りとなりて世に現はれざるが爲めに依るのであらうと思はれる。凌辱者は色慾烈しくして、常識を缺きたるものであるが故に、所謂色魔として之れを恐れたが、精神病學上より觀察すれば、強姦者の多くは、精神病患者にして、色魔障礙者たる事は、法醫學者の一致する處である。

又特に注意すべきは、幼女に對する凌辱である、これは壯年者にもあるけれども、多くは老人であつて、老人の猥褻又は凌辱には、幼女を選ぶものが多い。此の理由は諸學者に依つて研究されてあるが、之れには次の理由がある。即ち

一、幼女は抵抗力弱くして、犯し易きに依るこ

と。

二、老人は其の特有なる老耄性癡狂となる時は倫理道德の觀念減退して、幼女を犯すに至る。

三、老人の思想は、一般に退化して、小兒に接近し來るに依り、自然小兒を愛し其の結果小兒を犯す事になる。

と云ふにありて、之れを結論すれば、老人は生理又は病的に、色慾異常を來たして、幼女に對する猥褻行爲を敢へてすると云ふことになるのである。凌辱には迷信に依るものも少くない。未通女を辱かしむる時は此の病癒ると云ふやうな、俗説に迷はされて、少女を辱かしむるものもあるが如き之れである。

強姦の有無を定むるのは、法醫學者の任務であつて裁判の上に缺くべからざるものである。而して強姦は、性交に依つて成立するが故に、強姦の有無を定むるには、先づ性交の事實を確むることが

必要であつて、之れを認知する事柄は、次ぎの三種にありとする。

一、性交に依りて生じたる損傷を認めたる場合。

二、精液、若しくは精子を、女子の體中、又は衣服に於いて、發見したる場合。

三、花柳病の傳染したる場合。

の三條件であつて、強姦の事實は必らずしも此の三條件を、悉く具ふるに及ばず、其の内の一若しくは二のみにも十分に之れを説明することを得るのである。

強姦は收德行爲の中で最も憎む可きものである。されば世界各國とも、之れに對する刑罰は頗る峻厳であつて、古昔は極刑に處し、今日にても死刑を以て論ずる處がある。

ニンフエー (Nymphae) 小陰唇。羅典語にて Labia Minora と云ふ。一に内陰唇 (Inner Lippen) とも稱へる。

ニンフ——ニンポ

小陰唇は之を發生學的に觀察すると、男性に於ける尿道に相當するものであつて、其の位置は大陰唇の内側に在る。従つて之を一に内陰唇と呼ぶ人がある。(「大陰唇」「前垂開」参照)

ニンボマニー (Nymphomanie) 女子淫亂症。慕男狂。

女子淫亂症は、婦人に現はれる處し異常的色情亢進の謂であつて、一定の男子との性的交際を熱望し、強制的に満足を要求して、已まざるものである。

遺傳素因なき婦人にあつては、道德的制止觀念に依つて、之れを抑制することが出来るけれども、病的なる場合は、全く之れと趣きを異にし、其の色慾は甚だ強力にして、時に週期的に現はるゝことがある。

女子淫亂症の原因については種々あるけれど、就中腔内の搔痒も見逃すべからざる基因を爲すものである。(「陰門搔痒症」参照)

ニンボマニーの語源は希臘神話の泉川統轄の準女神 (Nymphae) に基いた名稱であつて、即ち彼の女神達は頗る多淫であつたと云ふのに起因する。

○

オーブスツオーネ・リーダー (Obszöne Lieder) 猥褻歌謡。

猥褻歌謡とは男女の情事に關することを露骨に歌ひたるものであつて、洋の東西を問はず、古來から少からず作歌されて居る。これは作歌するものが、自己の性慾の發呈を詩歌に依つて代償せんとするに原因するのであるが、中には諷刺的に作られ、又單に性慾挑發を目的として作歌され、低唱されて居る場合もある。其歌詞は本來に於て、象徴的言語が多く使用されて居るけれども、また短

的に露骨なるものもある。然し、たとへ其れが露骨なる言語を以て作歌されて居るものにもせよ、そこにはまた棄てるに忍びない一種淳朴な情緒を含んだものが尠くない。而して其歌詞の中に如何にもよく吾人の眞情が閃めいて居るのを見出すことが出来る。猥褻の歌謡を作り、之れを低唱するときは、東西ともに現代の法律が之れを禁じて居る。従つて吾人は、わずかに、低級なる娛樂場に於て、又は下等なる人物の口にするのを耳にするに止まるのみである。

エディプス・コンプレクス (Oedipus-Komplex) エデ

イプスの錯綜。親子間的錯綜。奥國の精神分析學者ジグムント・フロイド教授の學說に據れば、女兒が父親をおのれの性的愛着の對象とし、父親を獨占せんとして暗々裡に母の除去を願望し、男兒が母親を己れの性的對象とし母親を専有せんとして冥々のうちに父の排除を欲求

する心的傾向をいふ。此の語源は希臘神話のエディプスの物語に發して居る。

太古シープスにライオスといふ國王があつて、自



スクンイプスとスパイデエ

分の子供が生れると、父を殺し母と結婚をする運命を持つてゐる。いふことを豫言で知り、子供が生れると、すぐにそれを山中に捨てたのである。それを羊飼が育てゝゐると、コリンスの王が可愛い子であるといふので、貰つて自分の子供にしてエデ

イプスと名づけた。

エディプスはだん／＼と成長して來て、己れは後に父を殺し母を犯す運命を持つて居るといふことを聞いて、コリンスの王を實父と思ひ込んだ彼は、その豫言の實現を防ぐため、窺にコリンスを逃げ出して、知らず／＼シープスに歸つて仕舞つた。そしてとある山中を歩いてゐると身分の高い人が馬車に乗つて通りかゝり、道を除ける、除けないといふことで争ひが起り、エディプスは遂にその貴人を殺して終つたのである。

然るにそれがエディプスの本當の父ライオスであつたので、豫言の一部がこゝに實現した譯である。さらするとシープスには親殺しがあつたといふので、神の怒に觸れて、スフィンクスといふ怪物が、一方は山、一方は海といふ狭い道に現はれて、謎をかける、その謎は

二つの足を持ちながら

朝は四つ足夕には

三つ足持ちて歩むなり

年まだ若きその時は

海にも浮び或は亦

空にも高く翔けれど

足もよろぼえ老ひぬれば

消えて去ぬるはそも何ぞ

消えて去ぬるはそも何ぞ

といふ有名な謎なのであつた。而してその謎を解き得ないものは悉くスフィンクスに喰ひ殺されたのである。そこで國中が大恐慌を來した時に、シブスの王妃即ちエディプスの母は「謎を解いて呉れたものに領土を與へ、また自分がその人の妻になる」と宣言した。さうするとエディプスがその謎はつまり「人間」であるといつて、首尾よく謎を解いたので、スフィンクスは恥ぢて、海中に飛込んで死んでしまふし、王妃はエディプスと結婚したが、何ぞ知らんそれは自分の子であつたのである。斯くして父を殺し母と關係するといふ豫

言が二つながら實現してしまつたのである。

フロイド教授は此の神話を以て、兩親對兒童の性的錯綜の最も範型的な説話的反映であるとなし、一般に親子の間に存する性的錯綜に「エディプスの錯綜」(Ödipus-Komplex)の名を冠したのである。

かういふ説話は日本にも澤山見出されるが、それは主として父と女の子とが性的關係を結ぶといふ事になつて居る。

アドラーは、これは兒童に内存してゐるところの「人としての抵抗」(Mannliche Protest)の發現の一つの形式であるといつて居る。詳しく言ふならば、男兒は、父親を己れの優越者として讚美すると同時に、劣等感から來るところの抵抗衝動に刺戟されて、これを敵視し、若くはこれを排除しやうとするのであるし、女の子は母親に對して同一の心理を有してをるといふのである。(「性的錯綜」参照)

オリスボス (Oribos) 男莖形。

上古希臘の女性間に弄ばれた淫具で、強韌なる皮革を以て製作されたものである。

オナニー (Onanie) 自慰。

自慰とは男女並に其の恥部を人爲的に刺戟し、之れに依りて快感と射精とを得る遂情行爲をいふのである。然して、これをオナニーと種するのは舊約聖書創世紀第三十八章自八至十節に現はれた人物オナン (Onan) の名に基いたものである。

即ち舊約全書に據れば、「オナンの父は、彼が法律に依つて兄ヘルの寡婦と婚し、子を擧げんことを望んだ、然るにオナンはその子が己れのものとならざるを知つたので(「逆縁婚」参照)、之を肯ぜなかつた。そして彼は嫂との合衾に際し、見を擧げ得ざらしめんとて地に洩した。是は神の意に反したことであつたので、爲めに神は彼を死に至らしめた」云々

といふ、這般の行爲は素と避妊の目的たる性交中

オリス——オナニー——オーフ——ペテラ

絶なのであるが、現今では、オナニーを自慰の義として居る。

オーフアリ (Ovary) 卵巢。

一對の線體にして、卵珠を生ずる作用をなすもの。

P

ペテラストイ (Pederastie) 鶏姦。男色。

一に男色 (Uring) と稱し、男子間に於ける背倫的淫行である。この語原は希臘語の *puros* (男兒) と *eroua* (戀愛) なる言葉に基いたもので、往古この行爲をゾドミー (Sodomie) と云つたことがある。これは「舊約聖書」創世紀第十九章にソドムの民族人に對して不倫の行爲をなしたるに依り神に罰せられたりといふことに因つたのである。現代ではゾドミーなる言語は獸姦のことに用ひられ

て居る。この背倫的行爲は通常の場合に於ては色情倒錯者によつて試みられる。然してその女性的立場にあるものを受動的鶏姦と云ひ、男性的立場にあるものを他動的鶏姦と稱へる。エー・ペーテはスパルタの男色に就いて興味ある論文を發表して居る。今茲にそれを引用して見やう。

「希臘人の心の紐を解き、彼等をして「エロス」(戀愛)の詩を唱はしめたるものは、實にこの同性的愛なりき。之れ明かなる事實なり。而して紀元前五世紀の後半紀に於て、これに對して道德上より反抗排駁するものアゼンスに起りしとき、この道德上の反對は宗教家の之れを唱へたるにあらず、之れ當時希臘の文化、精神的及び道德的自由の勃興につれて、自から唱へらるゝに至りしものなり」かの有名なるソークラテース及びプラトーンは、この類ひ稀なる樹木より價值ある果實を取り來りて、新らたに之れを培養せしものなりき、されば何人にあれ、能く當時の希臘に付て研究し了

解したるものは、プラトーンの云ふ「エロス」(戀愛)の甚だ高尚なるものにして、從て古代希臘にて流行せし男色は、單に劣慾を満足せしめんが爲めに之れを企てしにあらずして、實に高尚なる種子を含むものなるを觀取すべし。抑も男色なるものは、「ドリヤ」民族(スパルタは之れを代表す)によりて、全希臘に傳播せられし所のものなりき。かの賢王ソロンの時代に於ては、アゼンス市は之れを以て名譽なる行爲とし、深く且つ廣く流行し、ソロン王は之れを自由市民に公許せり。ドリヤン諸國に於ては、男色は一の確然たる社會制度となり、一人前の公人を養成するは、この道によるのみと考へたり。而して戀愛者は己れの愛する少年の犯せし罪に付ても責任を有するものなりき。而して戀愛者が己れの愛する少年を自己のものとして公認せしむるには、「少年奪ひ」と云ふ儀式存せり。こは戀愛者が愛する少年を奪はんとする時は、之れを少なくとも三日前に、その少年の親族に語り置く。

親族がその申込を不適當なりと認むるときは、奪ひし少年は再び奪ひもどさるゝも、若の適任なりと認めたる時は、外見上之れを追ふ如き様をなして、その戀愛者の家まで之れを追ふ。この儀式によりて、茲に愛する少年は、その者のと定まり、二人は二箇月間同一の家屋に住ひ、そこにて少年は戀愛者によりて立派に装はれ、こゝに一人前の男となる。實にこの男色をなすに至りし根本思想は、男子たるの勇氣、「アプテ」(ἀρετή)を、少年との戀愛によりて、之れを少年の身に遷さんとするもの之れなり。而して彼等希臘人は、精液之れ精靈と云ふ信仰を有したるを以て、男色によりて肉體的に、勇敢的氣象を少年に浸染せしめんとせるなりき。かくの如き交接的作用によりて、精靈を甲の體より乙の體に移轉せしめ得とする信仰は、獨り古代希臘人のみならずなり。吾人は之れに類似せる二個の例證を擧げ得べし。一は英領ニューギニアのバプアゴルフに於て、首長が自

ヘドフキ—パレード

個民族の子供の口に小便を流しこむ儀式之れなり。他はグノステック教會に於て、僧侶の男色をなしたるもの之れなり。其行爲は之れを希臘のそれに比して、同じからざるものありと雖も、其大體の精神は同じと云ふ可し。又精液之れ精靈と見たる希臘人は男子を尊び、兒童の生命は男子によりてのみ傳へられ、女子の腹は唯之れ借りもののみとの見を懐くに至りしは、蓋し自然の徑行なるべし。」と。〔男娼〕〔娼樓〕参照)

ヘドフキリア・エロテイカ (Paedophilica erotica)
色情性小兒嗜好。
色情倒錯症の一種で、小兒に對して精神的戀愛をなすものをいふ。

(Krafft-Ebing *pyria* Liebe, *epæos* Liebe, *Krafft-Ebing* erotische, aber oft rein platonische Liebe zu Kindern desselben oder des anderen Geschlechts, Form der sexuellen Perversi.on.)
パレードシア・セクスアーリス (Paradoxia sexualis)

is) 病的性慾。
クラフト・エビング氏の所謂、性慾の異情、即ち不自然なる性慾の謂である。ホモセキシユアリティー (Homosexualität)・エロトマニー (Eroto-manie) の如きはこれに屬するものである。我國の作家谷崎潤一郎氏は一時好んで此種の病的性慾を其小説に描いたことがあつた。

バルセノゲネージス (Parthenogenesis) 處女妊娠。
希臘語の parthenos 「處女」と genesis 「産生」から出でた語である。處女生殖、單性生殖ともいふ。

處女妊娠とは男子との接觸なくして、妊娠することといふ。之は下等動物に非ざる人類にあつては決して見らるゝ現象ではない、然し歐洲中古の基督教僧徒は聖母マリアは男子に接することなくしてキリストを生めりと確く信じて居たのである。現代の醫學上から觀れば實に愚の至りであるが、又一概に此思想を排拆することは出来ない。

何故かといふに、古來から聖人高僧のたぐひは大概男子との接觸に依らずして懷妊するといふ説話が傳はつて居るからである。「妊娠」「性夢」(參照) ペニス・スクセダヌス (Penis Succedanus) 陽莖代用物。

ペリノイーム (Perineum) 門渡。

男子は陰囊と肛門との中間、女子は陰門後連合部と肛門の中心をいふ。(「會腔」參照)

ペルフエールス・セクスアールエムブインドウング (Perverse Sexualempfindung) 性的倒錯症。

性慾的倒錯症ともいふ。

性的倒錯症といふは、性慾が非常に早く若年に於て、或は非常に遅く老年に於て現はれることである。

若し性的倒錯が老年に於て發展するときは、大抵は所謂老齡精神錯亂 (Senile Demenz 參照) に起因するものであるが、之が最初に於てはそれを證明すること、裁判官などには非常に困難である。

即ち精神錯亂が一層増長するときには、性的倒錯は二三年の後には甚だ宜しくなく見える爲めに、種々の判斷が現はれるからである。

鶏姦、受動的淫虐症、能動的淫虐症の如き皆性的倒錯に基くものであつて、淫慾亢進或は慕男狂といふのも性慾の變則に發現するのであるが、之は最も重い過失に陥るものである。ミュレル氏の報告に據れば、身分のいゝ婦人がその亭主が精神錯亂の爲めに瘋癲病院に收容された時、丁度婦人の厄年——變換期 (Klimakterium)——に當つた爲めに殊に劇しい性慾が起つて來て殆ど制しがたぐ、爲めに婦人は情夫を求むるやうな風をして驀然に街道を歩き廻つたといふ事である。(「色慾異常症」參照)

ファルス (Phallus) 張形。

「女庭訓に有ますかはり形」と川柳點に詠まれた「はり形」なるものは、單に「張子」ともいはれ、其の名の示す如く張り子で細工し、これに漆を塗

ファル—ファロ—ファルス

つて仕上げした、男性生殖器の模倣物で、*phallos* Penis fictivus, ex varia materia confectus, variosque in usus. Ex serica aut linea panna. Ad usum Lesbianum のである。中には鼈甲製、角質製、木製、金屬製、硝子製、蠟製の者もある。就中最もよく知られて居るのは張形で、その語源はファルスは一名ファリコス (Phallicos) とも云つたので、ファリコ形の轉訛語ではなからうかと云はれて居る。

ファロクテイティスムス (Phalokteitismus) 陰陽崇拜教。

男女兩性の生殖器を崇拜するものにて、印度に於て、最も盛んである。

ファルス・クルツス (Phallus Kultus) 生殖器崇拜。男根崇拜。性器崇拜。

生殖器崇拜と稱するものは、生殖器を自然の創造力の表徴として尊崇することである。其説は希臘語ファロス (Phallos) や、男莖、特にバツカス祭

の行列に於て自然の生殖力の表章として持ち廻る男莖を指すものであるといふ。この生殖器崇拜は信仰精神が最も物質的病症に陥つたものであつて不可思議な靈力の加護を得んとして生殖作用の幻妙なる靈力にその表徴を認めたものであつて、茲に所謂生殖器教 (Phallicismus) を生ずるにいたつたのである。凡そ曾て地球上に棲息したる民族は、一度は嘗つて生殖器を崇拜したのである。その信仰の中心勢力となつて來た此の生殖器崇拜は、全體何のために起つたものだらうかといふに、先づ當時の民心から推論しても、決して野卑淫猥な思想から發したものでないことはあきらかである。

性學者としてその名高き彼のハヴェロツク・エリス氏は、這般の眞相を穿ち得たる不易の名言を提供してゐる。曰く

「蠻人は生殖器を一種不可思議のものと思ひて非常に畏恐したものである。就中男子の生殖器

は、最も神聖なるものとして敬虔して居つたのである。そしてこれに擬似したる物形を神體として祭つた。」

と、この語は、簡單にして而もよく本問題を解決し盡してゐるのである。

此の病的信仰は各國にあつて、埃及、印度、支那及び日本等にもある。埃及に於いては古來よりヲシリス神の生殖力を表はすに大なるファルスを以つてし、希臘に於いては此の生殖器神を一切萬物を生ずる生産者として之れを崇拜して居る、スカンヂナビヤにも生殖器崇拜をなせるところがあ

る。我邦に於ける生殖器崇拜は、今日の處では大體藝娼妓の商賣繁昌を祈るもの、男女共下の病氣の平癒を祈るもの、或は又さういふ病に罹らぬやう豫めかういふ神に願つて置くこと、並に縁遠い男女が良縁を求めため縁結びの神として之に祈るといふやうな目的のもとに行はれて居る。併し又農

業と結び附けて祭つて居る例も澤山ある。その著大な例を一つ二つ擧げるならば、尾張の東春日郡に田縣神社といふのがある。この神社では祈年祭の時に生殖器崇拜と結び附いた御儀式が行はれて居つた事を栗田寛博士が既に其の神祇志料に述べて居る。

又武藏の國の橋樹郡杉山神社の御田植の神事の内に此の方面がよく現はれてゐる。なほ北多摩郡の東村山村には他國神社と云つて御神體に男根を祭つた神社がある。武藏風土記に依つて見ると今日他國神社と書いて居る文字は多穀となつて居るのである。

これは天然自然界の生々發育をして行くといふことを、人類が子を産むといふ事に引き當て、解釋しようとするところから起つて來て居ると思ふのである。(「性交」参照)

希臘では生殖器崇拜が農事と關係した方面を代表した神はブリアポスとデオニソスである。

フキモー—フィシ—プラト

尙ほ、昔、希臘では恰度吾々が、今日墓場に石塔を立てると同じように、死人を埋めて墓標の代はりに、生殖器形を立てたさうである。夫れといふのは、つまり生殖器は生産生命のシンボルであるから、これを墓場に立てる時は、死人をして再び生を得せしめるといふ考へで、石塔の代はりには立てたのであつて、希臘の所謂ヘルメスといふ神はその後身である。

フキモーズ (Phimose) 包莖。

陰莖の包皮口の狹隘にして、龜頭 (Eichel) を露出し能はざるものを云ふ。

フィシオノミー (Physiognomie) 人相學。

人相學とは、人の性質を其の外貌殊に顔面の相貌より判定する學問である。古來人相と男女の性問題とは關係淺からざるものであつて、之れに依つて男女の性質を判断したものである。

プラトニツヒ・リーベ (Platonische Liebe) 精神的戀愛。清淨の愛。

肉慾をはなれたる男女間の純潔なる戀愛關係をいふ。

ホルチオン (Pollution) 夢精。

夜間睡眠中に異性との性交其他の艶夢を見て、精液を漏すものをいふ。(「性慾夢」参照)

ホルチオーネス・フェミニネ (Pollutiones feminae)

婦人遺精。

身心の虚弱なる爲めか、其他の事情乃至刺戟、主として自慰行爲に原因する等の爲に無意識に子宮腺粘膜の粘液流出及びバルトリヌス氏腺の分泌を來す事を指すものである。(「遺精」参照)

ポリアンドリー (Polyandrie) 一妻多夫。

一妻多夫とは、一人の女性が數人の夫を所有する事を云ふのであつて、シーザーが古代ブリトン人に就いて「彼等の間にあつては兄弟又は親子等十人乃至十二人寄つて一人の妻を共有してゐる。」と云つてゐるのは正に此の事である。

其他古代アラビヤ人にも同様な風習があり、又ニ

ユージーランドのカナリー諸島の或る部族中にも見られると云ふ。而して其の最も有名なものは西藏である。即ち子供を産むことは平民のすることとなされ、而して平民は子供を育てる負擔を軽くする爲兄弟同志で一人の女を共有するのである。次に此の風習を助長するのは野蠻人間の女兒制限、換言すれば女兒殺しと云ふことである。これは多く經濟的關係から來たものであつて、屢々天候其他自然の災厄に遭遇し饑饉に襲はれ易い事情に置かれた種族は止むなく不生産的な女兒を犠牲にするのである。そこで自由男女の數の均衡を失ふにいたり、一妻多夫となり、進んでは女子の價値が異狀に高くなる爲めに、性としての價格が生じ、ひいては買淫となつてあらはれるのである。現に朝鮮などにあつては女兒は頗る粗末にし輕蔑するに拘はらず、結婚に際しては一種の賣買婚に近いことが行なはれてゐるなどはこれが一面の遺風とも見ることが出来るのである。(「婚姻」參

照)

ポリガミー (Polygamie) 一夫多妻。

一夫多妻とは、一男子が數人の女を妻としてゐるのを云ふのであつて、一妻多夫の全然反對な現象である。此の風習には大體二つの原因がある。即ち一つは男子少く女子多き事であつて、戰爭其他に於て男子は死亡し易い傾向があるのである。他の一つは強者の婦人獨占と云ふ事である。而も此の第二の原因は殆んど世界の各民族中に普及してゐる所のものである。ソロモンの妻七百、妾三百を初め、秦の始皇帝の後宮三千等は史上有名な事實である。

現在に於ても支那を初め我國にも或る程度迄此の現象が見出されるのである。更にアフリカ、アウストラリヤ等には一夫多妻の制度を持つてゐるものが甚だ少くないのである。一例を挙げれば米の賣淫學者サンガーはこんな事を云つてゐる。旅行家レヤードが千八百三十二年ニゲル地方へ行つた

時の報告を記してゐるが、妻は家庭にあつては奴隸の如く取扱はれ、國王の如きは百四十人の妻を持ち、其の中には十三歳以下の小娘も有し、是等の女は凡て鐵砲や反物羊皮の類で購はれたものであると云ふ。而して是等の女性中最も肥満した六人の女が王の御氣に入りであつたと云ふ事である。處で此の一夫にして多くの妻を持つと云ふ事は一つの特權階級の表象ともなるのである。同時に其の特權を得る爲めに女性が物質視され、従つて賣買と云ふ觀念が生じるのは當然の歸結となるのである。(「婚姻」「賣買結婚」「婦人部屋」「賣淫婦」参照)

ホルノグラヒー (Fornographie) 簞底書畫。猥褻書畫。春畫春本。秘戲畫。艶畫艶本。笑繪。枕草紙。和印。

男女情事の醜態を描きたる繪畫及不道德なる言語を以て男女の痴情を叙述した文書の謂である。人

間の存する處總てが之に伴ふと云つてもよい位に、分布區域が廣大であるから、詳かに知る由もないが、性教育に缺けて居つた我邦では昔時これを嫁入道具の一つとして母親が其愛娘の筐底に忍ばするを例とした、然し是等の文書繪畫は卑猥にして其の目的は性慾を助くるにあるが故に有害であることは勿論である。菱川宣信、喜多川歌麿、歌川豊國等の我邦の浮世繪師はデッサン研究の一助として屢々これを描いた。一勇齋國芳の如きは一妙開程芳の淫號を用ひ春畫を描き其中に自己の肖像をさへ挿入してゐる。

歐洲では春畫は極めて古くからあつたもので羅馬ではボンペー市の盛時に流行したと思しく、それが發掘されて、ネーブルの博物館に保存されてゐる。そういふ繪畫等の發掘されたところは主に妓樓であつたといふ事實に依つて見れば、さういふ繪畫は、多く賣笑婦或ひは嫖客等に、玩弄されたもので、春畫と賣笑生活と、密接なる關係のあつ

たことが推知せられる。

筐底書畫は往々性的誘惑の媒介をなすものであつて、之れに依り犯罪をかもすことがある。萬造寺齊氏の隨筆「誘惑」の中に或る年増の女中之之を以て誘惑された男の話がある。永井荷風氏の「散柳窓夕榮」の中にもかう云つた話があつた。但しそれは戯作者對遊女である。

本邦で行はれる艶畫は大抵浮世繪風の木版畫が多く、當節では羽子板模様のやうな贅澤な押繪細工や、又實用向な實物寫眞や、凝つたものになると煙草入や、根付け、財布楊子入れのやうな手廻りの携帶品に仕込んだのがあつた。其他羽織の裏地などに書いたのもある。

ブレフアンティフフェルケル (Präventivverkehr) 豫防的交際。

豫防的交際とは、保護器を用ひて行ふところの性的接觸を云ふのであつて、専ら娼婦との關係に於ける際の花柳病豫防の目的の爲めに實行されるも

のである。

群馬縣技師高木乙熊氏の「花柳病豫防ニ關スル報告」に就いて見るに、我邦に於て「現今娼妓ノ花柳病豫防方法トシテ行ヒツ、アルモノハ洗滌及藥物塗布等ニシテ他ニ特別ノ良方法ヲ行ヒツ、アルモノ無キガ如シ」と、又

「藝妓及酌婦ニ就テ洗滌設備アルモノハ各四縣ノミナク何等具體的ノ方法ヲ備フルモノナシ豫防藥品ハ次項ニ述フル數種ノモノヲ使用セリ」

然して、一般人に於ける豫防狀況に就いては「遊客ニアリテハ智識階級ノ人又軍隊等特種ノモノニ於テハ洗滌又ハ「サツク」等ヲ使用スルモ其他ノ者ハ殆ンド無頓着ナルガ如シ群馬縣外十六縣ヨリ蒐集シタル最モ普通ニ販賣セラレ居ル花柳病豫防具ハ「ハート」美人、「キヤラメルゴムサツク」、「ヤヨイルーデサツク」、敷島「サツク」、子宮「サツク」、等ノ名稱ヲ附シタルモノガ主ナルモノナリ、豫防藥ニハ「サーナー」、「セモリ」、

ブリア

子宮特效藥、花柳病豫防「クリーム」、「カトウソルガー」、星「サンデー」、「フルミナル」、「バラタイス」、「シクロ」、「ラミイ」投入藥、「サンデー」、「アイマス」、有田ドラック防菌劑等ガ主ナルモノナリ云々とある。(「根囊」参照)

ブリアボス (Priapos) 凌辱神。

希臘神話中に現はれた生産力の男神で、古代希臘人は農作物の豊饒を祈る爲め此の神を田畑に祭つた。(「處女膜」「處女探針」「張形」「生殖器崇拜」等参照)

ブリアピスムス (Priapismus) 男根強直症。

希臘神話のブリアボス (Priapos) 神像に因むで名づけられたものである。

(nach dem Priapos der griechischen Mythologie, der mit sehr grossem Geschlechtsgliede dargestellt wurde, anhaltende krankhafte Erektion ohne geschlechtliche Erregung, besonders bei Rückenmarkverletzungen, Rei-

zung des Centrum genitospinale.)

其原因は脊髄勞又は横斷脊髄炎などの爲に腦髓の中にある勃起中樞、射精中樞、又はこれと大腦とを連絡する處の、道筋に疾患を起すから來るもので、時にカンタリデン中毒などの淫慾興奮劑の刺戟によつて發する場合もある。

プロラプス・ウテリ (Prolapsus uteri) 子宮脱垂。

子宮下垂ともいひ、子宮の腔外に脱出する症である。俗に茄陰(なすび陰)といはれる。

此の下垂は醫療により容易に治すことが出来るが性交の度を重ねれば、再び下垂を來し遂には慢性となり顔色蒼白に身體羸瘦する、之れを全治するには全く性交を絶つか、又は不適當なる陰具を有せる男子との接觸は勿論可成的性交の度を減ぜねばならぬ。

プロスタタ (Prostata) 生殖腺。

一對の腺にて、一種の液を分泌する。此の液は精子の運動を助くる用をなすものである。

プロスチトゥーション (Prostitution) 性業婦。賣笑

婦。娼婦。娼妓。賣淫婦。

賣淫とは「自己を提供する」(Prostitution)と云



りよ「誌雜西蘭佛」婦業性の里巴

ふ意味より出でたる語である。

此の賣淫の起原及び發達の歴史を見るに、それが人生の偶發的産物ではなくして、他の本質的要素

と共に併發された必然的な産物である。ハヴェロ

ツク・エリスに従へば、一、生物學的素因 二、

經濟的必然 三、道德上の利益及び文明的價値に

分析して考察するのが最も便利である。賣笑婦の

存在は善良の風俗を維持する所以に非ずと雖も、

其の絶滅は事實に於て不可能なことである。され

ば現今に於ては嚴重なる警察監視の下に於て最小

限度に其の存在を公認して居る。娼妓は即ち是れ

である。我國の「娼妓取締規則」に據れば娼妓は

滿十八歳以上にして自ら警察官署に出頭し書面を

以て申請し且つ健康診断を受け娼妓名簿に登録せ

の如きは含まない。

今茲に我國の女子が如何なる原因に依つて賣笑婦に墮落するか其徑路を一考して見やう。此問題を多年實地調査せる市場學而郎氏は其著「賣笑婦研究」中に於て斯う述べて居る。

- 一、親に強ひられるもの
- 二、養父母の誘致若しくは強迫せられたるもの
- 三、夫又は情夫に強ひられたるもの
- 四、無頼の悪漢に誘拐又は脅迫せられたるもの
- 五、情夫に捨てられ又は欺かれたるもの
- 六、悪桂庵に欺かれたるもの
- 七、子の愛又は親の思ひにひかされたるもの
- 八、貧に驅られたるもの
- 九、素行不倫なりしもの
- 十、虚榮心に囚はれたるもの
- 十一、失戀の結果自暴自棄に流れたるもの
- 十二、自己が或る他の目的を遂げんが爲めなるもの
- 十三、土地の悪習慣に染まりたるもの

す、家庭の悪感化を被りたるもの
賣笑婦となれるもの公私娼に論なく以上其何れか
の一に該當せぬものはなからうと思ふと。

ブルリツス・フルフェ (Pruritus vulvae) 陰門搔痒
症。一名瘡陰(カサ)ともいはれる。

二十歳前後の既婚人に發する事が多い。この原因
は、白帶下、梅毒尿、妊娠などから來るもので、
搔痒甚だしきものは爲に色慾を異常に亢進し女子
淫亂症に陥ることがある。

プシチツヒ・オナニー (Psychische Onanie) 精神的
手淫。

手淫の有害なることを聞き及んで遂に悪習を斷つ
者がある。然し所謂肉體的の實行を斷つただけで、
彼等は尙ほ吾人の呼ぶ精神的手淫を犯すものがあ
る。即ち、精神をある異性、又は淫猥な繪畫の上
に凝結させて、あらゆる場面を空想に描き、遂に
精液を射出する、これを精神的手淫と稱へる。而
して實際に手淫を行つて居るに非らざるが故に萬

事結構と考へて居る。然しこれは非常な誤謬で、
あらゆる手淫の形式で、此精神的手淫程有害なる
ものはなく、忽ち神經衰弱乃至生殖不能などに導
いて行く。如何と言ふに心的經過のみに依つて射
精を行はうとするには、生殖器の充血と神經の興
奮とを程度にする必要があるからである。従つて
生殖器と神經組織とに及ぶ害は避けることが出來
ないのである。

プーベルテート (Pubertät) 破瓜期。發情期。春機
發動期ともいふ。

男女共に其生殖機能の成熟したる時期の謂にて、
此期に達すれば、生殖器の發達、身體の變化等を
來たす特徴とし、最も著しきものは、春機の發動
であつて、男性に對する一種の感情、即ち執着心
の生ずることである。(「戀愛」参照)
尙ほ此期に達する時は男女共に結婚に適せるに依
り可婚期ともいはれる。破瓜期の年齢は、人種、
土地、氣候及び生活狀態等によつて一定せぬのみ

ならず、且つ又男女に依りて大差があるけれど、
我邦に於ては古來女は十三歳、男は十六歳にして
發情期に達するものとされて居る。されば川柳に
も

十三と十六只の年でなし
とある。

ピグマリオニスムス (Pygmalionismus) 偶像姦。

彫刻せる美人の立像に對して愛着心を起し、醜汚
なる行爲を演ずる所の一種の病的性慾現象で、之
を行ふ者を稱してピグマリオニスト (Pygmalio-
nist) と名づける、これはかなり古い時代からあ
つたので、この語源は次の古實に因つたのである。

太古希臘のサイロスの王でありまた著名な彫刻
家であつたピグマリオンは、女性には非難すべ
き點が多いのでそれを嫌つた。それ故勿論結婚
しようなどは思ひもしなかつた。彼は或る時
象牙を以て海の女神ガラタイアの裸身像を作つ
た、それは實に美しく生きてきた女は誰一人傍

へも寄れないほどであつた。身動きをしないの
はたゞ恥かしいからのやうに思はれた。彼はこ
の自分の作物を初めの程は愛してゐたが、いつ
かその彫刻に戀するやうになつた。彼はだんだ
んその像が彫刻ではないやうに思ふやうになつ
た、そしていろ／＼と若い娘の好きさうな贈物
をその像へやつたり、着物を着せたり、指に寶
石を嵌めたり、頸飾りをしたり、耳輪をはめて
やつたりもした。着物はしつくり身につけて裸
體の時よりも更に／＼美しく見られるやうに
なつた。彼はティル染の布を張つた寢椅子に彼
女を寝かして、柔かい羽根の枕をさせてやつた、
かくて彼は遂にそれを自分の妻だと呼ぶやうに
なつた。

それはヴェキナスの祭禮がもう近いといはれる時
であつた。サイブラス島では此の祭禮には極め
て豪華を盡すのが常であつた。やがてその祭禮
が來た、生贄が捧げられ、祭壇からは香の煙の

立ち登るのが見られた、あたりは全く神秘と莊嚴の氣分で満ちてゐた。ビグマリオンは他の多くの男女と共に、此日ヅキナスの殿堂に詣でた。そして戀の女神に自分の作つたガラテイア女神の像に生命を與へられんことを祈願した。彼は家へ歸ると早速像を訪れた、そしてその像の口に接吻した、するとその像の口に暖か味がある、最初は心の迷とのみ思つたが、更にもう一度接吻すると矢張り暖かい、手足を掻き抱くと柔かい。

彼の祈願は容れられて女神像に生命が入つたのである、彼は初めからヅキナスに感謝することに氣がついて、更にその像の唇に唇を寄り添へた。彼女はもう像ではなかつた、接吻された時には顔を赤くして、おどろ／＼と如何にも處女らしい様子を見せて、明るくその瞳をあげてじつと彼の顔を見た。

やがて二人の間にはパフオスといふ可愛い子供

が生れた。

この話はウキリアム・モオリスの『地上の樂園』の中に美はしい詩となつて歌はれて居る。

而して此の病的性慾現象に就ては、夙にモローが今古の談柄を蒐集したことがある、只憾むらくは逸話的であるので、確實に科學上の判断を下すことは出来ぬ、併し兎に角這般の醜行をなす者の少くない事は掩ふべからざる所である。

偶像姦はクラフト・エビングの説に依れば、淫慾の異常に強き者、或は陽勢の缺亡せる者、或は正常の交接を行ふの心なく、又は之を爲すの機會なき者の行ふ所であると云ふ。

我邦では、古くは『日本靈異記』中に偶像姦と認むべき記事がある、曰く

和泉國泉郡血停山寺、有吉祥天女像、聖武天皇御世、信濃國優婆塞來、位於其山寺、梯此天女像而生、愛欲、繫心戀之、每六時、願云、如天容、好女賜我、優婆塞夢見婚天女像云々。

とあつて、即ち優婆塞が吉祥天女の立像に憧憬して之を犯したのである。

江戸時代生人形の流行を極めた安政三年の春或る屋敷の中間がお初人形（鏡山御殿場で、お初が奥女中數名相手に試合の生人形）の美貌に戀焦れて一夜生人形の小屋へ忍込んだのを、夫とは知らぬ番人等は盜賊と早合點して、用心棒で打のめしたといふ噂が高かつた。當時艶本の畫作を兼ねてゐた歌川國盛は、この一件を脚色して淫文に綴り、巻頭に生人形見立の彩色艶畫を載せ、四月上旬に『情寫淫漏人形』と題して出版した。情寫云々の外題は、當時、江戸で松本の生人形は人間の正寫しだといふ所から、正寫生人形と呼んでゐたのを振つたのである。かの左甚五郎が自作のおやま人形に、戀したといふ話も一種のビグマリオニスムスと做すことが出来やう。

かゝる行爲は現代にも行はれてゐることで、さうした事實が新聞によつて報道されてゐる。

嘗て（明治四十一年）横濱市の某呉服店で、其の店頭に安本龜八作の元祿美人を飾つた事があつた。處が毎日の様に其人形を見に来る二十五六の男があつて、番頭達も變に思つてゐたが、或日店に人影のないのを見ますや、件の若者は矢庭に飛び込んで其美人を抱擁し怪しからぬ振舞に及ばんとした處を取押へられたといふことである。

其の後、大正三年の出来事であるが、九州博多市でそれに似た事件があつた。當時の新聞が報じた大要は、博多市で有名な人形師吉村某の店頭に、美しく着飾つて子供をつれた等身大の美人像が置かれてあつた。處が此所へも毎日のやうにそれを見に来る若者があつて、或日突然店へ躍り上つて、其の人形に抱きつき、變な様子をする。吉村某は驚いて漸やくそれから離れしめたが、若者はなかなか思ひ切れない様子で、これからは人形を傷ふやうなことはしないから見せてだけくれ」とて、金一回を出したさうである。吉村氏は困つたこと

になつたと思つて、早速その人形を他に賣却したが、若者の方では容易に思ひ切れないものと見えて、怪しい繰り言をさへいふやうになり、一時は座敷牢にまで入れられた程である。其の後若者は三年目の春になつて、又もや人形師方の店頭へ参り、是非とも件の人形に會はせてくれと懇願したといふことである。

右の例に似たもので畫像に對して同様の感じを持つものも少くない。それは自慰的遂情の對照として用ひられる場合があつて、勿論その中には境遇上禁慾の結果によるものもあり、又戀人の寫眞に對した時のやうに、或る追憶或る豫想を交へたものもある。また現實以上の美に憧れて、畫像を理想的對像とするものもある。これを繪像性崇物症 (Kaltfetischismus) と稱へる。我邦の文獻には之に關する挿話や小説を看出すことが稀でない、茲にその二三を擧げて見る。

『太平記』第十八春宮入洛附一宮御息所事の條に、

一の宮が源氏の優婆塞宮の女の繪像に戀ひこがれて、氣病ひになつたとある記事は、或は例の小説的作品かも知れないが、若しそれが事實ならば、慥かに繪像性狂崇と認むべきものである。

「或時關白左大臣の家にて、なま上達部、殿上人、數多集りて、繪合の有けるに、洞院左大將の出されたりける繪に、源氏の優婆塞宮の御女、少眞木柱に居隠れて、琵琶を調へ給ひしに、雲隠れしたる月の、俄かに最あかく指出たれば、扇なうても招へかりけりとて、扱を擧てさしのぞきたる顔つきいみしく蕩たけて、にほやかなる氣色、云はかりなく、筆を盡してぞ書たりける、一宮此繪を御覽せられ、限なく御心を懸りければ、此繪を暫召置れ、見るに慰む方もやとて、卷返々々御覽せらるれども、御心更に慰ます云々、遍照僧正の歌の心を貫之が難して、歌のさまは得たれ共實少し、譬ば繪に書ける女を見て、徒に心を動かすが如しと云ひ、其類にも成ぬる

者かなと、思ひ棄給へども、尙あやにくなる御心胸に充て、限なき御物思ひに成ければ、傍への色異なる人を御覽じて、御目をだにも廻されず」

とある。近世の著作に現はれた例では、山東京傳の『安積沼』に、平清盛が嚴島辨天の繪像に懸想したこと、隠士千代鶴が石山寺に詣で、紫式部の繪像にこがれたことなどが描いてある。

寶永三年版の『御伽百物語』には、京都の篤敬といふ書生が、名匠菱川師宜の描いた美人繪に戀着し、その美人が畫より抜け出して、篤敬と契るといふ筋がある。之れは支那の瘦啓といふ書生が畫美人と契る筋の傳奇小説の翻案であつて、曾て矢田挿雲氏が雑誌「東京」にもせられた『衝立の少女』は、之を材料として書かれたものであらう。又、西鶴の『好色三代男』の二卷に、陸奥のさる家柄の娘が、描ける男繪に懸想して、女巡禮となつて都に上り、今業平と呼ぶる、美男子と契を籠

めたといふ筋の傳奇が掲げてある。西澤一風の『御前經義記』にも畫像愛慾の例が出てゐる。

繪像そのものに戀着するのでは無いが、その愛人の姿を繪に書いて愛情を繼續したものに、『本朝二十四孝』の戯曲に、八重垣姫が愛人勝頼の繪像に向つて、『回向しようとお姿を、繪には書かせはせぬものを、魂かへす反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一言の、お聲が聞きたい云々』と云ふが如きも其の一例であつて、尙ほ寶永六年の『風流鏡ヶ池』には浮世繪師奥村政信に戀人の繪像を描いて貰つた話がある。

湯朝竹山人著『はやり小唄全集』に載つて居る。「はだか人形それなりにきものきせたりあやしたりぬしにそのまゝいきうつし」

といふ小唄はこの種の變態性慾を歌つた著しい例と思はれる。

R

ラウフエーエ (Laubehé) 掠奪結婚。

古代の未開種族及び現在の蠻民中の結婚法の一つであつて、同種族又は他種族の女子を掠奪して、これを自己の妻にすることである。女を掠奪して妻とするといふ風俗は、世界の種々の部分に行はれ、さうしてその痕跡が種々の民族の結婚の儀式に残つてゐるのを見ると、古代には更に激しく行はれたことがわかるであらう。南米エタアドルのマカ印度人は、他種族の女に對しては之れを暴力にて奪取し、アイト人は同族の間にも婦人を掠奪する習慣がある。又濠太刺利亞に於ける掠奪婚は最も残忍な方法に依るもので通常、男子は棒を携へて思ふ女子の傍に行き、突

然、その頭部を打つてこれを倒し、其の氣絶せる間に、四肢又は頭髪を掴み、地上を引づり連れ歸り、その蘇生するを待つて妻とするのである。タスマニア、サモア、ツコビア及びニューギニアの諸島でも他種族より女子を掠奪する風習が行はれ、その手段として、往々數人の男子が合同して暴力を以て女子を奪ひ去ることがある。又、アリアン種族の古昔にありては、更に慘憺たる掠奪婚が行はれたものゝ如く、その家は破壊され、家族は殺傷され、悲鳴と號泣との修羅場裡に憐むべき少女が暴漢の手に拐去された事實が、今、ラークシャサと云ふ婚姻の儀式としてマヌの法典に示されて居る。

希臘羅馬等に於ても、古代は掠奪婚が一時全國の風習であつたことは明らかで、スパルタ人は婚姻の儀式の緊要な條件として之れを固持したことは今日にても屢々、希臘に掠奪婚の行はるゝこと、羅馬人中には花嫁たる少女が泣き叫びて伴はれじと

ずるを腕力をもつて良人たるべき男子及び其の友人等が無理に引立て去る慣習の存すること、及び豪勇時代の傳説——彼のトロイ戦争を惹起したパリスの話をもつたホーマーの「イリアッド物語」



「花つて掠奪結婚の遺風」と見よるものも本文参照

の如き——古の羅馬人は詐偽又は掠奪に依らざれば其の妻を得難かつたこと等諸書に見えて居る。又スカンヂナヴィヤ國民が處女を姦し、又は之れをその所有とする爲めに大なる争鬭を爲したことも記録に残つて居る。

我國古事記神話の八股の大蛇が稻田姫を奪はんとした説話の如き本邦上代に行はれた掠奪結婚の慣習を明らかに物語つて居る。或る地方には今尚ほ「嫁ぬすみ」とか「おつとり嫁」とかいつて古い掠奪結婚の名残りである奇習が行はれて居る。東京府下西多摩郡青梅町附近の結婚式に「抱(だ)き娶(めと)む」といふことがある。新嫁が送られて新婚の門前へ來た時、婿の親友は素足にて駆け出し、新嫁を抱き取りて家内に運ぶ。これは身分ある舊家に特に行はれる所であるといふ。これもやはり掠奪結婚の遺習に外ならない。曲亭馬琴の「弓張月」を見ると、爲朝が九州で阿曾の娘白縫姫を娶るときに、白縫の部屋に行くと、白縫の侍女が先づ二人、續いて數人が櫻の花の咲いて居る枝を持つて左右から爲朝に打ちかゝつた、爲朝は容易に之れを拂ひのけて姫の所へ行つたので、白縫は其の武勇に感心して妻になつたと書いてある。これも掠奪結婚の餘習であらう。尙ほ彼の里歸りの祝は、女が掠

奪した男の方の隙を見て、何日か経つた後に逃げ
て歸つたのを、女の種族の方で祝宴を開いた名残
ではあるまいかと思ふ。

レリギオン (Religion) 宗教。

宗教とは吾人が人生に超越せる崇高偉大なる或る
ものを畏敬する感情に起因し、これを人格化し信
仰し、憑りて慰藉、安心、幸福を得て以て人生の
缺陷を補はんとするものをいふ。従つて一面には
禮拜の儀式を生じ他面には命令の權威を生ずる。
多くの人は、宗教の眞の起原は先づ神聖なる天意
の中に在りと信ずる。併し、宗教と性慾とは密接
な關係を有し、ハヴェロツク・エリス氏は生殖器の
崇拜 (Phallicism) は宗教の起原を爲すと喝破
して居る。〔生殖器崇拜〕参照)

レテイイズム (Retifism) 靴狂崇。

即ち Schulfetischismus と云ふ、イワン・プロツ
ホ博士の始めて命名したるものであつて、これは
レテイフ (Leitf) の生涯に最も鮮やかに現れてゐ

る性的倒錯に基いたのである。その事は既に博士
がオイゲン・デューレンの假名を以て其著『Retif



イナバルバとワシ

de la Pretonne] (レテイフ・ド・ラ・プレトヌ) の
中で述べて居る。又この倒錯は彼の裡に、その

最初の文學的註釋者と使徒とを發見したからであ
る。恰もザデイスムスがザード侯に依り、マゾヒ
スムスがマゾツホに依つて廣く知られるに至つた
と同様である。レテイフは最初に典型的な足と靴
とのフェティシスムスを述べ同時にこの問題の最
初の歴史を書いたのである。

彼には、この傾向が、その自叙傳に述べられてゐ
る如く、十代に現はれた——彼の自叙傳は、ゲー
テ、シラア、ウイランド、その他獨逸古典文學の
大家の齊しく推讃する名著である——彼はその中
に、足のフェティシスムス、靴のフェティシスム
スの起原に就いて可成よく説明してゐる。

『美しい足に對するこの好ましさは、必ず私の強
い快感を唆つて、その他の點の醜くさを悉く無視
させてしまふ程に強いものだつた。が、これは何
等かの肉體的或は感情的豫向から生ずるのだらう
か? この特殊性を持つ者には、それは非常に強
い。これは優しい歩き振りや身振りに對する何等

かの好みと關聯してゐるだらうか? 靴の類が持
つ特殊な魅力は、動物をも刺戟する美しい足に對
する好みの反映に外ならない。即ち人間は覆ふ物
を覆はれる物そのものと同程度に讃めるに至るの
である。幼年時代から私が美しい靴に對して感じ
た情熱は後天的の愛好であつた。が、それは自然
的愛好に基づいて居る。然し小さな足を好む念は
肉體的基礎に立つもので、それはラテンの格言
『Parvus pes, barathrum grande』(小さな足は
竅が大きい) に於て説明される。』
レテイフは代表的な靴のフェティシスムスを持つ
てゐた。彼は女の靴を見ようとの望みに顫へる思
ひをした。それを眺める時には全で少女にでもな
つたかのやうに顔を蔽ふた。殊に彼を惱したも
のは女の靴の高い踵であつた。それを見るので彼は
強い性的興奮を覺えたといふことである。(足狂
崇)参照)

リンノ・タマ (Lin-no-tama) 輪の玉。琳の珠。緬

サテイ

鈴。

輪の玉は、不感症の女性に對する補助刺戟物である。「鹽尻」に、「房中の邪術に緬鈴といふもの有り、五雜俎に緬夷を殺す時活ながら之をとるものよ、しといへり今の緬鈴は金にて造るにや、嗚呼工人是等の器を製して利を釣り、淫夫色女多く、是等を買て淫戯をそへ風俗をみだして侍る、和漢ともに季世にはあらぬ事ども起りて、道德は日々により成行あさまし云々」とある。其大さは丁度鳩の卵位であつて、大小二個一組となつて居る。此の道具は今や支那安南印度に於ても用ゐられるやうになつて來た。十八世紀頃には、「戀の林檎」(Pommes d'Amour) 又は「春球」(Boule érotique) と稱はれてゐた。

S

サディズム (Sadismus) 發動的淫虐症。慘虐色情。

單に淫虐症ともいはれる。この名稱は、佛國の文學者マルキス・ド・ザード (Marquis de Sade) の小説中にかゝる色情變態者即ち淫好と慘忍と猥褻なる記事の描かれて居るに基いたもので、其の著作者の名稱より命名されたものである。而してザード自身もまた其の實は色情變態者の部類に入るべき人であつたのである。

(Krafft-Ebing nach franz. Autoren, von dem berichtigten Marquis de Sade 1740—1814, geschlechtliche Erregung durch grausame Handlungen, Misshandlung der Geliebten,

Lustmord, Leichenschändung.) 淫虐症とは、性的倒錯の一種で肉體的または精神的に残忍な行爲を人間若しくは動物に自ら施し或は施されたるを傍觀し、常に性的快感を受くる強迫現象である。



女に虐られざる者
「スリイフとスレテスリア」

病的な
らぬ正
常の戀
愛に於
ても、
彼の新
内に、
「喰ら

ひ付きたいほどおもへども」と云ふ文句がある如く、熱情の極度に達するときは相手の身體を軽く毆打し嘯み或は接吻して知らず識らず唇を咬むにいたるが如きは、通常何人も能く聞くところである。

サテイ

この行爲の極端なるものは、相手を傷けて其の苦悶し、或は死する有様を眺めながら快美を感じる場合もあり、また彼の強姦または最も悪むべき屍姦等を行ふは多くは此の種の人物である。主として男性に於ける病癖であつて、これは男性の掠奪



ザード侯の肖像

衝動が暴力となつて現はれるのである。歐米には此種の色情倒錯者を満足せしむる爲め賣淫窟に秘密の設備が出来て居る。サディズムとして古來有名なのは、暴君ネロを

始めとし、カリグラ、テイペリウス、イウアン、メデイチのカタリナ、露國のエリサベス等其の他頗る多い。而してザディスムスは單に男性のみならず、女性に於てもまた此の種の變態者を見るこゝとが出来る。(「動物虐待享樂症」参照)

ザイメン (Samen) 精液。

帶黄白色の透明稠厚の粘液であつて、一種の臭氣あり、鹹味を有してゐる。新鮮なる間は粘着力を有するけれども、暫時空氣に觸れば、溶解して水液の如くなる。中に精糸を有して居る。

英國の卑語ではシード (Seed)、スパンク (Spunk) ボロックス (Bollocks) など、云はれて居る。

ザイメンテイヤヘン (Samentierchen) 精蟲。精糸。

精糸は精液中の主要分であつて、生殖の神體とも又精神とも見るべきものである。其の形状は蝌蚪 (たこむし) の如く、是れを頭、體、尾の三部分に區分される。然しながら僅かに五十ミリメートルに過

ぎない小蟲であるが故に、顯微鏡の力を借らねば肉眼では視る事が出来ないのである。

精蟲は男子の睪丸のうちにある生殖細胞と云ふものから分裂して出来たもので、同じく睪丸の中で造られる精液と云ふ一種のドロ／＼した粘液の中に無數に生活して居るものである。顯微鏡で精液を検査して見る時は、精蟲は細長い尻尾を前後左右に振り立てながら盛んに精液の中を泳ぎ廻つて居る、其の速度は一秒時間に〇、〇五乃至〇、二七ミリメートルの速さである。然し酸性液中に在りては、漸次衰弱して遂に死んで仕舞ふ、此の理によりて、膣の酸性分泌物中に在る時は暫時にして死ぬけれ共、子宮の亞爾加里性分泌物中に在る時は一週間の久しきに至る迄其の運動を斷たないのを見る。

精糸が精液中に存在する數は殆んど幾千なるかを知る事が出来ない。然し睪丸炎等に罹りたる者には精糸が有つても活動力非常に弱く、妊娠せしむ

る能力は殆んどないと云ふことが出来る。

ザツフィスムス (Sapphismus) 双女對食。吸淫。

ザツフオー淫。

希臘の女詩人ザツフオー (Sappho) の始めて行ひたるに依り此の名がある。

この風習は今猶巴里に流行し、是を業とする者があ

ザテイリアジス (Satyriasis) 男子淫亂症。

希臘神話に現はれた、半人半羊の怪神サテイル (Satyr) の名より來れるもの、此の神は其の性質頗る淫亂にして、山林水澤の仙女の眠れるを屢々襲ふたのに基因する。

淫亂症には一時的發作と、繼續的常症とがあるが、其基因については、梅毒の毒素の爲めに、脊髄の腰椎にある勃起及び射精中樞が刺戟によつて烈しい色情興奮を來たすなどを重なる原因の一とされてゐる、が之れは長くて數ヶ月、短かきは一二ヶ月で止み、其餘は色情狂となる。其他脊髄病や精

ザツフ——ザテイ——シャウ



ル イ テ サ

神病から淫亂症になることもある。淫亂症を有する男子は常に強姦襲撃に出でんとする危険がある。従つて異性者は甚だ危険の立場にある。然し已むを得ずんば自慰をなし、或は猥姦をする。但し男子淫亂症は稀有である故幸である。(「女子淫亂症」参照) シャウシュピール (Schau-spiel) 觀世物。洋の東西を問はず、男子の性的好奇心を満足せしむる目的を以て種々猥褻なる觀世物が行はれた時代があつた。

我國のそれに就ては、宮武外骨氏編「猥褻風俗史」並に朝倉無聲氏著「見世物研究」を見らるれば其詳細を知る事が出来る。

シユワンガーシャフト (Schwangerschaft) 妊娠。

妊娠を包蔵せる婦人の状態を云ふのであつて、妊娠は受胎に始り分娩に終るものである。而して其経過は太陽曆にて九箇月と七日即ち四十週間即ち妊娠曆にて十箇月の間である。されば一箇月は四週間即ち二十八日なるが故に妊娠の経過は二百八十日間である。然しながら妊娠中此日數に足らずして分娩することが間々ある。去りとて胎兒が既に良く成長して身體大なるものがあり、又罕には之に反して日數の延びて四十四週間に至り甚だしきは四十六週間胎兒を保てることもある。但し民法第八百二十條(第四編第四章親族篇)には「妻が婚姻中に懐胎したる子は夫の子と推定す婚姻成立の日より二百日後又は婚姻の解消もしくは取消の日より三百日以内に生れたる子は婚姻中に懐胎したるものと推定す」と掲げてある。「婚姻」參照)

正規の妊娠は、受胎した卵子の子宮腔内に來り、

此所にて良く成長し、加之ならず妊婦も健康にて少しも變状なきものを云ふのである。又一個の卵子の受胎したるものは之を單妊娠——單胎——と云ひ、數個の卵子の受胎したるものをば復妊娠——復胎——と云ふ。即ち二子——一名孖胎又雙胎——三子、——一名品胎——、四子——嬰胎——等である。然しながら人間にて五子以上の成熟胎兒を同じ時に受胎せしことは昔より今日に至るまで未だ見聞しない。

女子が妊娠すれば、一、卵子 二、生殖器 三、其他婦人身體中に變化を來すものである。

著者の幼時に實見したものであるが、妊娠を豫知するのに斯ういふ呪があつた。今では殆んど其の姿を隠して仕舞つた二十一波錢を妊娠を望める婦女子が一本の——己れの——頭髮の先端に結び付け、他の一方を指にて持ち、水を七分目程盛つた茶碗の中心に向つて上よりつるし——水面より少しはなし、茶碗の縁に當る位の高さで暫く靜止し

て居るのである。然る時はその結ばれた二十一波錢が自然に左右に動いて茶碗の縁にかすかな音を立て、當る、それは一定の數だけを打つと直に停止してしまふ、何遍くり返しても同じである、妊娠を望める婦女子は、今聞いた丈の音の數を一つならば一ヶ月以後に、又二つならば二ヶ月以後に受胎するといふやうに判斷するのである。此實験に依つて判斷された其月に妊娠をした自分の知つた妻女は二三に止まらなかつた、但しその原理が何であるかは未だわからない。

妊娠に就いては種々な風習がある。昔、子なき婦人は神に祈願して子を授るといふ風習があつた。これを「神の申し子」といふのである。その神の申し子を授からうとする婦人は己れの念する神の社殿に通常三七日——二十一日間——參籠して祈願をこめれば必ず子を授かるといふのであるが、それは一種の迷信にすぎず、神の申し子とは即ち神主が授ける子に外ならなかつたのである。

されば子供を欲してゐる男女でも、夫婦揃て神社に參詣しては効験が無い」と云ふ俚諺は、此の場合に味ふべきことである。此の暗示から當然演釋さるべき問題は居籠祭又は暗闇祭に於ける女性と神主との關係である。明治八、九年頃に關東の俗信を蒐めた下野國下都賀郡柏倉の金比羅神社は、子授けの神として流行を極めたものであるが、それは神主が天狗の面を被つて女性を犯すものであることが判明し、大騒ぎを演出した一事に徴しても、神の申し子の一斑は釋然するであらう。

未開民族の土人達は性交を爲さずして妊娠するといふ考を持つて居た。アウストラリアの土人は、子供の生るゝのは、祖先の靈魂が、母の體内に這入る結果であると信じて居るばかりでなく、内には靈魂をば、砂のやうな微細なものであると想像して、之が婦人の臍から體内に這入つて漸次成長して、小兒に成るのであると云ふ觀念を持つて居る、そして斷じて男女の直接關係に基くものでな

いと思惟して居るのである。

又夢に依つて懐胎するといふ迷信もある。

中田千畝氏はその『夢で孕んだ話』の中で、

「釋迦の出生傳説は、『太子瑞應本起經』『法苑珠林』『佛祖統記』『三國傳記』『今昔物語』等の諸書によつて、普く人の知る所である。

「今昔物語」や「佛祖統記」のものは皆この「法苑珠林」の記述と同じものであるが、『三國傳記』になると、

彼ノ夫人御寢有ケル御夢ニ都率天ヨリ大象下テ口ニ入ルト御覽ジテ懷妊アリ……(卷一釋迦如來出世之事)

とあつて、菩薩が六牙の白象に乗つて來て右脇腹から入つたといふのは少し異つてはゐるが、そのものとは同じであつた事は言ふ迄もない。

夢による懐胎の問題は、結局は、釋迦の母摩耶夫人の夢の懐胎を研究する事が、日本における聖徳太子以下偉人傑僧の母の夢の懐胎、及び支那印度

等における老子その他の偉人傑僧の母の夢による懐胎を解く根源をなすものであると言ひ得るやうな氣がする。現代の生理科學を以てすれば、夢を見て妊娠するといふが如き事はあり得べからざる事である。と科學者は直にそれを笑殺抹削してしまふに違ひない。そうしてそれは何人も拒否しがたい事であるが、さればといつてさきあげた如き各種の夢による懐胎傳説のすべてをたゞすに埋没すべきであるとは私は思はない。何故なれば、それ等の傳説は、現代科學を以て充分に理解し得られるものであるとともに、又一方においては我等の精神生活の上、(宗教的生活、又は詩的生活)に多くの貢獻を持つものであるからである。

夢による懐胎傳説を科學的に解するに、私は二つの考へ方を持つてする。その一つは抱擁後における心身の愉悅又は恐怖より來る結夢そのものであるとの解義であり、他の一つは抱擁時における快感愉悅又は恐怖苦痛の詩的象徴であるとの解義で

あるが、其何れもが結局は男女の性交であつて、他に何等の意味も理由もないと信するのである。

抱擁後における心身の限りなき愉悅又は恐怖苦痛が、その當事者の種々なる結夢の原因となる事は容易に考へ得られる事實である。心身疲労のために熟睡して結夢の事に到らない場合も勿論皆無ではないが、と同時に結夢する事も亦しばしばあるのである。私の愚考を以てすれば、抱擁後の愉悅疲労から熟睡して結夢する事のないものはすでにその抱擁になれたるものであつて、初夜における女性としては決して熟睡を得られないと信じられる。性慾衝動が常に男性は能動的であり、女性は受動的であるといふ事から考へても、それは首肯されるやうな氣がする。初夜禮の恐怖苦痛は實に處女のすべての持つ心情であるやうに思ふ。疲労がある。恐怖がある。苦痛がある。かうした彼女等の心が、種々なる夢を結ぶであらう事は何人も考へ得られる事であると信する。(中略)

スクロ——ゼルフ

右は釋迦を懐胎した摩耶夫人の夢についての考察であるが、この解説は、そのまゝ老子の母の場合にも、僧智證、僧宗胡以下の前にあげた偉人傑僧の母の懐胎の場合にも、そのまゝで用ひられるやうに私は信じて疑はなす。』

と述べて居る。「鞭撻」「擬娩」「性夢」参照)

スクロツム (Scrotum) 陰囊。
男子の會陰部より股間に懸垂せる睾丸及び副睾丸を包被し、之れを保護して居る處の一個の囊狀體であつて、其の外面は暗褐色にて外くの皺壁を有し、疎發の陰毛を生ず。英単語では、グローブル (Globe)、チチス (Titias)、チーツ (Teats)、ベブリス (Bubbles)、ドイリス (Dairies)、バスト (Bust)、ナテルナル (Naterna)、ヘミスフェア (Hemispheres)、ブリースツ (Breasts)、ボツソム・チャームス (Bosom Charms) など云はれてゐる。

ゼルフストモルト (Selbstmord) 自殺。

自殺とは自ら自己の生命を断つ行爲を謂ふ。我邦の刑法にては自殺を罰せず唯人を教唆し若くは幫助して自殺せしめ又は自殺者の囑託を受け若くは其承諾を得て之を殺す行爲を處罰することになつて居る。

後藤城四郎氏は其著「煩悶と自殺」の中で自殺の種類を次の二つに區別して居る。

第一、死なうとする希望は毛頭ないに拘らず偶然の出来事の爲めに自分で自分の生命を断つ場合

第二、死なうとする目的の爲めに自分で自分の生命を断つ場合

そして斯う附記して居る。

第一の場合は眞の自殺といはれない、而し死人に口無しで他人の目からは丁度自殺したかの如く見えるのであるが當人自身は全く過失の爲めに死ぬのである。

第二の場合は眞の自殺と申すべきものである

が、然し此の第二の場合も、時によると他人の眼からは、過失の死ではないかと誤認さるゝ事がないとも限るまいが、而し甚だ稀なものと考へる。

自殺の方法手段は色々あるが日本の統計に據ると縊首が約半數を占め其他入水、轢死、自刃、仰毒の順序に減じて居る。然して一度自殺を圖り何かの機會で未遂に終つた人は、容易に再び之を企てることがないと云はれて居るが、如何にも尤ものこと考へられる。それは一旦平靜に歸へつた後には、心の緊張が失せ却て自殺の苦痛を偲び身を殺すことの馬鹿らしさを悟るからである。

回教聖典「コーラン」には、

「自殺者たる勿れ。この禁に叛くものは、地獄の火に焚かるべし。」

との嚴戒がある。然し、古代羅馬には自殺が屢々あつて、セネカの如きは之れを讚美し、反對論者

に對し、「人類の自由を拘束するのは不可である。體力が消耗して、まだ生きて居ると云ふのみで、死せるも同様の状態に陥つては、自殺するが適當であるか、どうかとの思慮もなくなるので、その以前に自殺すべきである。」と勸告したことがあつた。

ゼニール・デメンツ (Senile Dementia) 老耆性癡呆。

羅典語でデメンテア・セニリス (Dementia Senilis) と云ふ、一に考考狂とも稱する。

老耆性癡呆は癡痺狂と大同小異の解剖的變化を有し、腦の萎縮は却て著しく、領解力消失し、錯覺多く人を誤認し、幻覺、感情障礙を伴ふものである。「ヒポコンデル」性妄想多く、記憶力減少、所在識缺損、推感力亢進等を來し、不安不眠、色情興奮、精神薄弱等を呈するものである。

セクスアール・パダゴギク (Sexual Pädagogik) 性慾教育。

青年男女が、性慾上の問題から種々の失敗やら惡

弊に陥るものあるを防ぐために、學校若しくは家庭に於いて適當に性慾に關する知識を與へ、これをして誤り無からしめんとするもの、これは近來やかましく言はれ出した問題である。

セクスアール・パトロジー (Sexual Pathologie) 性慾病理學。

病的にして不自然に陥れる顛倒性慾、即ち變態性慾を論究する分科である。

セクスアール・トラウム (Sexual Trauma) 艶夢。性慾夢。妄想。

性慾夢とは、睡眠中に艶事を夢みることの謂であつて、之れに關する例は甚だ多い。例へば睡眠中に美人と契り、或ひは佳人と相會して、戯むるゝが如き是であつて、大腦の自發的作用に依るものである。

そもく夢は、精神に思ふこと、考ふることを、不熟なる睡眠に依つて思考することにより、發するものであるが故に、夢は眠りばなと、目醒めの

頃に、見ることの多きはこれが爲めである。
性慾夢は確かに、腦に自發的性慾觀念の存する證とするに足りる。甚だしき時は、其の艶夢に依つて、遂情することさへある。「夢精」「婦人遺精」(参照)

尙ほ興味あることは、去勢した者の性慾夢である。即ち罌丸、又は卵巢を全く除去した者の性慾夢で、去勢する時は、性的觀念の消滅することは、世の人々の知れる如くであるが、斯る人でも夢には、異性と相會し、或はありし昔の戀人に逢ひて歡樂を合はせたるなどの夢を見ることがある事をしばしば聞くことがある。

若し生殖腺を失つて、性的觀念が全く消滅したものとすれば、夢にも之れを見ることは無い理であるが、其の然らざるところを見れば大脳に性的觀念の中樞があつて、睡眠中に、浮び出るものであることが知れる。

性慾夢の一步進みたるもの、即ち病的となれるも

載せてある。

一、夫と遠國に行遊し又はやも女に成り或は宮使などして久しく一人りねをして心に其事足らぬ時は夢とも無く現共なく誰とも知らぬ人來りて毎夜契りを結び孕たる如く成りて月水留り腹ふとりかたまり出來一人り言をつぶやきないたり笑つたり物くるはしくされ共顔色常の如し早く藥を用べし。二夜も夢を見ば重らぬ先にりやうじすべし。

夢の契りは面白成りてやめがたき物なり然れ共おそろしき物也大方は狐狸の類其女に心をよする事あり又はあだをなしてする事もあり又おそのたわれ雄とて川うそは極めて淫亂成物にて女を見るときは腰に居だき付よし唐の書物にも見えたり我てふにても男に化して女の元えかよふよし昔より語つたへたり。茯神湯、女夢の内にとの交り心うかうかと成り月水留りて腹フトルヲヨクスル藥也下略

のは、幻覺となつて、戀ひしと思ふ男、或は女の姿があり／＼と見え、或は其の聲が聞え、或は其の芳香のすること等がある。幻覺(Illusion)は神經の衰へた者に發することが多く、此の場合には、晝でも、夜でも、意中の人が忽然として現はれるのである。

古來より「夢は五臟の煩ひ」と言つた如く、自己の感官又は内臓に何等かの刺戟があつて、其が腦機能に影響するに基くものであることは、前に述べたが、其れが神佛の感應なりと信ずることもある。
昔は摩耶夫人が七月十五夜に白象胎内に飛入ると夢みて釋迦を生みしと云ひ、豊公の慈母が日輪懷中に入るを夢みて日吉丸を孕めりと云ひ、其他斯の如き例證は西洋にも我邦にも數多くあることは人の知る所である。天文四年版、幡玄春著「極秘手ばこのそこ」の中に、「夢に契る病の事」として、次のやうな事柄を記し、其れを治する藥法が

艶夢を以て、狐狸川獺の類の惡戯をなすものとした處は、彼の婆比倫神話に現はれた夜の侏儒(Inoubus)の思想に似たるところがあつて、一寸面白く感じられる。

セクスアールフエアブレツヘン (Sexualverbrech-

en) 性的犯罪。

性的犯罪は、男女の色情に關する處の犯罪であつて、之れを大別するときは、普通の性的犯罪と倒錯性的犯罪との二種と爲すことが出来る。前者に屬する者は、強姦(Notzucht)・姦通(Ehebruch)・重婚(Bigamie)・猥褻罪及び密賣淫(Private Prostitution)等にして、後者に屬するものは、淫虐症(Sadismus)・淫虐的兇殺症(Lustmord)・屍姦(Leichenschändung)・屍好淫虐症(Necrosadismus)・性慾亢進症(Hyperästhesie)・鶏姦(Päderastie)・性的狂崇(Fetischismus)・受動的淫虐(Masochismus)・獸姦(Thierschändung)・及び陰部露出(Exhibitionismus)等の如き之れであ

る。

以上は性的犯罪の、純粹なるものであつて、直接に性慾の亢進、若しくは其の濫用より、道徳を破壊し、良知の明を掩ふて、茲に至れるものにして、之れを狹義の性的犯罪と謂ふことを得る。之れに對して、廣義の性的犯罪を擧ぐる事が出来る。これは性慾關係と經濟關係又は生活關係と、結合して生ずる犯罪であつて、前者に對して一層廣大なる犯罪を包含するものである。例へば野合の結果、其の孕みたる子の始末に困じて、密かに之れを墮胎し(Abortus)、或ひは其の生まれたる嬰兒を殺害する(Kindermord)が如き其の例である。

此の種の犯罪は、婦人に甚だ多くして、婦人犯罪の主なるものである。中には貧困の爲に、此の罪惡を犯す者もあるけれども、中流以上の階級の婦女に其の例の少なからざるは、注意すべきところである。是れは淫奔にして、不義の子を宿したることを暴露するを恐れ、其の體面を思ひ、又、名

譽を考へて、秘密に之れを葬らんとする、女の淺智慧より出たるものである。

セクスエーレ・コンプレクス(Sexuelle-Komplex) 性的錯綜。

子供が對他的な性慾衝動に衝き動かされて相手を要求する場合に、之れに選ばれるものは誰れであるかと云ふと、初めは兩親である。その理由は、

第一には、子供の經驗範圍が狭少であつて、他の人を知らないといふことであり。

第二には、兩親の子供に對する愛情が著しく性的意義を帯びてゐるといふことである。

そこでその性的な錯綜は、どんな形で現はれるかと云ふに、精神分析學者に言はせると、一般に男の子は母親を己れの性的愛着の對象とし、従つて母の愛を獨占しようとして父親を無意識の裡に排除する傾向があり、女の子は父親を自分の性的愛着の對象とし、従つて父の愛を獨占しようとして、暗々裡に母親を排除しようとする傾向があるとい

ふのである。そこで兩親と子供との間には愛せんとする感情と、愛の障礙を除去しようとする感情とが、錯綜した姿で活動してゐる。その親子の性的關係を總稱して性的錯綜といふのである。「エディプスの錯綜」参照)

セクスエーレ・ノイラセニー(Sexuelle Neurathenie) 性的神經衰弱症。

本病は性慾的の興奮や刺戟に際して、往々著しい苦悶を發し、爲に精神的陰萎に陥ることがある。又性慾夢想に耽つては、精神的手淫を爲し、ために早期射精や、精液漏を發することがある。又中には虐待乃至被虐待淫亂症や節片性淫亂症等變態性慾の症狀を來すものもある。

性別に於ては、クレベリン氏の説に據れば、男子が六十五パーセントといひ、職業別では、商人、學生、下婢、看護婦等であり、又、本病者の三分の二は未婚者であることに注意を要する。

セクスエーレ・シンボリスムス(Sexuelle Symbol-

ismus) 性的象徵主義。

男女生殖器其他性的の事物行爲の表現の方法として、象徴を用ふる事を旨とする主義である。今茲に其一例として佐山融吉氏の報告した「矢と女陰」に關する臺灣蕃族の土俗を引用して見やう。

「彼等蕃族は、各部族とも、人體を畫けば必ず生殖器をつけるのであります、蕈人形にも矢張陰莖をつけてあります、これは阿眉族奇密(註)社の事でありますが、彼等の集會所の屋根の上に陰莖をつけた蕈人形を鬼瓦の如く飾付けてありましたから、彼等に其の理由を尋ねましたら、陰部のない人があるかと云はれたので、成程と點頭いた事がありました、又同族馬蘭社の傳説には集會所に男根がねて居つたと、子が母に告げたら、其がおまへの父であると母が教へた話があります、斯く彼等にとつては生殖器なるものは大事なものであります。嘗て卑南蕃の呂家社で十一二歳の少年等が大樹に對つて弓を射つて居りましたから、よく見

ましたら、樹幹に下向き三角形を畫いてそれを的として矢を放つて居るのでした、社内では少年等の樂書の如き物を別に見ませんでした、唯だ三角形の女陰を書いて喜んで居るのを見ました。即ち樂書の始まりは女陰でありました。大物主神の朱塗の矢となつて隠處を衝いた話も斯る事から起つたものでありませうか、實際蕃童は矢で隠處を衝いて居るのです、パイワン族には矢を射て娘の行方を探した話もあります。又陰部ばかりが歩いて來た話もあります云々」(「無花果」参照)

シツテ (Sithe) 風俗。習慣。

風俗とは一定の地域、一定の時代に於ける一般人の生活状態を總稱する語である。故に一人一己の生活状態は其の人の性癖に過ぎないから之を風俗と言ふことは出来ない。即ち、風俗とは普通一般に行はるゝ生活上の起居動作言語調等を總括しての觀念である。それは一定時代、一定の地域に於ける人民の生活状態を云ふのであつて、世の

變遷と共に變化し、且つ各國又は地方地方によつて種々の風俗を異にするものとする。故に風俗は實に國民文明の象徴であり、且又之れに依つて國民の品性公共の秩序、其國の文明程度を知る事が出来る。

シツテンポリツアイ (Sittenpolizei) 風俗警察。

風俗警察は、國民の品性を保持し、不法背倫の狀態に陥るを防制し、善良なる風俗を涵養する爲めに警察官廳の權限によりて爲す所の行政の一つで淫賣の取締の如きは其一例である。蓋し善良なる風俗を維持するには一に教育、各人の自制及び社會的制裁の力に俟つ可きもの多しと雖も、國民の品性を誘惑陷害する百般の障壁を豫防排除するには警察の力に依らねばならない。

抑も教育は強制力を以て品性を陶冶するものに非ずして、それは積極的に品性を崇高ならしむる事を目的とする。之れに反して風俗警察は強制力を以て、風俗を害すべき行爲の公然行はれ、又は行

はれんとする場合に於て消極的に現状維持を目的とするものである。

近世に至つては積極的作用を要するものが益々多くなつて來て——不良少年少女の感化の如き——ある。従つて其の法規は法律命令に規定せらるゝものが少く主として地方警察令の定むる所であつて、各府縣共同じでなす。

ゾドミー (Sodomie) 獸類犯姦。動物姦。〔獸姦〕参照)

シユバルマトリー (Spermatorrhoe) 精液漏。

勃起及び射精の現象なくして、便通若くは排尿の際、或は運動歩行其他夜具等の摩擦下腹努責の際尿道より精液を漏出する症である。其原因は重き神經衰弱、淋毒性攝護腺炎其他神經疾患に來るものである。

シユバルマトーサ (Spermatozoa) 精子。精蟲。

精液の中に生存する男性生殖細胞であつて、女性の卵珠に觸れて、これを妊孕せしめる。〔精糸〕

ゾドミー——シユペ——ズック——シンボ——ジヒリス

参照)

ズックブス (Succubus) 淫夢女精。ズックバ (Succuba) と云ふ。

淫夢女精は婆比倫神話に、男子の睡眠中に現じ之れと交接し、其の感情を満足させずして覺醒に至らしめるといふ夢魔である。(Vgi Incubus, Alpdrücken, bei Männern, wo der Alp untenliegend gedacht wird.) 20ズックバと云ふのは「トコ寝」ト云語 (Succumbo) より來り、亞西利亞人の所謂リネル (Lilier) にして、伯希來人のリリツ (Lilith) と關係を有するものである。〔夜の侏儒〕参照)

シンボリーリツシャー・マゾヒスムス (Symbolischer Masochismus) 象徴的淫虐症。空想的淫虐症。

淫虐の場面を空想して淫慾を享樂する性的異常である。〔能動的淫虐症〕参照)

ジヒリス (Syphilis) 梅毒。

梅毒は不潔なる接觸に依つて感染する花柳病の一

種であつて、主に生殖器及び他の粘膜より感染し、且つ生殖作用に依つて、病毒を子に遺傳する性質を有つて居るものである。其の病毒は局部より、附近の器官に及ぼし、遂に全身に蔓延して、全身症状を起し、大害を醸すものである。本症の本態即ち原因は何であるかと云ふに、紀元千六百六十七年にハンター氏は微毒、淋病、下疳三病一毒説を出し、其後二百年に至り、リコール氏が微毒、淋病異毒説をたてた、それより以來種々の原因説もあつたが、最近に至つてシャウデン、ホフマン兩氏によつて發見せられた、一シュビロヘーテ・パルリダ〔*Spirochaete pallida*〕と稱する原蟲が原因であると云ふことが證明されて來た、そして此病原體は微毒患者の發疹の分泌物には勿論、終期には全身至る處に潜伏して他に傳染せしむる機會を待つて居る。そして傳染の機會にあれば直ちに甲より乙、乙より丙と傳染し行き、人體に於ける生命の根原を枯さねば止まぬのである。其傳

染力の頑強にして猛烈なる、其傳染徑路の陰險狡猾なること實に想像の外である。

微毒の名稱は多くあつて、支那では楊梅毒、又は廣瘡といひ、日本では、微瘡、瘡毒、唐瘡若しくは琉球瘡等の名がある。俗に「カサ」、「ヒエ」若しくは「シツ」と稱するのは、みな唐瘡の異名で、西洋では佛蘭西病、伊太利亞病、ナポリ病、佛蘭西痘瘡、西班牙痘瘡、獨逸病、波蘭病等の異名があつた。斯くの如く一つの微毒に、種々の名稱のあるのは、微毒の由來に關するのである。それは次ぎに述ぶるが如くである。

微毒の起原に就いては、種々の説がある。或る學者は之れをもつて、人類あつて以來の疾病なりと云ひ、其の症として、微毒に侵されたといふ原人の遺骨を擧げた者がある。併し其の骨は、果たして微毒に侵されたものであるか、何うかは明らかでない。其の他にも數多の説があるが、最も信ずるに足りる説は、彼のクリストファ・コロンブスが

西大陸の一部——今日のハイチ島——を發見した時に、水夫中に其の土人から傳染した者があつて、それをお土産に本國に持ち帰つたのから始まつたといふ説である。

コロンブスの歸航したのは、千四百九十三年にして、彼れの率ゐたる艦隊が、西班牙に歸着するや、恐るべき疾患とも知らず、又は知つても治療することも、豫防することも、一切判明らなかつたので、盛んに之れを他に傳播せしめたに違ひない。そこで西班牙には、これまで未だ嘗つて無いところの、新しい疾患が、突然に流行り出して、國民を驚かしたであらう。

恰度其の頃、佛蘭西では、軍隊を募集して居つた際であつたので、右の微毒患者なる水夫、又は西班牙の壯丁等が、之れに應じて佛蘭西の軍隊に加はり、さうして到るところで病毒を蒔き散らした爲めに、微毒は先づ西班牙から、佛蘭西の方へと侵入したのである。

斯くして其の翌年、即ち一千四百九十四年に、佛軍が伊太利のネーブル市を包圍した時に、佛軍に混じて居つた西班牙人から、微毒が傳播して、ネーブル市に流行を來たしたのである。其の勢ひ猖獗を極めて、市民を寒心せしめたが、其の佛軍から起つたので、伊太利では之れを佛蘭西病と名づけ、佛國では亦之を伊太利亞病、若しくはネーブル病と稱へたが、其の後猛烈な勢力をもつて、間もなく全歐洲に傳播したのである。

右の事實に依つて見ると、微毒の根源地はハイチ島で、同島には古くから微毒があつて、流行して居たけれども、コロンブスの發見以前は、他國と交通することがなかつた爲め、他の國では、そんな疾病のあることを、知らずに居つたのである。それから亞細亞の微毒であるが、それは歐洲から輸入したものである。恰好一千四百九十七年に、葡萄牙のワスコ・ダ・ガマの率ゐたる艦隊が、亞弗利加の南端喜望峰を廻つて、海路印度に通商を開

いた時に、水夫から印度人に傳染して、其所に流行を來たし、それから支那人に入つたのは、明の弘治正徳の間——一四八八年——一五二一年——で、支那人は之れを楊梅瘡と稱し、其の始めて廣東人から始まつたので、廣瘡と名づけたことは、前に述べた如くである。

日本では永正九年(一五二二年)に始めて九州に流行したのは、支那から來たので、之れを唐瘡又は琉球瘡と名づけたのは、唐土より來たといふ意味に過ぎぬ。

斯くの如く微毒の名稱が、國に依つて異なり、何れも其の傳染を始めた邦國の名を取つて、病名と爲したので、醫學上不便でもあり、且つ又、其の國人に不快の感情を與ふる恐れもあるので、伊太利の醫師で、且つ詩人であるところのフラカストロ氏が、其の不當を避くる爲めに、一千五百二十一年に、「ジヒリス」と題する詩を賦した。これはジヒリス (Syphilis sive Morbus Gallicus) と

へる牧者を誦つたもので、詩の意味はジヒリスが天の神を敬せざりし罰に依つて、未だ嘗つて世にあらざるところの悪病に罹り、全身瘡を發して苦悶懊惱するといふ、慘毒のさまをあらはしたものである。それからして微毒には、一般にジヒリスの名を用ゆるやうになつたのである。

T

タブー (Taboo) 接近嚴禁。禁忌。

タブーとは一定の事物、若くは人に觸れてはならないとか、避けねばならないとか、使用してはならないとかいふ禁止である。元來、この語はポリネシア語であつたが、トーテム (Totem) といふ語と同じく文明語となつたのである。

フロイド氏は其著「トーテムとタブー」の中でタ

ブーの意義は今日に在りては二つの相對立する方向に別れた。一は宗教的な、神聖化せられたものを意味し、他の一は怖ろしく、危険で不淨で、禁

ぜられたものを意味するに至つたと述べて居る。フレイザー氏はタブーも魔術 (Zauber) の一範疇だと考へる。然し魔術が積極的であるに反し、

タブーは消極的性質を帯び、「禁止」を意味してゐる。積極的魔術は希望すべき現象を再現せんとするものであるが、消極的魔術たるタブーは望ましからざる現象の再現の禁止である。

一、直接のタブーは次の如きものを目的とする。

(a) 酋長祭司等重要なる人、及び物を災害に對して保護すること。

(b) 酋長祭司の如きもの、強力なるマナ(魔術的力)に對して弱者——即ち婦女子及び一般通常人——を安全にすること。

(c) 一定の食物を攝り、又は死屍と接觸する

こと等に依つて起る危険に對する保護。

(d) 人生の主要なる行爲——即ち出産、青年入門、結婚、性的機能——を其の妨害に對して安全ならしめること。

(e) 諸神、諸靈の怒り、其の力等に對して人間を守護すること。

(f) 一定の行爲をなし、或は一定の食物を攝り、其れが爲めに子供に特別の性質を傳へて格別に兩親と同情關係に立つに至れる胎兒、幼兒を種々の危険に對して、安固ならしめる爲め等。

二、タブーは、ある個人の財産即ち其の田野、其の器具等を盜賊に對して安全にする爲めに設定せられたることがある。

ヴァント氏はタブーの觀念は「祭祀的觀念と關連する特定の物、又はそれと關係ある行動の畏怖を示す一切の慣習を包含する」と述べて居る。別の場合に於て又彼は「この言葉の一般的意味

に於て、吾々の理解し得るタブーとは、習慣道徳、若しくは明白に形式化せられた法律の中に定められた一切の禁止、即ちある物體に接觸すべからざること、其の使用を求むべからざること、或は一定の禁止された言葉を使用すべからざること等を意味する……と。

ヴント氏は比較的高度の文化を有するポリネシヤ種族のタブーよりは、寧ろアウストラリヤ未開種族の原始的状態に就いてタブーの性質を研究した方が一層實用に役立つ理由を述べて居る。アウストラリヤ人の場合では、ヴント氏はタブーの禁止を其れが動物に關すると、人間に關すると、他の物體に關するとに従つて三種類に分つ。其の本質が動物を殺すこと、これを食ふことの禁止に依つて成り立つて居る「動物タブー」は、トイテミズムの核心をなすものである。だが、人間を其の對象とする第二のタブーは本質的に別の性質のものである。初めからタブーになる人間は異常なる生

活の位置に置かれるといふ條件に拘束されて居る。かくして成年式の祝日に於ける若者、月經時及び分娩直後の婦人、新らしく生れた子供、病人特に死者等は總てタブーである。衣服、道具、武器の如くある者に不斷に使用せられた所有物は他の總てのものに對して永久的にタブーである。此のタブーを犯した者は其の違反に依つて、違反者自身もタブーとなる。然してタブーの違反から生起する一定の危険は淨化の儀式や、贖罪行爲に依つて解消せられるのである。「迷信」「圖騰」「魔術」(參照)

タンツ (Tanz) 舞踊。

舞踊とは身體のリズムの運動の謂である。舞踊と性的衝動とは、非常に密接の關係をもつてゐるものである事は、紛れもない事實であつて、古今東西に於てこれが戀愛の刺戟及び求愛の豫備行爲として行はれてゐる。未開民族中に於ては、舞踊を以て求婚の法則と

し、異性の面前で羞耻部を露出し舞踊する慣習が



郷土舞踊に酔ふ農民

ある。我邦臺灣の生蕃中にも求婚の目的を以て男子の圓座せる中央に於て妙齡の女子が猥褻な裸體舞踊をなす風習がある。今二三の例を次に舉げて見やう。

南阿バンツ種族の一つであるカフィル民族の結婚に於ては、歌と踊とが夜中まで続けられる。それは、新婦の方の客と、婚の方の客とが向ひ合つて踊るのであるが、二つの組が混淆はしない。斯うした騒ぎが夜中まで續いて解散されるが、その際、通例は男子が一人宛

自分の好む女を選んで、性慾をし逞うする事夜明けに迄も及ぶのである。これは我邦の盆踊に類似の點を發見する事が出来る。ミンネタリー種族の間には、奇異な踊が行はれると言はれてゐる。此の催の中に於て、女は自分の愛人を撰む機會を與へられる。若しその男子の器量がいと、武器を執つては後れを取らぬ強者であるとかいふ評判のある時には、女からの求愛が特に盛んに行はれる。娘達は踊の最中に自分の目ざした男の傍に進んで、彼の肩を敲く、若し男がこれに應じて女に跟いて行く時は、彼女は走りつゝ草叢の中に姿を隠す。けれども、若し男の方に於て、他の娘に誼があるとか、或は別の女を望んでゐるとか、乃至は、その際十分の性的満足を得た後であるかとする場合には、男は自分の手を肩に置いて、拒絶の印とする。茲に注意すべきは、オーマハ種族の言葉に Watho と云ふ言葉があるが、それが舞踊といふ事を性的行爲といふ事に通じて用ひられる言葉

であるといふ事である。

殊に興味あるのは、一八四二年以來佛蘭西の保護下にある南太平洋中の火山群島の住民マルケーサンスの間に行はれる結婚慣習である。

舞踊は戀愛の刺戟及び求愛の豫備行爲となるばかりでなく、また屢々戀愛の満足と快感とを買ふ代償物となる場合が少くない。この事は變態性慾の場合に一層顯著である。ザードゲル氏は、舞踏の樂をば「筋肉的戀愛」だと見てゐるが、氏は、その例として二十一歳になる歇斯帝利的な婦人を舉げてゐる。その報告に據ると、此の婦人は性的不感症に罹つてゐるが、他の點に於ては肉體上何等の異常もない。たゞ非常に舞踏が好きである。

マルロー氏もこれと同じ觀察をして、十八世紀の西班牙の僧侶達が道德と舞踏との關係を説いて、舞踏に對する國民的熱心を高調したつても、此の處にあるといふ事を洞察してゐる。

處女が一たび性慾的關係をはじめた後には、舞

踏に對する熱が以前程旺盛でなくなつて來るのが普通であるといふ事は、これ又意味深かい事なればならぬ。また現代の舞踏が、性慾的要素を多分にもつてゐるといふ事も注意しなければならぬ。



藝術としての裸體舞踊

舞踊はまた吾人の戀愛生活の縮圖である

と云へやう。シエルレル氏も指摘してゐる如く、その最も代表的のものは、ウォルツ(Waltz)である。此の踊は、恰ど戀愛の物語(Story)を代表してゐる。戀愛生活の縮圖である。即ち女を追ひ蒐け、

女はそれを避けて逃げ廻り、互に追ひつ追はれつ、或は殊さらに撃め顔をして見たり、或は身をかはし、ためつすがめつ、遂には結婚の喜びの表情に終るのがウォルツである。

グロース氏も反復力調してゐる如く、踊それ自身が亢奮を齎らすのと言ふまでもないが踊を見てゐるといふ事もまた同様、程度の差こそあれ、ある程度の亢奮を促がすものである。それ故、野蠻人間にあつて舞踊により男女の性的充實作用を刺戟しようとしてゐるばかりでなく、凡ゆる動物が、踊乃至これに類する運動によつて性的亢奮を促さうとしてゐるのは、如何にも自然である。そして踊には必ずしも男女揃つて踊る必要はない。只何れかの一方——普通男性であるが——さへ踊れば女性はそれを見物してゐるだけで、男性と同じ種類の亢奮を受ける。この現象は、夙にクーリツセル氏の注意を牽いた問題である。此は野蠻人間に於て、男性の舞踊が如何に深く女性亢奮を刺戟

するものであるかといふ事を次の如く例證してゐる。

「女子は謹まし氣ではあるが、熱心に男子の舞踊を見まもり、自分の愛人を選ぶ。恐らく彼等の性的淘汰は、舞踊、遊戯乃至祭禮等の間に於て行はれるであらう」と。

我邦の教育家、爲政者達は西洋舞踏を悲難し、當局は舞踏會、舞踏教習所とかいふものは貞操を破る機會を與へるものである——所謂男女の風紀を亂す怖れあるもの——として嚴重なる取締を講じてゐる。それは少くも事實であつて、獨逸の一報告によれば、ライプチヒ地方に於ける墮落した娘に、「怎うした動機から墮落したか？」と問ひを發すると、その中の十中八九は、「舞踏から」と答へると述べてある。その最も好い實例は、先年我邦で處罰された、伊太利人リツチと深谷某女との戀愛關係であつて、彼女は或る舞踏場に於て前記の

外人と知り合ひになり、醜關係を結むだ揚句、遂に同人をピストルを以て射撃し、刑事問題を惹起したことは吾人にとつても今尙ほ耳新しい事實である。

タトウ (Tattoo) 刺青。入墨。

刺青とは皮膚の下に、針先で色彩を刺し込んで種々の物の象などを描くことである。野蠻時代の遺習とも見るべきもので、今尙ほ之れを見ることが出来る。

皮膚の着色、描畫、刺青の類は、衣服の最初の階梯であつて、原始人に於いて見る表徴的衣服であつたのである。

此の如き表徴的衣服に關しては、最近幾多の人類學的研究があり、就中ウエステルマルク、ジエスト、マルキユアルドの如き人々は、價值ある結論を與へてゐる。

身體に描畫したり、裝飾したりする性癖が既に有史以前に於いて存在してゐた事は、非常に興味あ

る問題にして、而も此の事たるや、彼のハーバート・スペンサーが云ふ如く、文明人よりも野蠻人の虚榮心は、より大なるものなる事を立證してゐるのである。或る地方に於ける太古石器時代の住宅に於いて、着色したる泥土や、鐵粉と馴鹿の脂肪とより作られたる染色膏の見出されたるが如きは、恐らく此等の諸材料は、人體に描畫し或は着色せんが爲めのものと見做し得るであらう。プロツス・バルテルは、「刺青は裸體を隠蔽せんとする努力の結晶として生れたるものである」と云つて居る。實際吾人は更に之れを疑ふの餘地を見出し難い、ジエストは又此れと相似たる意味の言葉を與へてゐる。曰く、「人類が衣服を着る事の少なれば少ない程、益々刺青を多く施す。衣服を着る事の多ければ多い程、益々刺青を施す事少なし」と。

刺青によりて着色せられたる皮膚は、異性誘惑の手段となる場合が多い。

此の如く考察すれば、刺青と衣服とは、兩者決して相離るゝ事大なるものに非ずして、互ひに密接なる關係を有するものなる事が理解される。刺青の起源については、種々と興味ある説話が傳



聖林ダス1の連人體描畫

へられて居る。

鈴木券太郎氏は其論文「犯罪ノ文身」中に於て、文身慾の動機を次の如く分類して居る。

第一 宗教慾と關係するもの

タトウ

聖者の肖像は其の崇信の記號たると同時に男女戀愛の微證たり、基督又は聖母を畫くが如きは即ち是れなり。信仰又は祈願を表白するに於ては觀音を畫き又は南無阿彌陀佛てふ六字の名號を簡青するが如きは其著なるものなり。

第二 模倣慾と關係するもの

水夫、兵卒、道樂仲間、娼婦間に於て類似の表徴を刺文するの傾向あり、犯罪種族も亦然り。監獄、矯正院、貧院、授産學校「サルトン」温泉場は文身の流行を媒助す。

第三 復讐慾と關係するもの

自己を放棄したる情人の名又は渾名又は生首、敵手の名又は渾名、其他或る表徴に於て之を保明することを得。

第四 消遣慾と關係するもの

群と離れて素居し、徒然無聊、光を消し、鬱を遣るの途殆ど無し、是に於て不完全なる器

具を假り來りて身皮を刺文し漫ろに興を惹く、獨居監房に於て行はるゝ文身は即ち此類。

第五 虚榮慾(裝飾慾)と關係するもの

裸體を常習とし若くは屢々袒裼する時に於て文身の存在は勇猛、審美、社交を意味す。文身が全身又は半身を支配せし時代には居常又は頻次に全身又は半身を露出せる常習と聯關せり。左腕に文身するものゝ多きは其の躬自ら文身するの便あるにも幾分かは依るべしとは云へ主として左袒の習慣と關係す、但し女は男と立位を異にし、男の左を擇むに反し右を擇むの偏向あり。

第六 結社慾と關係するもの

ナボリの「カモラ」會員は各々結社感情を表出する記號を刺文す。

第七 高尚なる情熱と關係するもの

朋友の肖像を銘し、又は英雄の肖像を畫くの類即ち之なり。

第八 戀愛又は不潔なる情熱と關係するもの

情人の名、頭字、戀詞、相愛又は誓約の諸記號を主として下れるは春畫其他猥褻なる記號を刺文するもの此部に含蓄せらるゝ、例へば男女の生殖器を刻し、或は大凡の二字を記し或は裸體婦人を畫き或は此等の記號を複合したる類の如し。

と。

文身の方法は刺、截、燒等に依る。色料には唐墨、木炭、洋藍、樹汁、朱丹其他數種ある。

江戸時代には入れ墨の刑なるものがあつて、腕や顔などに墨を刺して犯罪人の目標としたことがあつた。されば入墨者といへば、前科者のことだつたのである。

テレゴニー (Telegonie) 先夫遺傳。

先夫遺傳とは、Aといふ女がBといふ男と結婚して、小供を生んだ後に、更に第二の夫Cと同棲して、先夫Bの特徴を有つ小供を生む場合に用ゐら

るゝ言葉であつて、この不思議の現象は、畢竟先夫Bの影響が後夫Cとの小供に及ぶ結果に他ならぬと考へられてゐた。換言すれば、母の懷妊の結果はその後の卵細胞に何等かの影響を與へるといふことである。

テレゴニーの事實が認められてゐた爲めであるか何うかは知らぬが、昔イスラエル人の間では、婦人は死んだ夫の兄弟と結婚する以外には、再婚することを禁ぜられてゐたさうである。「逆縁婚」参照)このやうな禁再婚論は、テレゴニーが認められてゐれば、誠に起りさうな議論である。然し果してイスラエル人がテレゴニーを信じてゐたか否やは疑問であるが、兎に角、生殖と關係する不思議な現象は古來人の注意を惹いたもので、強ち否定するにも當るまいかと思ふ。

テレゴニーではないが、酷く之と類似する先祖返りといふことが古來相應に理解されてゐたのを見ても、一斑は知れるであらう。プラタークに、希臘

の既婚婦人が黒兒を産んだ爲めに有夫姦の訴を受けた訴訟事件の記録が載つてゐる。この裁判に於いて、婦人はエチオピア人の四代の後裔に當る爲めに黒兒を産んだのであつて、決して有夫姦の爲めでないと言つて辯護されてゐるが、これなどは先祖返りの認められてゐた明かな證據である。此の辯護は今日の遺傳觀から言つても正當な議論でその理由を説明し得ないに拘はらず、當時遺傳現象に對して、相應の理解を有つてゐたことは明かである。

テレゴニーが斯く古代に信じられてゐた計りでなく、實に十九世紀の後半に於ける評々たる科學者、アガシズ、ダーウイン、カーペンター、スペンサー、ローマネス等は皆之を信じてゐた。ワイズマンは體細胞と生殖細胞との無關係を高調し、當時の遺傳及び進化説に大影響を與へた生殖質連續説から言へば、當然之を否定することになるが、然し氏と雖も、小供が先夫に似ることの可能を無下

に拒まうとはせず、兎に角この事實は一層精密の實驗に依つて確めた上でなければ何とも言へぬと述べてゐる。就中テレゴニーを信じ、之を以て確固不動の自然法と見做した人は家畜の養成に従事する飼育家で、彼等は(一)純粹種の雌が一度雜種の雄と掛合はされると、その結果、不純になること、(二)之に反し劣種若くは雜種の雌は初め優等種の雄と交尾するならば、その後は、たとひ劣等種の雄と掛合はされても、尙ほ優等種の小供を産むと信じてゐた。

テストイクル (Testole) 睾丸。

陰囊 (Scrotum) の内部に有する一對の腺で、精子を生ずる作用をなす。

テイーアシエンドウング (Thierschändung) 動物汚行。

動物汚行は、獸類に對し、甚だ野蠻極まる、不自然の性慾遂行をなすものであつて、専ら色情倒錯者の行ふ處のものである。

この事實は古今東西の文献におびたくしく吾人は發見する處であつて、また、色情倒錯者に非ざる常人の之れを行ふものも少くない。中には人間が獸類を犯す代りに、獸類が人間の男女を犯す場合もある。最近の實例としては、去る六月二十日東京毎夕新聞に載つた『新蛇性の淫』といふのである。その報道に依れば

「去る十六日午後上都賀郡鹿沼町字上野町石井別莊附近農夫草狩太郎長女ミツ(九)(假名)貝島上の日蓮堂附近に草狩りに行き數時間の後草原の上で鎌をトギ居る際、小蛇が彼の乙女を見染めてか體中に喰ひ入り彼女が氣付いた時は蛇の尾部が二三寸出てゐた丈けであつた、ミツ子は眞つ青になり一時昏睡の状態に陥つたが漸く蘇生して家に急報早速家人は某醫師の應急手當を施した……と」いふのである。

「今昔物語」に出て居るのを見ると、
「むかし河内國讚良郡馬甘村に、ある大百姓があつ

て、此の百姓の家に一人の年若い娘があつたが、

或日養蠶の手傳ひをするとして、大きな桑の木に登つて桑の葉を摘んで居つた。すると何所からともなく、一匹の大蛇が出て来て、娘の登つて居る木の根元に纏つて居るので、通りかゝりの人が之を見て大いに驚き、娘にそれと注意してやつた。娘は聞いて下を見たが、餘りの恐しさに氣を取り亂し、其まま根元へ轉げ落ちると、大蛇は娘を辱め、しかも其體を十重二十重に巻いて、更に離れる氣色もない。

娘は生氣を失つて、桑の木の根元に倒れて居ると、両親が来て此の有様を見届け歎き悲しみながら、近くの醫者を迎へ、娘の體から蛇を離させ様としたが、どうしても離れなかつた。其所で醫者は工夫をして、稻の藁三束を焼いて、三斗の汁を作り、娘の體を逆に釣らせて、其汁を注ぎかけると、さしもの大蛇も之には堪らないと見え、急に離れてヌラ／＼と這ひ出したので、直に打ち殺して棄て

ゝしまつた。

所が其時に、娘の腹の中から蚪斗の様なもの、凡せ五升ばかり出た。すると娘は俄に人心落付いて、元の體になつたが、夫れより三年の後に、再び以前の蛇が現れ出て、今度はとう／＼娘の命を奪ひ取つてしまつたと云ふ。」云々
無住法師の『砂石集』には人妻を犯した蛇の話が載つて居る。

由來、天倫に背した淫行中、その最も甚だしいものは、動物汚行であるとされ、太古のモセスの法典などこれを犯した者を死刑に處して居る。

『舊約聖書申請記』にも、亦、

「獸畜と交合して之によりて己が身を汚す勿れ。これ憎むべき事なり」

又

「男子若し獸畜と交合しなば必ず殺さるべし。汝等又其獸畜を殺すべし。婦人若し獸畜に近づき之と交らば其婦人と獸畜とを殺すべし。是等は共に必

す誅せらるべし。其血は自己に歸せん」
 などあり、日本に於ても、「古事記」仲哀帝の條に、
 天皇崩御の際、國の大奴佐を取りて、馬婚牛婚鶏
 婚犬婚等の罪人を求めて國の大祓をなす由が見え
 てゐることは、其頃の人間が、獸畜を生殖の對稱
 としてゐたことを、物語るものである。「獸畜」
 参照)

トイテム (Totem) 圖騰。

トイテムとは北米土人の個人又種族に深き因縁あ
 りとして其人又は其家族の紋などに用ゐ大に崇拜
 せる天然物又は其の表號であつて、それは概して
 動物であつて、食用に供し得る無害のもの又は危
 険にして恐れられて居る動物であるが稀にトイテ
 ムは植物又は自然力(雨、水)なることがある、而
 してそれらは全部族と特殊の關係に立つて居る。
 オーストラリア人の間にありては、トイテミズム
 (Totemism)の組織は彼に缺けて居るあらゆる宗
 教的及び社會的諸制度の代用となり、その種族は

於是小さな部族に分かれ、各部族は各自のトイテ
 ムの名をもつて居る。

そして、トイテムは第一に部族の祖宗であり、又
 更らに、その保護神であり救護者である。
 故に、屢々神託を與へ、危険に遭遇せんとする場
 合にはその——所屬の——子供を識別して居てこ
 れを免かれしめる。それ故にトイテム所屬の人々
 は、其のトイテムを殺害せずといふ宗教的な義務
 及び、其の肉を喰ふこと——其他トイテムが提供
 する如何なる享用をも——を差し控へると云ふ神
 聖な義務を負ふて居り、苟くもこの義務を犯す時
 は人爲を待たずして刑罰が加へられる。トイテム
 たる性質は獨り單一の動物又は單一の個體に固着
 して居るのみでなく、其の種の全員に固着して居
 るのである。屢々饗宴が催され、その饗宴に於て
 トイテム所屬の人々は、儀式的な舞踏に依つて所
 屬トイテムの所作や、その特性を表現し若しくは
 模倣する。

トイテムは、或は母系により或は父系によつて傳
 承せられて行く、恐らく前者即ち母系傳承が最初
 のものであり、漸く後に至つて、後者即ち父系傳
 承がこれに代つたものであらう。トイテムに所屬
 することは、アウストラリヤ人のあらゆる社會的
 義務の基礎であつて、其れは一方には種族籍の範
 圍を超えて居り他方、血族關係を排してこれに代
 ることになるのである。

トイテムは、一區域又は一地方に限らるゝもの
 はない。同一トイテム所屬の者も、相離れて居住
 し、又他のトイテム所屬の者と友誼的に共同生活
 をして居る。

結局、吾々は、精神分析學者の興味が傾倒せられ
 るところの、かのトイテム組織の特性に就いて、
 考察しなければならぬ。トイテムの行はれると
 ころには、殆んど到る處に「同一のトイテムの者
 は相互に性的關係を結ぶべからず、従つて亦相互
 に結婚すべからず」といふ律法が存在する。これ

即ち、トイテムに結びつけられたる異族結婚
 (Exogamie)である。

然しながら、異族結婚に於ても、そのトイテムは
 相續せられて行き、結婚に依て變更されるもので
 ないから、この禁令の結果は、母系相續の場合に
 容易に豫知し得られる。例へばカンガルーのトイ
 テムに屬する男が、鵝鵝トイテムの女と結婚した
 とすれば、其の子供は男女共に總て鵝鵝トイテム
 である。かくの如き結婚から生れた息子には、そ
 れ故にトイテム規則に依り、同じ鵝鵝トイテムに
 屬する自分の母、姉妹との性的關係は不可能とせ
 られる。

然し吾々は、トイテムと結合した異族結婚が母や
 姉妹との性的關係を禁遏するだけのものでなく、
 それ以上の仕事を爲し、従つてそれ以上のことを
 目的として居たことを洞察するにはたゞ一言の注
 意で足りる。即ちこの異族結婚制は男子にその男
 の屬する部族の總ての女性との性的結合を不可能

ならしめたのである。従つて血族的には何等關係のない多數の女性をも血族と同様に取扱ひ彼女らとの性的結合を不可能ならしめた。文明民族の間には比較すべきものもない程かくも甚しき制限に對し心理學上からの承認を與へることは、先づ困難である。唯、理解し得ることは、祖先としてのトーテム(動物)の役目が、頗る嚴肅に考へられて居るといふことである。同一トーテムから出生したものは、何人も血族であり、同一家族に屬する。而してこの家族に在りては其の最も遠い親族關係でも、それは性的結合についての絶對的障害と認められて居る。

かくの如くして、眞の血族關係に代ふるにトーテム親族關係を以てすると云ふ、吾々にもよくわからない一つの特異性と結びついた所の、近親不倫に對する異常に高度の畏怖若しくは近親不倫に對する異常に高度の敏感性といふものをこれらの未開種族は吾々に示すのである。然し吾々は、この

矛盾を過度に誇張すべきではない。而して、トーテム禁令は事實上の近親不倫を特別の場合として包含すると云ふことを銘記すべきである。「近親相姦」「接近嚴禁」参照)

トリバーデ (Tribade) 女性相姦。擦淫。

女性間に行はれる醜行爲にて、この名稱は古代希臘の淫婦トリバス (Tribas) の名に基いたものである。即ち彼女はこの淫行の權輿として、世に知られて居た。

(*tribas* reiben, lesbische Liebe, Unzucht zwischen zwei Frauen, Onanie usw.)

トリツベル (Tripper) 淋疾。

花柳病 (Venerische Krankheit) の一種で、病源は淋毒球菌にして、尿道を浸し、膿を生じ排尿の際疼痛を感じる。此等の疾病に罹れる者との接觸により傳染するものであつて、潜伏期は三日位を多しとする。痲膿を眼に接觸するときは失明する危険がある。

U

ウラニスムス (Uranismus) 女子同性色情。女子同性的戀愛。

女子の同性性慾をアモール・レスピクス (Amor Lesbicus)、或はザツフィスムス (Sapphismus) と名づけ、女子の同性色情をトリバーデ (Tribade) と稱する。

(Von Uranos, dem Vater der ohne Mutter geborenen Urania, geschlechtliche Neigung des Mannes zum Manne, s. Urning.)

歴史上にも散見し、又吾人の都市に於ても之れを見ることが出来るのである。

顯著なる女子同性性慾者は好んで男装をなし、男子として他の女子に對する。斯かる女子は頭髮を

短く切り、男子の職業に従事することを喜ぶ。性慾的には著しく興奮すること稀ならず、且、最も純粹なる女子遊蕩兒となる。

ウラニスムスに就いては、我邦に、次の異名がある。

トーハー。おめ。でや。おでや。おぢや。おはから。お熱。御親友。等々

女子同性愛を取扱つた小説類は可成り澤山ある、がその最も著名なるものはデローの「尼僧」、西鶴の「好色一代女」並に支那の「林蘭香」、「杏花天」などであらう。

ウルニング (Urning) 男子同性色情。男子同性性慾的戀愛。

これは男子にてありながら女子として男子に對して好愛の情を有する倒錯症をいふので、男子の全性慾的欲求及び全戀愛が早く兒童期より全生涯中同性の者の上のみ向くことは背理的であるが、斯かる病的現象は悲しいかな屢々存するものである。

つて、其の心理的及び道德的方面より、又公衆並びに法學者より全く誤解せられ、唯、斯くの如き患者自身及び精神病醫によりてのみ解せらるゝのは遺憾である。斯かる性質を有するアツセソール、ウールリツヒが、同性戀愛の辯護人として公然と現れ、之を記述し、又之にウールニングなる名を冠したのである。そして今尙此の名が好んで用ひられてゐる。

ウールニングが他のウールニングに戀することは少なく、寧ろ尋常なる男子に戀するを常とする。後者は殊に索引的であつて、ウールニングは男子の「妻」たらんことを希ふものである。尙又ウールニングは妻を恰も下女或は家婦の如く遇し、之れを顧みる事殆どなく、男性の情人を引き入れ、斯かる夫婦間の不釣合の結果、飲酒癖に陥るを常とする。

ウールニングの最も普通なる出會場は公衆便所及び浴場等である。職業的脅嚇者は之をよく知り、

此處にて金錢を受け、ウールニングに近づく。然し其の名と其の位置とを知るに及んでは、告訴を以て之を脅し、金錢を捲き上げる。ウールニングが富有なるに於ては、彼等は益々其の暴威を逞しうし、斯かる方法に富有なるウールニングは破産し、苦悶と困苦に充ちた生活を送ることが稀でない。

先年雑誌「文藝時代」(二卷一號)に發表された、稻垣足穂氏の創作「WOL」は此問題に關する好個の資料といへやう。

支那ではウールニングのことを、美少年、美少、頑童、變童、寵童、妓童、男妾、串童、嬰童、弄童、倖童、龍陽、男娼、相公、像姑、などいふ。日本語では稚兒様、稚兒、御稚兒、陰間、衆道、小姓、二世さん、おかま、かはつるみ(僧侶間)、よか(九州)といひ、朝鮮では、尻童、男四堂と稱へてゐる。(「鶴姦」参照)

ウーロラグニー (Urolagnie) 尿淫症。

異性の排泄物を口中などに受けて性的快感を催ほす色情倒錯症をいふ。(「不淨物淫亂症」参照)

ウテルス (Uterus) 子宮。

俗に子囊と稱へ、其の長さ約三寸強、肉質にして擴張性に富み、扁平梨子形にして、稍々三角形の内腔を有す、之れを子宮腔と云ふ、又子宮の下部は狭小となりて、絞れた處がある、之れを子宮頸と云ひ、頸以上は子宮體で、頸以下は腔内に挺出す、之れを子宮腔部と稱へ、其の中央に一の孔がある、之れを子宮口と云ふ。其の開口の状態によりて、未産婦と經産婦との鑑別が出来る、即ち未だ分娩せざる婦人に於ては、細小なる横裂の開口をなすが、分娩の後には兩側に小斷裂を生じ、子宮口を開大して、子宮腔部を前後の兩唇に分つ様になる。

子宮は精子と卵子と會合して受胎するとき、子宮粘膜から分泌する粘液は、胎兒初期の營養を司り、亦た子宮頸の粘膜から分泌する、硝子様透明

の粘液は、子宮口を閉塞して、妊娠後、妊娠卵の逸出と、更に他の精蟲の進入を防ぎ、四十週の後分娩する迄、胎兒の營養機能は、臍帶によりて、母體より供給せらるゝとは云へ、其の内腔に受容して發育を遂げしむるものは、一に子宮の働きである。

V

ファガブントム (Vagabundentum) 浮浪。

浮浪とは一定の住所生業なく諸所を徘徊することにて、かゝる人物を浮浪者と稱へる。

浮浪者と性問題とは密接なる關係を有し、彼等の多くは性的不道德にして、専ら婦女誘拐、幼女姦淫等の性的犯罪を犯すものがあり社會に害毒を流すこと少なくない。

ワギナ (Vagina) 膣。

膣口即ち膣の入口。俗に陰門 (Vulva Fossa Magna) から子宮に達する膜質の管で、膀胱と直腸の間に挟まり、上端は子宮に接し、下部は左右陰唇の中央、前庭の下部に開通してゐる。局所利用の犯罪は屢々吾人の耳にするところであつて、大正十四年六月三日、東京毎夕新聞紙上に報道された「すごい泥棒藝妓肥つた身體を利用して」といふ記事もその一例を示すものである。曰く、

「三十一日午後八時頃浅草區千束町二の一八〇藝妓業春海老家鈴木きく方の抱藝妓喜代次(三)は御座敷から歸つて来て見ると主人きくが便所へ行つて留守だつたのに乗じ帳場の中から十圓紙幣十枚を竊取したが折悪しくそこへ主人が歸つて來たので早速紙幣をかくし何くはぬ顔をしてゐたが騒ぎ立てられ嫌疑を受けたので自分から進んで裸體になつた所紙幣の端が見えたのでとうとう犯人だと

判明象潟署につき出された此女は體量二十一貫もあつて東京の藝妓中での大女で其身體を利用して右と同様な手段で昨年八月十一日浅草千束町二の一七四鳥料理「銀なべ」方でお客なる齋藤某が便所へ行つた留守中百圓紙幣を竊取したのに味を占めて其後浅草仲店「大松」料理店初め附近の待合玉突場等十二三箇所借金千餘圓を竊取したことを自白したが、尙五年前浅草へ來る前澁谷でもこの手段で盗んでゐたがお客へは料理店待合等で辨償内済してゐたので今まで知られなかつたと云ふことである。云々」

ワギニスムス (Vaginismus) 膣痙攣。

膣痙攣は膣に起る痙攣であつて、痛みを伴ふものである。之は性交を極めて困難にし、時には性交を不可能にすることさへもある。ある場合の膣痙攣——假性膣痙攣——は局所の裂傷又は炎症——即ち處女膜が非常に硬いとか、膣口が狭いとか、或は結婚の當夜瘡痕を受けて痛みを起したとか云

ふ——に基くものであるが、眞正の膣痙攣は斯やうな局所的原因から起るものではなくて、重に神經——自慰、陰莖過大、結婚時の年齢過少、性交中に於ける恐怖等——に起因するものである。

其症候は膣の入口の知覺が非常に過敏になつて、刺戟を感ずることが甚だ強く、劇しいのは、獨り膣ばかりで無く、骨盤底、肛門、大腿及び背部等の諸筋に迄も痙攣性の收縮を起すものである。

性交中に於ける膣痙攣は往々にして男女分離せざるに至るものもある。寶永七年出版の事實小説「御入部伽羅女」卷の五に伊勢參宮の男女が途中に於て相觸れたる處、神罰を蒙り兩體分離せざるを見世物 (Schauspiel) としたることが記してある。古事記神話中の童子女松原の説話の如き上記の事實を美化したるに外ならない。

此症狀は多くは處女に起るもので、殊に初婚の夜に起ることが多いけれ共、稀れには結婚後日を経るから起るものもある。而して本症に罹ると、患

婦は男子に近づくを厭ひ、後には外陰部に炎症が起り、歇斯帝利症に陥るものである。

ワンピール (Vampir) 飛縁魔。毒婦。妖婦。魔の女。

ワンピールは元來の意味は一稱の幽靈であつて、眞夜墓地より抜け出で眠る人々の生血を吸ひ取ると言はるゝ怪物である。が轉じては人を苦しめる者の意味に用ひられて居る。特に新しい意味で劇或は活動劇に出て來る妖婦で美貌と挑發的態度を以て男子を誘惑するものを云ふ。(性的吸血症) 参照)

ワンピリスムス (Vampirismus) 性的吸血症。

ザディズムスの一種であつて、男或は女が相手を傷けその血潮を吸ふて性的満足を得る色情倒錯症を云ふ。中世の歐洲に於ては、この變態性慾的行爲に關聯して吸血鬼の傳説を生んで居る。サクソ・グラマチカスに斯う云ふ物語が載つて居る。

アスマンドは戦友アスヴィツドの兄弟の契りを結び、死んでも離れないと云ふ誓ひを立てゝゐた。ところが、或る時アスヴィツドは死に、その屍は生前に忠實であつた彼の馬や、犬と共に埋葬された。そこでアスマンドも豫ての誓ひ通り、友の側に埋められ、食物としていろ／＼御馳走が供へられた。丁度其場所へ瑞典王エリックが部下を率ゐて通りかゝられたが、彼等はその墓には多くの寶物があることゝ考へ歛を以て掘り返し材木で組んだ窖の所まで行つた。之を探索するために一人の若者を籠に入れて窖の中へ下してやつた。然しアスマンドは之を見るや若者を籠から引落して自分がそれへ乗り引上げの合圖をした。瑞典人共はその重さにより籠の中には澤山の寶物が入つてゐるものと思つて引上げた。けれども一行は知らない人間が現れて來たのを見て、その異様な姿に吃驚し、死人が生き返つたものと思ひ引綱を放して一目算に逃げた。

アスマンドは瑞典人を呼返さうと努め、自分は決して怪しい者ではないと言譯けした。エリック王がアスマンドを見た時には王は彼の物凄いい面に驚かざるを得なかつた。彼の顔からは血が湧き流れ四方に迸つて居るのである。茲でアスマンドは次の通り一伍一什を物語つた。彼は戦友アスヴィツドと共に埋められて居た。然し友は毎夜生き返り餓鬼の如く飢えて己が馬を食ひ食ひ次に犬を食ひ、それが盡きたので今度は彼に向つて來た。鋭い爪で彼の頬を裂き、一眼を抉つた。彼は友の食物となり果てたくないたので必死の抵抗を続け遂に之を刺殺して了つた云々。一七二〇年の頃から下匈牙利、セルビア、ワラキア等の地方一帯に恐ろしい風説が擴がつて來た。人の生血を吸ふ鬼が出沒すると云ふのである。住民は皆恐怖に襲はれた。キソロツアと云ふ村でピーター・ボソジョウイツツと呼ぶ奴隷が死んで埋葬されたが、二日の後、その地に多數の病人が出

來、八日の間に九人の死亡者を出すことゝなつた。さうして其病人達は皆「自分はピーターのため病氣になつたのである。彼は夜中我々を訪れ我々に取つて生血を吸つた」と述べるのであつた。此禍を除くためピーターの墓を發いた。埋葬後三週間經過して居たが、彼の屍は少しも解體を示さず、頭髮、鬚髯、爪などが延び、古い皮膚は剥けて新しい皮膚が出来、顔つきと云ひ體軀と云ひ如何にも健全で、死人とは見えなかつた。さうして口は生血に染まつて居た。そこで其の屍を掘出し劍を胸に突き刺した。血は口と耳から迸り出た。それから屍を火葬にした。十八世紀の初めのころセルビアのメヂュギアにも吸血鬼事件が起つた。この地にはアルノツド・パオルと云ふ牧夫が居たが荷馬車から落ちて首を折つた。彼は生存中屢々ゴツソワの吸血鬼に悩ませられたと語つて居たが、死後二三十日たつと方々でアルノツドの鬼が尋ねて來たと云ふ噂が立ち、

訪問を受けた者の中四人まで死亡することゝなつた。それで彼の埋葬四十日目に墓を發いて見たが其目、耳鼻から新しい血が流れ、さうして着物は血に染まり、古い皮膚や爪は脱落して新しいのが生えて居た。この不祥な屍は直ちに焼いたが怪事はそれで止まなかつた。何となれば吸血鬼に嚙まれた者は、又同じやうな吸血鬼になるのであるから。メヂュギアの騒ぎは益々重大となり遂に政府は三人の軍醫に命じ吸血鬼の疑ひある墳墓全部を發掘せしめ、其の状態に應じ必要と認むるものは焼却せしめると云ふ事になつた。軍醫は命を請けて墓地に行き死體十三個を掘出した。其の復命書の大要は次の通りである。日附は一七三二年一月七日となつてゐる。

一、スタナ。女。二十歳。分娩後赤兒と共に埋葬さる。死後三ヶ月。赤兒は餘り粗末に淺く埋めたる爲半ば犬に食はれしが、吸血鬼となりしこと疑ひなきものゝ如し。母の屍は腐敗し居らず。

胸を切開せしに新鮮なる血液を發見せり。心臓内の血は凝結せずして液状を呈す。内臓は全部健全なり。古き皮膚及び爪は脱落して新しきもの出づ。

- 一、ミリザ。女。六十歳。埋葬後九十餘日、胸には液状の血液多量に存在せり。内臓其他の諸器官前者の如し。然し彼女は生前瘦身なりしが今は肥満し切開の結果非常に多量の脂肪を有することを認めたり。彼女は生前自己が吸血鬼の犠牲者なることを云ひ張り居たり。
- 三、赤兒。生後九十日にて死去。同じく吸血鬼の状態に在りき。
- 四、ジョアチム。牧夫の息。十七歳。埋葬後八週間と四日。この屍は吸血鬼の状態を示す。
- 五、牧夫ミローの息。十六歳。九週間に埋葬。全然健全にして且吸血鬼の状態にありき。
- 六、ラツシア。女。埋葬後六週間。茲に彼女の赤兒(生後十八日)。埋葬後五週間。胸部及び胃中

- に血液を認めたり。
- 七、十歳の女子。埋葬後二ヶ月。屍は健全にして腐敗等の徴候を認めず。胸中に血液を發見す。
- 八、現村長の妻及び赤兒。妻は死後七週間、赤兒は死後二十一日、兩者とも他の死體と同一地層に相接して埋葬せられあるも腐敗し居れり。
- 九、コーポラル・レイド。下男。五週間に埋葬したるものなれども急速に腐敗しつゝあり。
- 十、女。埋葬後五週間。同前。
- 十一、スタンコ。六十歳。牧夫。死後六週間。胸部及び胃には多量の血液を藏し全身吸血鬼の状態に在り。
- 十二、ミロー。二十五歳。牧夫。死後五週間。吸血鬼状態。
- 十三、スタンジョイカ。牧夫の妻。埋葬後十九日。顔色薔薇色を呈す。彼女は前に述べたるミローに嚙まれたるものなるが右の耳下に指の長さ程の創痕ありて其の周圍に血痕を附着す。棺を開

きたる時、彼女の鼻口より鮮血迸出せり。胸部及び心臓の心室内には粘質の血液を發見したり。腸は凡て健全なり。

以上の死體検査の後吸血鬼状態にあるものは斬首の上火葬に附した。

前記の吸血鬼の話はベリン・グルド氏の「民間傳承學」の中に載つて居るものである。

泉鏡花氏の小説「湯女の魂」第十四節にこの吸血鬼の話を描いた處がある、その全文をこゝに引用して見やう。

「これへ何と、前觸のあつた百萬遍を持込みましたらうではありませんか、座中の紳士貴婦人方、都育のお方にはお覺はないのでありまするが、三太やあい、迷イ兒の迷イ兒の三太やあいと、鉦を叩いて山の裾を廻る聲だの、百萬遍の念佛などは餘り結構なものではありませんな。南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛……」

亭主は然ぞ勝手に天窓から夜具をすつぽりであらうと、心に可笑く思ひまする、小宮山は山氣膚に染み渡り、小用が達したくなりました。折角可心地で寝て居るものを起しては氣の毒

吸血蝙蝠の怪 泉鏡花氏作「湯女の魂」より



だ。勇士は響の音に目を覺ますとか、美人が食の音に起きませぬやう、そつと拔出して用達しをしてまわり、往復何事もなかつたのでありまするが、廊下の一方、今小宮山が行つた反對の隅の方で、柱が三つばかり見えて、其に一つく

掛けてあります薄暗い洋燈の間を縫つて、ひら／＼と目に遮つた、不思議な影がありました。其が天井の一尺ばかり下を見え隠れに飛びますから、小宮山は驚いて、入り掛けた座敷の障子を開けも遣らず、はてな、人魂にしては色が黒いと、思ひまする間も置かせず、飛ぶものは風を煽つて、小宮山が座敷の障子へ、ばたりと留つた。是は、是は、全くおいでなすつたか知らんと、屹と見まする、黒い人魂に羽が生へて耳が出来た、明に認めましたのは、些いと罵ぐらゐはあらうと云ふ、大きな蝙蝠であります。其奴が羽拂をして、ぐるり／＼と障子に打付かつて這ひ廻る様子、其の動くに従ふて、部屋の中の燈火が、明くなり暗くなるのも、思ひなし心持の行爲でありますか。扱ては隨筆に飛彈。信州などの山近な片田舎に、宿を借る旅人が、病もなく一晩の内に息の根が止る事が屢々有る、其は方言飛縁魔と稱へ、蝙蝠に似た嘴の尖つた

異形なものが、長袴を着て扱帯を纏ひ、旅人の目には妖艶な女と見えて、寝て居るものゝ懐へ入り、嘴を開けると、上下で、口、鼻を蔽ひ、寝息を吸つて吸殺すが爲だとございます。あらぬか、それか、何にしても妙ではない、恁やうなものを入れたらならぬと、小宮山は思案をしながら、片隅を五寸か一尺、開けるが早いか飛込んで、ぐるりと廻つて、びしやりと閉め、合せ目を押へ付けて、どつこいと踏張つたのであります。暫く、しつかりと押へ付けて、様子を窺つて居りましたが、其限物音もしませぬので、先づ可かつたと息を吐き、是から靜に食の方を向きますと。豈圖んや其の蝙蝠は座敷の中をふわり／＼。南無三寶と呆氣に取られて、目を睜つた鼻つ先を、件の蝙蝠は横撫に一つ、ばさりと當て、向へ飛んだ。何様猫が冷い處をこすられた時は、小宮山が其

時の心持であります。

噓もならず、苦り切つて衝立つて居りますと、蝙蝠は翼を返して、斜に低う夜着の綴糸も震ふ「繪本怪談揃」より



ばかり、何も知らないですよ／＼と寝て居る、お雪の寝姿の周圍をば、ぐるり、ぐるりぐるりと三度。縫つて廻はられる度に、うゝむ、うゝ

む、うむと幽に呻いたと、見るが否や、萎れ伏したる女郎花が、無残や風に吹き亂されて、お雪はむつくと起りましたのであります。小宮山は論が無い、我を忘れて後に撞と坐りました。蝙蝠は翻つて、向側の障子の隙間から、ひら／＼と出たと思ふと、お雪が後に跟いてすつと。

蚊帳を出で、未だ障子あり夏の月、雨戸を開けるでもなく、唯風の人るばかりの隙間から、體がすつと細くなり、水に映つる柳の陰の隠れたやうに、ふいと外へ出て見えなくなりましたと申しますな。勿論、蝙蝠に引出されたんで。」

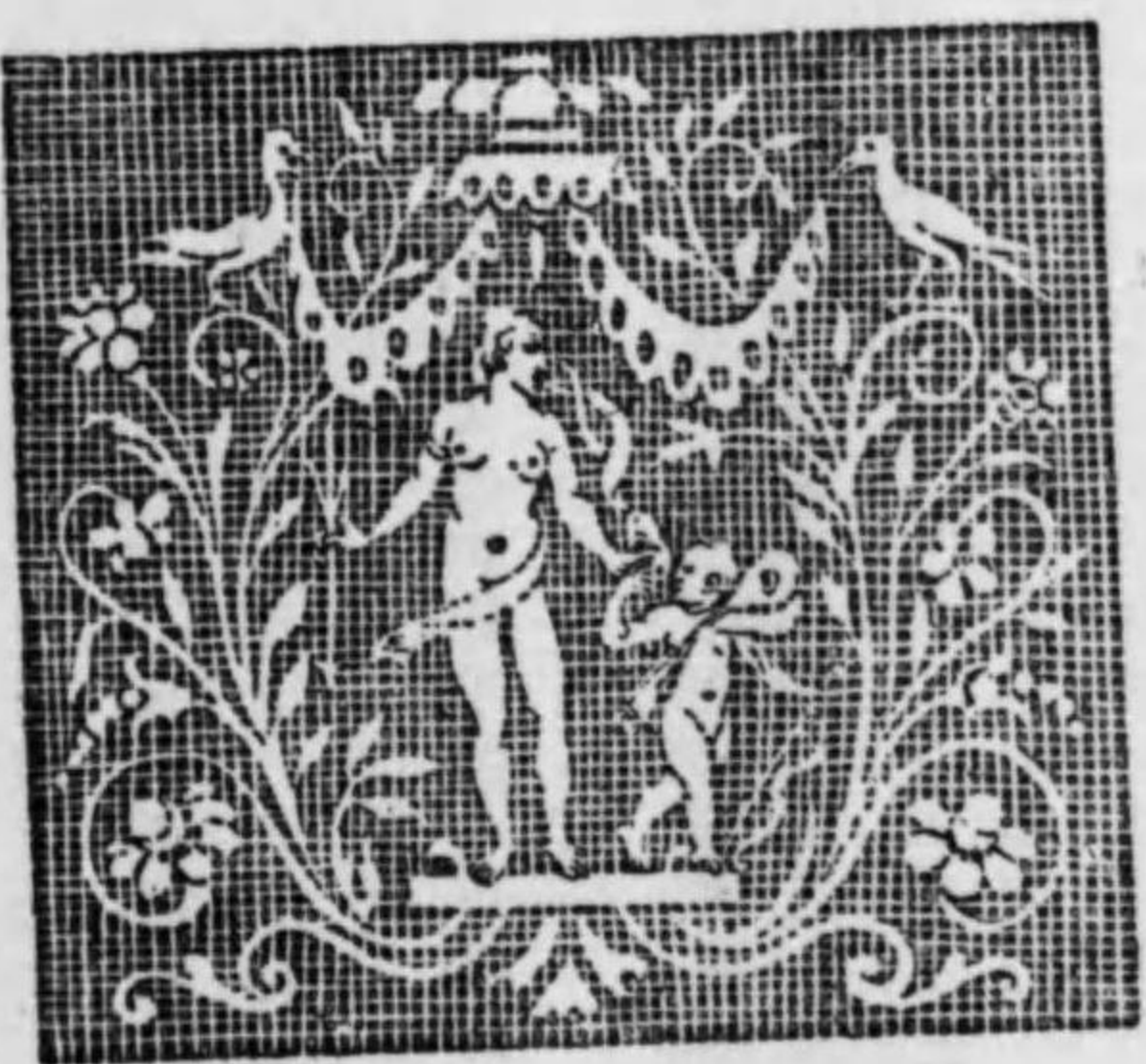
此話の中にある飛縁魔といふのは桃花山人訂竹原春泉畫「繪本怪談揃」に據るとかう書いてある。飛縁魔はもと佛説より出たる名にして女犯を戒たるなり人の女に迷ひて身を亡し家を失ふをさとさしむ飛縁魔縁障女とも訓ず又外面似菩薩内

心如夜叉とも説て顔と心とは格別にして恐ろしきは女人なれば惑ひ溺るべからずとの教なり女の性は皆ひがめり只迷をあるじとして彼れに従ふ時やさしくもおもしろくも覺ふべきことなりさあれば是に心をとらかしまどはされて家國を失ひ身を亡したるものすくなからずもろこし其の桀王の妹喜殷の紂王の妃己周の幽王の褒姒等皆飛緣魔なり去ば飛緣魔に見入らるゝ者は身帯はいふもさらにして身の腎精淨血迄も吸とられ遂にこれがために命を失ふなり家に女の紅粉於しろいを附るを仕粧と云けせうとは化粧(化粧)ふことなり一休和尚女の化粧するを見給ひて狐の藻をいたゞきて鬻體を着美女に化るに異ならずと云ひけり云々。「飛緣魔」参照)

フエーネリツヒ・クランクハイテン (Venerische Krankheiten) 花柳病。
痲病。下疳。梅毒をいふ。攀柳析花の非行から來るものであつて、妻帯の男子にして若し此病にお

かされるものあれば、直ちに其妻に感染し尙ほ其の子孫にまでも遺傳すると云ふ。

フエヌス (Venus) 維納斯。美神。
ヅキナスは戀と愛慾を司る雅典の女神である。此



戀 愛 神 維 納 斯

神は女
陰を神
格化し
たもの
であつ
て、後
アフロ
デイト
の名の
もとに
希臘全

士に於て廣く祀られ、其の祭日を稱してアフロヂジー若くはアドニー (Adoni) と云ひ頗る淫猥に亘るを常とした。案ずるにヅキナス拜は東洋より來

れるものであつて、東洋では之をアスタルテ (Astarte) と稱した。「愛慾神」参照)
フエヌスバンド (Venusband) 戀の下紐。

愛慾の女神ヅキナスの有する帯で、一種の不可思議なる護符である。一切の賜、一切の恵など皆此帯によりて、同神に祈願する婦人に降ると云ふ。然れども想像を起し、無情の心をも起すものも又此帯であると。ヅキナスがジュノー及びパラス・アテネと美を争つたときにも此帯を締めて、パリスの判決をして己に資せしめたと云はれる。フエヌスバンドは貞操帯の一名である。

風俗史家エドゥアルト・フックス氏は、其著「繪入風俗史」の中で、この貞操の起原、汎布、構造等に就いて次のやうなことを述べて居る。
「背かれた夫の野蠻な復讐は、用心深き夫が危険に瀕せる妻の貞操を技巧的に安全ならしめんとして取つた、負けず劣らず野蠻な形式と、符節を台せるが如くである。」

這の形式こそはルネッサンス時代の夫が配偶者の生理的貞操の保證に用ゐた機械的(メカニカル)な手段そのものである。
當時の總人生哲學に準じて世人は道德的教訓を可なり重要視し、其故に又貞操の讚美を絶えず口にして居たのであるが、同時に氣の廻る亭主連は「結構は結構だが、より好い事なら尙結構だ」と考へた。而かも、其よりよき事は、惡魔——即ち猥褻魔を弾き飛ばして一等の樂しみを代無しにするに限るといふ事である。用心深い亭主連中の考へでは、純粹極まる格言や、高調し切つた貞操の讚歌などよりは、「地上愛の天國の門を封鎖する」純然たる機械的手段の方がいくら結構だか知れなかつた。若しも婦人が愛人に對し其願望を遂げしめる事が不可能であると知つたならば、一步進んで必要止むを得ずして婦徳を發揚し、つんとして求愛の囁きを謝絶し、心易く、悪い考へに打克つ事が出来るであらう。

即ち這般の哲學からして、引いては彼の、貞操帯又はヅキナス帯の稱で知られた鐵製貞操監視者の發明となつた。で、此貞操保護器は、孰れの場合にも複雑な錠前を附して、夫か、花婿か、愛人のみが、單り其鍵を握るといふ仕掛けであつた。が、當時女連の不貞を避けるため、貞操帯が唯一の技巧的保護手段でなかつた事は疑ふ餘地無く、下層人民階級に於ては、彼のバルカン諸邦の風俗に通曉した、エフ・エス・クラウス博士が其著「アントロポフィテア」に記してゐる如く、同地方に今日なほ見受けられるものと似たやうな方法が慣用せられたものらしい。

其方法とは局所縫合（「銷陰」及び「女陰閉鎖」参照）又は、除去し得ない物體を婦人に用ゐたのである。但し吾人はルネッサンス時代の斯の如き方法に關しては、より、突つ込んだ報告を有せず、只亭主權の嫉妬が尠くとも現今同様野蠻であり、新工夫を産んだといふ内的論理から推斷するばかり

である。

ヅキナス帯の使用及其汎布といふ事に關しては吾人は絶對確實な報道を有してゐる。各國共幾世紀の長きに亘つて是を用ゐた事は明かであるが、最近に至る迄、這の貞操保證の技巧的保護器使用は往々疑問とせられ往昔に心酔する空想家（フケル）は斯かる蠻風を斷じて認めやうとはせず、尠くとも其使用の日附を中世紀即ち十字軍の時代迄推し退けやうとした。といふのは、恰かも其時代は、騎士連が其不在中、妻女の貞操を確保するのみならず凌辱を防禦するため、就中防衛手段として必要であつたといふ至極穩かな理由を、ほしくり出すことが出来るからであつた。此最後の點の論理に合はないこと、其無條件にルネッサンス時代の發明であるといふ事實とに就いては、他の關係上既に吾人は拙著「軟派美術史」自一六一頁至一八五頁中に指摘して置いたから、此處には其際論述した所説を指示して置くにとどめる。

次に此貞操保護器は有るにはあつたとしても實際上使用されたかといふ本然的疑儀及這は畢竟後代に及んで案出した好色の戲弄神祕化であるとの主張は、博物館所藏の諸種の蒐集品を檢査して見ると、精妙如何の差こそあれ、夥多の模造品を含んでゐる事を證せられるといふ點で、看過すべからざる論據を見出した。が、眞品も偽品も同様多々あるのみならず、近時、同時代の文書的證左が夥しく明るみに出て來た。中にも最も重要なものとして最近の發見にかゝる一品の如きは、其發見の話だけで、凡ての疑問を一掃して其眞なるを結論せしむると同時に明かな使用を目撃せしめるものである。

例へば、パツヒンガー・リントツ博士の蒐集した帯の如きは是である。所有者リントツは偶然發掘に參與した埃太利の墓地で第十六世紀時代の若い女の骸骨から發見したのであつた。で、當該女性の姓名及位階を最早確かめる事が出来なかつたが、其

名門の貴女であることは骸骨が鉛の棺に收つてゐた事でも察せられた。其他眞品は疑もなくミュンヘンの國民博物館（Museum für Naturgeschichte）、同ヴェネディツヒ、在マドリッド帝室蒐集品、倫敦のドウソー博物館、ポアチエ博物館等々に是を見るべく、尙囁目すべきは是等の品悉くがルネッサンスに端を發してゐること、——といふのは只の一標本と雖も、十五世紀初頭迄溯るものが無いのである。——さて這の器物に對し風俗史的判斷を下すに當つて出て來る問題は、果して如何なる階級で是を用いたかといふこと及び該階級以内に於ける其使用範圍である。第一の問題に對する解答としては、貞操帯を、妻女に對して用ゐたのは、支配階級及有産階級であつたといふ事、即ち商業に携はる大市民及專政諸侯政治に關與した圈内であつたと言はう。又第二の問題、即ち其使用の頻繁度に關して言へば、該階級内、殊に專政諸侯治圈及經濟的社會的に之と接せる圈内では可なり一般に行はつて

使用せられ、最早單獨現象と見るべきものでなかつた事は全然疑を容れない所であるが、斯くいへばとて、是等階級婦人の全部は愚か大多數者が斯く「錠をおろされ、確保された」と取る必要は勿論更に無いのである。

で、如上の斷案を下す吾人が、貞操帯の汎布範圍をば其材料の高價なること又は美術的な製作——其多數は銀製又は金製のものさへあり、美的に彫刻、構成せられたものが非常に多い——に依つて確證的に認めるならば、其使用の頻繁度は洵に尠からざる文學的指示に依つて是を爲すことが出来るのであつて、その甚だ普遍的であつたといふ證左となるものは、此他尙ほ該器を取り入れ、吾人に其用法を説明する各種の畫面である。

畫面にあらはれたものは多く獨逸を是が出所としてゐるが、其文學的報道は各國に是あり、小話に説話に、詩に、語に、諺に、謎に、笑話に、懺悔節劇に、なほ又史誌(Chronik)に、時人の描寫に、到る

處に散見してゐる。

斯く文學的報道が比較的豊富なるが故に吾人は、例へば、或國土なり都市なりに興り或は這入つて來た有様、外觀、構造、使用様式、婦人の是に對する態度等に諸種の情況に關し比較的精細に見當をつける事が出来る。最も繁々出て來る所に據れば暴君フランチェスコ二世、フォン・パウダを最初の發明者となし、又他の諜報に従へば是等の帶は、多くはベルガモに於て造られた故を以て又世人是を呼んで只に「ヴェニス格子」(Venetianische Gitter)と稱するのみならず、「ベルガモ錠」(Bergamasque)と名づけ、妻や、愛人(女)を「ベルガモ風」に紐掛ける』(Boucler à la Bergamasque)と言ひ慣した。が、最も真相に近いのは此發明がいろんな地方で同時に成されたと見る事である。貞操帯が一種公然の施設であつたといふことは、是を指示する様式で認定することが出来る。例へば美しい娘に結婚を申込む愛人に對して、母

親が他意無く且誇らしげに、自宅の娘は早やもう十二の年から晝夜「ヴェニス格子」を掛けてますよと話をし、貞淑な娘を妻にしやうと思つてゐる他の男はまた、娘の腰にさはつて見て、着物の下に鐵帯が巻いてあるのを觸り當てるとそれで満足する。若い夫は花嫁に導かれて寢室に入らうとする瞬間——華燭の典は普通、嫁の兩親の家で行はれた——母親が幾年となく細心に守つて來た細工美しい錠前の鍵を其婿がねに手渡しする。斯くして、以後彼は其唯一の所有者となるのである。又他の若い夫は第一に貞操帯の錠前に注意を向け、數分の後彼は小躍りしながら戸口の前に待つてゐる兩親や友に「城門」の異常が無い事を報告する。又或所では「一個の綺麗なヴェキナス帯」こそは婚禮の濟んだ翌朝、若い夫が新妻に與へる第一の贈物であつた。無邪氣な彼女は未だ曾つて其やうな裝飾品を見た事もなく、恚うして好いんだか解らない。そこで夫は物珍らしげな妻に、其獨特な飾

りを何處に掛けるのか又其目的が何であるかを説明し、自分で其帯を締めてやる、「さあ是で仇し色戀を拂ひ退けた。」そこで彼女は以後夫の側に休まない限り常に「此名譽ある婦人の徳の最良の保護者」を掛け続ける。名門貴族が遠國に旅しやうと身仕度しては「色好みな其妻に、彼女の貞節の最も安全な庇護者たる一人の友」を頼んで來る。其信頼すべき友といふのは、夫が遠地に滞在しても「以て女の不行跡の絆(絆)を握る、鐵の垣根」である。云々

是等凡ての點に關して吾人は或は詳しく或は簡なる時人の文學、美術から四圍の狀況を見定めることが出来るのである。ヴェキナス帯の外觀及構造は、ムルシウス(Meursius)を見ると、花嫁と若い女のお喋りの中から是を聴く事が出来る。

——オクタギア「此間あなたと私の阿母さんと、貞操帯のことを話してゐるのを妾聞いたわよ。だけど妾よく解らないわ。女に貞操を保たせるとか

いふ其帯つて一體何なのさ。」

ユリア「言つて聞かせやうね。……小さな黄金(きん)の格子になつたものが鐵製の鎖四本で釣つてあるの。鎖は絹天鷲絨で包んで、綺麗な細工で矢つ張り鐵製の帯に固く取り付けてあるのよ。四本の鎖の二本は格子の前に、二本は後に、兩方から嚙りとそれを持たせ、後の所で帯に錠をおろし、それを開けるには小さな鍵を使ふんだわ。格子は、さうね、高さが六寸(ろっす)ばかり、巾が三寸(さんす)ばかりで、其格子は三列の網目になつてゐるのよ。」

即ち此記述を見れば、吾人の引用した挿繪(「貞操帯」條参照)と違つた構造もある事が解る。

獨逸に於てヴキナス帯が頻繁に用ゐられた事は、オーデンワルドなるエルバツハ城に保存されてゐる貞操帯に彫り付けた左の銘文からも推斷される。

「錠ろされし身を嘆く、妾は女汝に氣の毒」

此銘文は同じく帯に附した畫面の説明になつてゐ

て、佛國に於けるヴキナス帯汎布に關してはブラントームの左の一節が是を示してゐる。

「ヘンリー王の時代に、一人の小間物屋がサンジエルメーンの市場に、婦人の局部を塞ぐ道具を一ダース持つて來た。それは鐵製の帯で、下から穿いて鍵を掛けるのである。旨い細工で、是を締めた女は容易にそれを取る事が出来ない仕掛けになつてゐた。

伊太利に對してはモルリニーが同様の事を吾人に傳へてゐる。

「此時代以來今日に至る迄ミランの貴族は其妻女に金銀で美術的に細工した帯を締めさせる。斯うしてのみ彼女等は自由に、監視を受けず、心の儘生活する事を許された。」

コルナツアノの小説中にも、長い旅をする商人が此方法で妻の貞操を確實にする事を描寫した一つの物語りがあつた。

「或美人を自分のものと呼んでゐる一人の外國商

人があつた。さて彼は海外の旅に上らなければならぬ事となつたが、彼女は多數の男達から愛され渴望されてゐたので、妻の貞操に安心がならず、假令彼女がそれを欲しても罪に陥り得ないやう何とかして置かうと考へた。そこで彼は、ゼミラミスが息子の嫉妬を靜めるために發明したやうな、シリア風の帯を造らしめた。彼は是を彼女に締めさせ、錠は自分で持つて、さて先づ是で落つて東洋の旅行に出ることが出来るかと考へた。」

ラベレーも亦其著「ガルガンチュア・エド・パンタグルエル」の中で、婦女の不貞に對する豫防策として概ね外出する時は是を掛けるとヴキナス帯のことを説いてゐる。

如上は、諸國諸階級に於ける此貞操監視器の使用に關する文献の數例である。が、該文献の教へる所は全部斯う言つたものばかりではなく、尙第二の一層重要なものがあつて、——即ちそれは、此處にも入り來るおそろしい歴史の皮肉である。鐵

の貞操帯を發明した時代は、間もなくして合鍵に思ひ及んだ、否、もう一步進んで吾人の聞知する所によると、夫に對し高いお金で貞操帯を賣つた同一商人が、同時に又、矢つ張り同じく高い値段で夫人に合鍵を賣り付けた。「道德の毒消し」である。金言は、宿命的な歴史の道德を數語に縮めて道破してゐる。

「自ら防がうとしない女に帯を締めたつて、なんにもならぬ」

と。

「結ぶの神に錠おろされた夫人」が、自ら既に合鍵を所持して居ないにしても、若しも努力のある者が、それさへ無くば靡き従ふ美人に斯うした忌々しい障碍物のあるのに逢着した場合、上手な錠前屋を見つけ出し、短時間に其複雑な錠を明けて、合鍵を造らしめ、以後何等夫の嫌疑を受けず心の儘に邪魔な戸口を開いては後を閉め置く事の出來るやうにするのは大して困難な仕事ではない。

クレメント・マローが其諷詩集に附した序文の中に斯の如き場合が詳細に書き記されてゐる。誘惑者、即ち第二のダギッド王は佛國のフランス一世であり、王臣ウリアスはドルソンギルリア男爵である。さうして第二のバツセバたる、美しいドルソンギルリア男爵夫人はバツセバと尠しも違はず、誘惑者なる王の意の儘、熟練な錠前屋の手に辛棒強く身を任せた。

類似の場合が小説の形式で色々に取扱はれ、其目的とする所は常に情夫の愛であつた。「力」が情事を遂げんとすれば「愛神(ラブ)」は常に其盟友であるからである。同じ考察が繪畫にも色々に描かれてゐる。「とざされし愛に妾は憫む。アモリア来りて彼の人のために戸をば開け」言下にアモリアは貴女の願ひを充すべく鍵束を持つて急いで来る。世人がペーター・フレイトナーの作とするのも、恐らくは當つてゐる立派な着色木版畫「似ない同志」(愛人同志)も亦同一のモチーフを取扱つてゐる。

る。若い方の男は傲然と宣言する。「其腰(こし)錠前の鍵なら俺が持つてゐる」女は喜んで、嫉妬深い老亭主のポケットから掴めるだけ掴み出したと思はれるお金で其鍵を買ふ。で、其華麗な畫面は兎も角も二様に説明することが出来、該婦人は亭主が潤澤に與へたお金で熟練な鍛冶工の技術を買つたのかも知れないと見るのが一つの解釋であるけれども、一層當つてゐると思はれるのは、寧ろ第二の、該婦人が其愛する男に對し彼女の惠澤と併せて、夫が彼女のために惜しげも無く撒いたお金を酬むると見る解釋である。此場合には彼女の買ひ取る鍵は、恐らく二重の意味があるであらう。兎も角も前述の如く大抵の女は早くも既に合鍵の所有者となつてゐて、愛人が出来ると、一番氣に入りの人にそれを渡す。斯うした情景は、今述べた場合よりも遙かに再々繪に筆に描寫されてゐる。試みに一例を引けば、メルヒヨール・シエーデルの定紋楯には、同じく貞操帯を着けた婦人が片手に

鍵を、片手に充ち膨れた財布をひけらかしてゐる圖が表はされ、此處にも女の愛人に向つては、渴望される其の愛行に對し、かてゝ加へてちやらちやらする報酬が差招いでゐるのである。

だが吾人が前に言及した皮肉(irony)といふのは、ただ是だけの事ではない。ヅキナス帯を拵へ上げた「時代」が、同時に合鍵をも發明し、従つて不貞に對する防禦が見せかけの手に過ぎないといふことは寧ろまだ、小さい宿命で、もつと本筋の皮肉を成すのは、當の貞操帯が嫉妬深い夫を安心させ、其の警戒を眠らせるため同時に反つて女房の不貞の最も都合よき機會捻出者と化し去るの一事である。亭主は最早、友や客人が猥りがましく己が女房に戯れかゝつても敢て恐れず、用があれば隨意に屢々、初終中と言つても好い程、以前よりも長く留守にする。そこで不貞な彼女に取つては以前偶々一度出来たことが百も出来るといふことになる。多くの場合婦人が有りつただけの機會を利

用するのは物の自然といふものである。俚諺は言ふ「錠付處女帯は女の不貞を増すばかり」と。是こそは貞操帯の使用に關して見出す、大抵の報道や描寫に含まれてゐるお笑ひである。「婦人時代鏡」(Le Miroir des dames de notre temps)といふ短い文書の中に左のやうな一節がある。

「全市を擧げて貞淑誠實の模範と讚嘆する婦人にして常に一人又は數人の戀人を有し、而かも年に幾度かそれを換ふる者數多知れり。内數名は種々なる愛人の種を宿せり。己が夫の種よりも、友人、愛者、甚しきは異邦人の子を産むを欣ぶ婦人の多かる事、人のよく知る所なり。是等婦人の名譽は夫の目にあまるやうの事唯の一度も無かりしが、是そも、彼女等、婦人の不貞を安泰に防ぎ守るてふヴェニス錠を帯びたるが故を以てなり。」

貞操帯の使用から来る最大にして且つ初終中あつた皮肉といふのは是である。是實に人妻を娼婦に

養成するものであつた。是より奇怪(グロテスク)な皮肉が復とあらうか。

さらばルネッサンス時代の支配階級社會に於ける貞操帯の發明及外觀可なり頻繁に使用された次第を風俗史として述べるに當り、如何の斷案を下すべきか。——最後に吾人は自問して見ねばならぬ。解答は斯うである。羞耻といふ自然の障礙が、餘りに無力な事屢々であつたため、婦人の不貞に對する技術的阻止構造として機械的貞操保護手段を取入れたといふことは、吾人が今迄ルネッサンス時代の性的相貌の特色を示さうと論述し來つた凡ての見方を典型的に確かめるものであり、殊に本章の最も重大な留め石として缺くべからざるものである。貞操帯の使用といふことは、該時代の愛に對する解釋が純然たる官能的なものであつたといふ吾人の主張を完全に確かめ、手に握られる、實質的な粗野さ加減がガラントリー及愛の享樂を支配した事を典型的に裏書すると共に同様時代が

相互求愛の手續きを出來得る限り短縮することを愛好した證據であり、且又、該時代の物凄い好色の展開といふ最も重大な事實を尠からず截然と首肯せしめるものである。云々」

我邦に於ける最も古い型の貞操帯とも稱すべきものは、元祿七年板の浮世草子『諸遊墨栗鹿子』に、一人の傾城が瓢箪を用ゐたことが書いてある、それなので、其の叙述に依つて思ひ合せると、彼のクラウス博士の報告した未開人種間に於て行はれつゝあると云ふ或る手段に一致するので、微笑を禁じ得ない。

尙ほ江戸時代の川柳中に、「二三錠を用ゆる事が詠まれて居るが、それは單に一つの諧謔に過ぎず、果してさう云つた器具が存在したといふ證左とはならない。」支那にもかゝる風習が古代あつたことが記録に残つて居る。そして、此風習を「陰鎖」と稱したとある。(「貞操帯」参照)

フエヌスベルグ (Venusberg) 陰阜。陰山。紅白山。

フエヌスベルグは Venus (羅馬の戀の女神 ヴキナス) berg (獨逸語の山) の義であつて、紅白山は上記フエヌス山の當字である。獨逸の傳説詩「リンパルグの小供等」に依れば、フエヌスベルグは ヴキナス女神の宮殿のある快樂と愛の山であるとしてある、現世の人間が屢々そこを訪れることを許されたけれども、一度この山麓の洞窟に入りたるものは此の世の一切のことを忘れ、再び出ずることを知らざるに至り、永滅を受くるの處れがあるので容易に行くことを得ず、門番エツカールト・ザ・フエニスフルが之を警戒すると言ひ傳へられてゐる。陰阜を獨逸語でフエヌスベルグといふのは右傳説に基いたものであつて、一度び洞窟に入りたる者が出ることを忘るといふは性交を象徴したものであることは、彼の詩聖ワグネルの『ダンホイゼル物語』殊にビエール・ルキの『ヴェヌスベルグ登山記』を讀むだ者の直に頷き得るところであら

う。

羅典語ではこれを Mons Veneris (ツキナスの山) と稱へ、佛蘭西語で Mont de Venus (同義) と云ひ、英語では通例羅典語のモンズ、ヴェネリスを用ひてゐる。邦語では「べにうすさん」、「ほがみ」(陰上)などの語が用ひられる。

フエヌス、ウラニア (Venus Urania) 神聖戀愛。希臘神話に男女の清淨なる愛慕及び學術に對する愛好の女神とされてゐる。フエヌス、ウラニアを神聖戀愛の術語とするは右傳説に基いたのである。

フエステイブラム (Vestibulum) 前庭。左右小陰唇 (Nymphae) の間にありて、腔 (Vagina) の上部に位する。

フィラギニテート (Virginität) 男性的女子。羅典語の Virago 男女(若くは)から出た術語。

ヴォワイヨー (Voyeur) 窺視者。これは展覽狂(「露出症」参照)とは反對に、他人の陰部を窺に覗き見んとする癖を有するものであ



いなぶあとつお



りよ「醒醉之世浮傳京」

る。但し展覽狂の如くに、自ら公然と行ふことは少く、隠れて行ふことが多いから、一般に注意されることは比較的稀である。然し此種の傾向は間々兒童の頃から現はれ、我邦に於て「お髯捲り」の悪戯の行はれるのは其一面を示すものである。衣服の裾を高く捲り上げた役者、又は股までも出して踊る舞妓等を以て、観者の心を惹いた場合は極めて多い。伊太利、佛蘭西などには、何等特殊な舞踏を目的とするのでなく、唯半裸體にして股も露はに踊る女を出して、常に観者の満員になつてゐる寄席がある。此等は如何に一般人が竊視狂の傾向を有するかを示す一例と観ることが出来る。

川柳に「鍵穴へ吸はれるやうにボーイ覗き」といふのがある。竊視狂が、犯罪と關係して先づ注意すべきは、言ふまでもなく風俗に關する罪竝に猥褻罪である。其他人を侮辱するが如き行爲に至ることも自然である。

モール氏はかゝる行爲を爲す病的性格者を指してミクソスコビーと云ひ、ヒルシュフェルド氏はフイジオニステン (Visionisten) と稱した。傳ふる所に依れば露國のメツサリナ女王は典型的なる女竊視症心理を利用した「猫のお湯や」おもちゃ繪



牲竊視者であつたと云はれて居る。何故にかゝる行爲が行はれるかといふに、つまり此心理は「見るなといへば尙見たくなるのは人情の常である」と云ふ言葉が充分に説明する。世界各民族間の傳

承には夥しく此事實が物語られて居る。それはメルシナ型と稱せられる民譚である。

世界一大奇書と稱せられるバートンの「亞刺比亞夜譚」には竊視的行爲の説話が可成多數に採録されて居る。現在の世の中では寢室の鍵穴を覗き、海水浴場などで、望遠鏡を以て水浴して居る婦人を遠方から眺めて楽しんでゐるが如きは、往々行はれる事である。此等は何れも外國の學者の擧げてゐる實例であるが、之に類するものは我邦に於ても稀ではなく、大和の國の桑の仙人が吉野川に洗濯する女の脛の白きを見て通力を失ひ雲から落ちた話などは最も人口に膾炙された話であつて、尙又、女湯覗きが世人から注意されたことがあるが、これは明かに竊視に依る満足を得んとするものに外ならぬ。

彼の我國浮世繪に於ける「雨中美人圖」の如きは、それを公然と見せずして、観客の心に種々の想像を逞うせしめんとしてゐる點は、確かに竊視症的

心理に投合しようとしたものと見ることが出来る。(「窃視症」参照)

フルファ・フォサ・マグナ (Vulva Fossa Magna) 膣口。俗に陰門と稱す。

幼年の時には、處女膜と云ふ薄き粘膜で殆んど閉鎖してゐるが、成長の後は破裂して、唯だ其の痕跡を止めるだけである。處女膜の破裂する原因には種々あるが、妙齡の處女にありては、多く結婚の當夜、其破綻を發するものであつて、自潰、月經、入浴、陰門搔痒症にも基因することも少なくない。

W

ワンダートリップ (Wandertrieb) 浮浪性。

一家を經營する觀念乏しく、常には浮浪して、一家を爲さざる者を謂ふ。従つて教育を受くる機會

Y

少くなく、道德及び宗教の信念薄弱にして、動もすれば不正、不義に陥りて、人道を破壊するに至ることが多し。

ワイヒ・シヤンケル (Weiche Schanker) 軟性下疳。花柳病 (Sexual Krankheiten) の一種であつて、病原は「デクレーン」氏の連鎖桿菌にして、局部に皮膚の缺損を來し疼痛横痃を發する。症形は不正一様ならず、少しく腫れ上り缺損面は深く凹み底面豚脂櫻色を呈し主に陰部を浸すけれ共此の毒菌を皮膚に接觸すれば同一の症兆を呈するに至るものである。潜伏期は大凡兩三日である。(「淋病」「微毒」参照)

ヨハンニン (Yohimbine) 茜草科ユムベホアの樹皮

より得るアルカロイドで、亞米利加土人はこの植物の樹の皮から、色慾を發作せしむる一種の混合劑を醸造すると云ふ。遺精、夢精等の、生殖器障害に用ひて効がある。(「鹽藥」参照)

Z

ツアウベライ (Zauberer) 魔術。妖術。

魔術は不思議な神秘的な方法を以て吉事を招き凶事を防衛するために、人間若くは精靈によりて行はれる總ての作用をいふのである。一に之れを「まじなす」(Zaubermittel)とも云ひ、ヴントの概念に従へば、魔術は神話的表象であつて、未だ宗教の發生しない以前の人間の信仰生活を支配する現象である。

凡そ魔術にも數あるが、中にも男女の關係、即ち

ツアウ

戀に關した魔術は、東西ともその例は夥しいもので、而もその間に、随分似通つた所があるから妙である。戀の呪文や惚れ藥の效果に對する信仰は、凡ゆる國民間に廣く行はれ、白人種間に於てさへ



英齋景版年三永嘉 りよ「集法妙象万」編壽

も今日猶全然その跡を絶つてゐない。斯うした觀念が如何に勢力をもつてゐるかは、現に原始的種族が魔法を強く信じ、魔法使ひは甲の人の病氣を呪文を用ひて乙の人に移すことが出来るばかりでなく、これと同じ方法で善惡何れの性質をも他人

に感染せしめる事が出来ると信じてゐる事によつても解る。

斯うした魔ムを行ふについては、魔法をかけられる人のもつてゐる所持品をとつて来て、それに魔術をかける事が必要だと考へられてゐる。戀愛魔術に於ても、相手から愛を得ようと願ふ人は戀の呪として相手の人の所持品を取つて来るか、或は自分の所持品を相手に與へるかなければならぬと考へられてゐる。而して、就中直接その身に着けてゐる所持品が最も効果があるとされるは自然の勢である。斯くして、男子は自分の戀を成就させる爲めに、相手の娘に自分の髪一束を贈るといふが如き慣習が行はれてゐる。これは、その髪一束に自分の人格の一部が含まれ、従つて、それを相手の娘が所持することにより、自分がその娘に對してもつてゐる感情と同じ感情を相手の娘が自分に對し感ずる様になるといふ信仰から來てゐる。相手の愛人の肉體に直接に觸れその汗や膏の

にじみ込んだ所持品は、尙一層さうした効果を擧げ得ると信じられてゐる。(「截髻漢」参照)

戀の呪(呪)としての今一つの方法は、衣服乃至衣服に附着する物品にまじなひをかけ、それを戀人に着させるといふ方法である。相手がそれを受取るや否や、そのまじなひの爲めに相手の心の内の情熱は振り撼かされ、贈つた人に一道の光明が現はれると言ひ傳へられてゐる。(「節片性衣服淫亂症」参照)

古代印度に於ては、娘は愛人の土人形を作り、箭を以て靈の宿つてゐると思はしい邊りを射通し、それが誤りなく美事に的中した時には、相手の人の魂をも射抜く事が出来るものと考へられてゐた。中世紀の獨逸の或る一地方にあつては、蠟その他の材料を用ゐて、愛人の姿乃至ハート形の像をつくり上げ、その上に愛人の名を認ため、これを溶かす燃やすかする慣習があつた。

四つ葉のクローバーを靴の中に入れて置けば、幸

運な戀の來る呪となるといふ考は、現に歐羅巴各國民間に信じられてゐる所である。

種々の空想的想働から以て醸造された凡ゆる種類の惚れ藥、例へば愛人の頭髮の幾條かを入れて焼いた食品とか、其他これに類する嘔吐を催す様な製法によつてつくられた藥は、これまで廣く一般に用ひられて來た所であるが、僻陬な田舎地方に行けば今日も尙現に行はれてゐるのを見る。これ等の藥を自分の思慕する愛人に與へる時は、これを受け取つた相手の人は、知らず識らず彼に愛を感ずる様になると言ふのである。これに關する有名な一例には、ブランドジャンが盛つた惚れ藥を飲んで、熱烈な戀に陶醉したトリスタンとイゾルデの物語がある。(「豔藥」参照)

北米インヂアンのあるものゝ若い男女は、愛を得ようとする相手の像を作り、其心臓を針にて刺し、その針跡に魔法の粉をふりかける。そして其名を呼びながら切ない思を訴へる時は愛戀が叶ふと信

ぜられる。これは彼の藁人形に釘を打つたり、畫像を油で煮た、日本の話と一向差異の無い迷信である。ニウ・カレドニアの土人は夫婦の調和を保つために婦人の帯と男子の前垂の布地をとり、之にて像を作りて所持する、日本のイモリの黒燒も此魔術の一例である。

古代にあつては、また戀の託宣乃至戀の占が非常に流行してゐたが、今日の文明人間に於てさへも、尙その餘喘を保つてゐるのを見ることが出来る。往昔の戀の占の遺風と見られる占中、今日尙われ／＼の間に残つてゐる廣く知られてゐる占は、戀が成功するか否かを確めようとする時「The loves me, he loves me not.」(彼は私を愛する、彼は私を愛しない。)と繰返しながら、一語を口吟む毎に雛菊の花片を一片づゝ搦り取り、最後の花片が「愛する」といふ言葉を口吟むのと一致した時には、その戀が、愜ふものであり、若し「愛しない」といふ言葉と一致した時には、その戀を失敗する

とされる戀の占的遊戯がそれである。ゲートは、『ファウスト』の中で、ファウストと戀に陥つたマーガレットが此の占をなす場景を描寫してゐる。上述の様な方法のみならず、尙その他には萬聖祭の逮夜—All Hallow'en 即ち十一月一日天上諸聖徒の靈を祀る、その前夜——に未來の配偶者を見出す奇異な方法が行はれてゐる。それには、深夜鏡の中を見覗めてゐると、戀人の面影が現はれるとか、其他非常に細かい規則がある。これは特に獨逸で盛んに行はれてゐる所であつて、未婚の少女が、別に意中の人が無くとも、未來の夫と定まる、男の人物を知る術である。それはアンドレア祭の夜、即ち十一月二十九日の夜から、三十日の朝へかけて行るのである。一體アンドレアと云ふ言葉は、希臘語で、「夫」と云ふ意味があるのである。それ故この晩神に祈念したなら、必ず未來のアンドレア、即ち夫を知る事が出來ると、かう信ずるものであらう。

所でこの祈念は、神に直接に捧げるものではなく、使徒の中でも、パウロかペテロの二人に頼むのでその文句は

「妾を長く獨身の淋しい境界に置かない様に、一日もはやく良い聲を投げ給へ！」
といふのである。それからまた願掛の歌がある。それを聞けばかうである。

「アンドレア様！ アンドレア様！

あなたにお願い申します。

寢床を叩いてお願い申す。

何卒私の戀人に、

お會はせなすつて下だしやんせ！

夢に會はせて下だしやんせ！

さまが緑の枝持つならば、

さまが緑の枝持つならば、

二人の縁は結ばれて、

一生氣樂に暮らしましょう。

さまが茨の枝持つならば、

さまが茨の枝持つならば、

二人一所に暮らしても、

生涯苦勞は絶えやせぬ。」

此歌を口の中で三度唱へて、寢床の隅を三度叩いて、それから枕に就くのであるが、その寢床を叩くのは、アンドレアの神に、戀人の靈魂を呼び出してくれと、つまり催促するのである。

大晦日の晩の丑満頃に、八疊の間の四隅に鏡をおき、それをちつと見つめて居ると、未來の夫の姿が寫るとか云ふのは、日本でも聞く話である。

恐らく、今日最も廣く知られてゐる一例は、結婚菓子を枕の下にして床に就き、その時夢に現はれた男がその女に授けられる未來の夫としての運命をもつた男子であると信じられてゐる迷信であらう。これと同じ型に屬する迷信で、腕の上に林檎の長い皮を投げかけ、それによつて現はれる形をアルファベットの文字になぞらへて判断し、現はれた文字が未來の配偶者の名の頭文字であるとす

る占がある。こゝに興味あることは、この占の方法が矢張り少し形を變へて子供の遊戯に現はれてゐる事である。それは“Raspberry, gooseberry, apple jam tart” (熊さち、野すぐり、林檎ジャム付のタートの意) と繰返しながら、繩飛びをし、飛び損ねた時、丁度唱へたアルファベットが愛人の名の頭文字だとせらるゝ遊戯である。尤も古代にも、文字投の占方と云ふものがあつた。これは文字の書いてある木の札を投げて、吉凶を判じたものだと言ふが、今はあまり聞かない様である。

その代りに或る地方では、靴や手袋を投げて、辻占を見る方法が行はれて居る。それはまづ目を閉ちて、靴若くは手袋の片方を、後向きに戸へ投げ、その落ちた位置で、棲先が戸に向つて居ると、待人が來るとか、また近い中に一所に成れると云つて、鼠鳴をして喜ぶ事、丁度我邦の壘算の如くである。

また日本の影膳と云ふ物の様に、戀しいと思ふ男の靈魂を招いで、之に食物を供へる事があるが、それはパンと水、酒と肴の二種あつて、その招かれた靈魂が、パンと水を受けた時、兩人一生難儀が絶えず、また酒肴を取つたならば、生涯樂しく暮らせるものと、かう吉凶を判断するのである。戀人を得る幸運を託宣によつて決定する事は、聖ヴァレンタイン節——即ち二月十四日に行はれる祭。西曆三〇六年二月十四日ローマの僧聖ヴァレンタインが、誅首られたに因む、鳥はこの日よりつがひ始めると想像せられ、情書、又は戀の諷刺文、繪畫等を情人に贈る慣習がある——に配偶者を選ぶ占の慣習に見られる。古代にあつては、娘はこの日の朝黎明に一番はじめに出逢ふ男子からその一ヶ年を配偶者として擇ばれる様になると信じてゐた。われ／＼は斯うした慣習の行はれてゐた往昔に於ては、その託宣が或る程度まで事實と符合してゐたのを想像し得る。何となれば、心か

らその女を愛してゐる男子が、その機を逸せず黎明にかけつけて最も都合のいゝ場所に立つて、その好運を攫まうとしたであらう事は想像するに難くないからである。以上は戀に關する呪咀の概略



りよ刷枚一「虚と實」

である。(「迷信」参照)
ツアウバークラウベ (Zauber Glaube) 魔法的信仰。
「魔術」参照)
ツアウバーミツテル (Zauber mittel) 呪咀。

神佛の通力其他或る一種の神秘力に因つて、災厄を免れ若くは災厄を降さんとする厭勝をいふ。
(「魔法的信仰」参照)

ズヒリア・エロテイカ (Zoophilia erotica) 色情的動物嗜好。

クラフト・エビング氏の説に動物に對して、性的享樂をなす色情倒錯症 (Paradoxia Sexualis) であつて、甚だしきは、往々其愛獸と性的關係をなすものもある。(「獸姦」「動物犯姦」参照)

ズーザデイスムス (Zoosadismus) 動物虐待享樂症。動物を虐待し、其苦しむを見て快感を覺ゆる性的倒錯症である。ザデイスムスの倒錯者にして、人間に對して犯罪行為をなすことを恐れてゐる者は鞭打 (Flagellation) たれや小兒や死にかけてゐる動物の苦惱する有様を見ることにより、或は自分で手を下して動物を虐待することによつて、肉情の興奮を得てゐる者もある。
斯る性格所有者の性慾生活は全く倒錯し、流血や

死を見なければ肉情の興奮を得ることが出来ないやうになつてゐる。(「殘虐色情」参照)

ツオファブシユナイター (Zopfabschneider) 截鬚漢。
女性の毛髮に對する能動的淫虐と性的狂崇にて、女子の毛髮を切り取り性的享樂を感じる色情倒錯者である。

元來婦女の毛髮の蟲惑的なことは生理的領域にあつても認めらるゝ所であるが、それより病的領域に至る移行は多數に存在する。病的の群に列せらるべきものにて、其初序を占むべきものは、婦女の毛髮が肉感的印象をなし、且、交接に誘導する興奮を招致するものであつて、其例は乏しくなく。
それから更に進むと、患者は自分の氣に入つた毛髮を有つてゐる婦人、即ちフェティツシ(「性的蟲惑」)を備へてゐる婦人に對してのみ慾情が興奮する。一體この婦人の毛髮に對する狂崇 (Zopffeti-

schismus)に於ては種々なる感覺、即ち視覺、嗅覺、聽覺、觸覺等が働いて、肉情的衝動を誘致するものである。なほ、病的なもの、最後の階段に至ると、もはや立派な變質者であつて、毛髪といふものを婦人の身體から全く分離して考へる。即ち其場合は身體の一部でなくして一の物品として獨立にそこへ興味を集中し、それによつて興奮し、或は操作しつゝ、自瀆を爲し、或はその性的蟲惑物を耻部に接觸して満足を得るのである。

又、婦人の毛髪といふ性的蟲惑物を自分の持物として占有しようとする場合がある。さういふ患者は随分不法な行爲によつて婦人の毛髪を手に入れようとするもので、これが即ち前記に述べた法醫學上重大な「鬚切り」(Pigreur)と云ふ一群を形造つてゐる。

次にその代表的な例を掲げよう。

〔例〕D 四十歳の男、鍵工、獨身者。遺傳あり、彼は巴里のトロカデロに於て、暴力を以て處女

の鬚を切斷したゝめに捕縛された。その際は彼は自白して、既に十回も鬚を切り、而もその切る際に甚しく快感を感じたと云つてゐる。家宅搜索の結果、六十五個の鬚を發見した。

彼の云ふ所によれば、三年以來、夜獨り室内に居



繪師の説小たとしと材題を鬚截

るときは、不快、苦痛、興奮、眩暈を感じ、而して婦人の髪に觸れんとする欲求が抑へ難く起る。さうして外に出で、若き處女の鬚を切らんとするとき甚だしく興奮し、これに缺を觸るゝや勃起し、切斷の瞬間に射精した。それからこの鬚を携へ歸

り、或る時はこれを以て激しく全身及び耻部を摩擦する。かくて甚だしく疲労を感じると同時に己れの行爲を羞ぢて數日間籠居することもある。然しその後數箇月を経過すれば又復た婦人の毛髪を得んとする慾求が起つて來る。

商店のショウウキンド等に飾つてある鬚は彼に取つて何の刺戟ともならぬ。彼の興奮するのは自分で婦人から切取つた鬚に限られてゐる。なほ、彼の家には鬚ばかりでなく、婦人の頭髪用のピンやリボンや、その他の多くの化粧品類が發見された。法醫學者の鑑定によれば、彼の行爲は肉情を附帶した強迫觀念に基く強迫行爲であつた。彼は直ちに精神病院に送られた。這般の變態性慾的行動は、特に十八世紀時代盛んに行はれたことがあつた。我が國の江戸時代に於ても屢々髮截りのあつたことは、當時代の種々なる隨筆中に散見せる記事に徴して明かである。「諸國里人談」に「元祿の初、夜中に往來の人の髪を切ることあり。男女共に結

びたるまゝにて元結際より切り、結びたる形にて土に落ちてありける、切られた人會て覺えなく、いつ切られたりと云ふことを知らず。此のこと國々にありける中に、伊勢の松阪に多し。江戸にても切られたる人あり。云々」とあり、また「敗鼓録」にも「明和六年春末より初秋の頃まで、江戸市中の婦女、會て眼に遮るものなきに忽然として頭髪を截らるゝこと幾百千人といふことを知らず」とあり、また「善庵隨筆」にも「予幼かりし頃、髮截りとして一時流行せしことあり。その後も一二見聞せり。これ狐妖とは云へど道士の狐を驅使して然らしむるにて、大抵は婦人の髪を截り、男子の髪を截ることを聞かず」とある。

ツンゲルキユス (Zungerküss) 出。

澤田名垂の「阿奈遠加志」に「呂は口と口相つゞくなり」と出て居る、親嘴の謂であつて、かの我邦の春本の文句に「あとは無言で口ト口」とあるに同じである。「會本王藻譚」には「口中の契り」

といふ言葉が用ひてある。この行爲は我國では異性間に於ける秘事として専ら行はれて居るが、エリスの説に依れば西洋人の間でこれを行ふものは到つて少ないそうである。

但し、東洋人には此風習が古くより行はれ、就中、印度婆羅門の聖書「迦摩須多羅」の中には其方法が可成りに詳しく書いてある。そしてこれによつて一種の賭をやることもある。

(As regards kissing, a wager may be laid as to which will get hold of the lips of the other first. If the woman loses, she should pretend to cry, should keep her lover off by shaking her hands, and turn away from him and dispute with him saying, "Let another wager be laid"... and then she should laugh, make a loud noise, deride him, dance about, and say whatever she likes in a joking way, moving her eyebrows, and rolling her eyes.

Such are the wagers and quarrels as far as kissing is concerned, but the same may be applied with regard to the pressing or scratching with the nails and fingers, biting and striking. All these however are only peculiar to men and women of intense passion.

亞刺比亞の戀愛の聖書「匂へる園」の作者は、接吻の非常に重要なこと、そして、もし口の内部に當てられたならば、殊にそうであることを詳説してゐる。曲亭馬琴の著「南總里見八犬傳」第八輯の八に、船蟲といふ、賊婦が情夫と共謀して舌切強盗になつた事を描いてゐる。

それとはいさゝか異なるが、最近起つた、口中接吻利用の性的犯罪の實例を擧げて見やう。大正十四年五月十三日の都新聞に載つて居た記事である。高知縣長岡郡西豊永村小笠原梅太郎が同村の久子に打ち込んでゐたが久子は梅太郎に靡かうともしない、つくづく無情を感じた梅さんはある。

日久子に自分の意中を打ちあけ、「僕は貴嬢の愛の洗禮を受ける事が出来なければ此の世に生きてはゐられません、せめて貴嬢の貴き唇なり」とやつた、久子はそれを許した、と梅太郎は久子の舌を根元から噛み切つてしまつた、久子は死ぬ、「あゝこれで成佛が出来る」梅さんも舌を噛んでおさらば云々

元祿八年板「好色旅枕」吸口軒の條には、舌の接吻を以て性的冷淡の女子を催情せしめる方法として述べてある。(「接吻」参照)

ツワングスフォルステルンゲン (Zwangsvorstellungen) 強迫觀念。

強迫觀念と云ふのは、或る觀念が意識内に強迫的に現はれてくるもので、自分で其の愚な事を知つてゐて、而も之を除かうとすればする程益々其の思想が頭の内に強く現はれて来るものである。それで強迫的觀念のある人は、己の有する症状を病的だと知つてゐる故、それが其の人の行爲まで支

配するやうな事はなささうであるが、其行爲の影響は中々強いもので、之を制せんとするも制する事が出来ず、其の爲め甚だしく苦悶するものである。

精神の健康な人でも斷崖絶壁の上に立つやうな場合には、もしや墜ちはせぬかと強迫的に不安恐怖が起る。又高い塔などに昇つて下を見下した時此處から跳び下りたらどうだらうと強迫的に觀念したりする。而も健康な人に於ては斯くの如き思想は直ちに制せられて實行にはならない。又それによつて苦悶するやうな事もない。

これが病的なものになると、斯の如き思想は忽ち實行となり又は之を不良だと知りながらも抑へる事が出来ない。例へば床上に燐寸の燃殻があるのを見ても危い火事になりはせぬかと恐れる。そして燐寸が既に消えてゐるのを見ても普通の人のやうに安心が出来ない。幾度消えてゐる事を確めても危険のやうに感じて、其の苦境から脱する事が

出来ないものである。

併しかやうな人でも平素の動作は普通の人と異なる所のないものが多い。而も一旦強迫観念が起つてくると理否の分別を失つて忽ち狂人の如き行爲をするやうになる。こんな人には強迫症状のない元來の性質を見ても亦種々な變質を來すことが少なくない。即ち本病を現はすものは神經病的素質や精神病的素質のある者に來るもので、多くは遺傳素因のあるものである。

これ等の人をよく檢索して見ると幼年の頃から既に其の兆のあるもので、或は異常に潔癖であるとか又異常に規帳面で物を放任して置くことが出来ぬとか、又は見るもの聞くものについて異常に疑ひ深かつたりするやうな所謂神經質で、物事を氣にかけ安心出来ぬやうな癖がある。又氣が鬱ぐやうになり友達など、愉快に遊ばぬやうになり、外出するを好まず人を避けて家に籠るやうなものもある。これ等の人は幼時既に一種の恐怖症を訴へ

殊に破瓜期頃から本病を發するのが常である。多くはかやうに年少の頃起つた症状は一時輕快し、後日再發する事が少なくない。そして其の症状は以前より漸次増悪し、現はるゝ症状も多種多様となり且つ病勢も頑固となつて中々去り難く、遂には著明なる強迫観念症を呈するやうになるのである。

本病者の現はす強迫症状は千種萬能であつて、一般に本病は經過するに従つて其の恐怖すべきもの、性質や内容が變はり、且つ其の範圍を擴め、終には患者の見聞し、又は接觸する物品が皆凡て強迫観念又は恐怖の種となるものである。それ故何が原因又は誘因で起つたものか不明の場合が多い。併しフロイドなどは一般にかゝる患者を既往に溯つて精細に檢べて見ると必ず何等かの誘因となるべき事が潜んでゐて、之を精神分析法に依つて知る事が出来ると云つてゐる。

強迫観念症には色々種類がある、その中で、性に

關したものは婦人恐怖 (Gynaecophobia) と云ふのである。即婦人の面前には出られないといふ病氣である。次に強迫観念神經病の中の恐怖症についての珍らしい一例を擧げて見る。

淫亂恐怖症、五十四歳の寡婦で、主人とは二十九歳の時に別れ、その後獨力で二人の子供を養育して、非常に奮闘した結果、料理店として東京市内知名の本店にまで發展したが、最近ある病氣に冒され惱んでゐる中、知人が訪ねて來て、四方山の話の序に、六十餘歳の老婦人が非常に淫亂となつて、若い男を拵へて行方を晦ましたといふ話をした。それを聞いて以來、彼女は自分もその女のやうに淫亂に成るやうな氣持がして、丁度若い女の時代に感ずるやうな性慾亢進の狀が常に現はれ、それを抑制するのに非常に努力しなければならなかつた。そして、もし淫亂と成つて人から笑はれるやうな行動を執るやうなことがあつては、折角今迄永年の間獨身を

續けて人から笑はれた事も無いのに、非常な汚名をこゝで着なければならぬし、既に妻帯した自分の子供の手前、非常な恥辱を世間から浴びせられなければならぬといふ恐怖のために終日悶々として、今にも自分が極度の淫亂状態となつて、醜體を演ずるかのやうな氣持で煩悶してゐた。

その由來を考へるに、彼女は丁度月經閉鎖期の年齢に達して生殖機能の萎縮の状態にあるので永年孤獨を守つて性慾を抑制しつゝ奮闘して來た揚句、丁度ある病氣で神經を惱ましてゐる際に、淫亂の話を聞いたことが刺戟と成つて、斯やうな恐怖症を惹起するに至つたのである。

ツキツター (Zwitter) 一形。

二形とは所謂兩性具有者の一稱であつて、佛在世の時、ある比丘尼が二形に變じて了つたので、もろ／＼の比丘尼達は滅損すべきか否かに惑つたが佛陀は

「減損してはならぬ。先に具足戒を授けた戒師、教授師から手續をして比丘衆の中へ送るがよ
51
と仰せられた、と言ふ事が「四分律」に出て居る。中世紀時代の頃は半陰陽を以て神譚のために起つた不吉不祥のものなりとし、當時のあらゆる神學者は、不幸なる半陰陽者を除去することを要求した。十七世紀に及んでも猶ほ此様な考へが存続してゐた、モンテイヌの記せる處に依れば、女として結婚せし半陰陽者は其の生殖器部を濫用したとの廉にて死刑に處せられたといふことである。其他、彼れは尼院に入りし一僧侶の身の上話を記したことがあり、又モンタヌスは、女性として結婚せし半陰陽者の男女二人の小供を儲けながら、一方には其家の下婢を犯して之を妊孕せしめたことを記述した。猶ほ往古の記録中に可なり多く半陰陽に關する奇異の報告が散見する。
漢土にては半陰陽を「人痴」或は「二形」或は

「半月」といひ、我國にては「はにわり」又は「ふたなり」といふ、「病名彙解」に「本草綱目に云ふ、體、男女を兼ぬるを俗に二形と名く、晉書に亂氣の生ずる處とす、これを人痴といへり、其類三あり、男に値ては即ち女、女に値ては即ち男なるものあり、半月は陽、半月は陰なるものあり、妻なるべくして夫たるべからざるものあり」といひ、「倭名類聚抄」には「内典云、五種不男、其曰半月、俗訛云、波爾和利、一云、謂其體男而不男、一月三十日、其陰十五日爲男、十五日爲女、名半月也」とあり、「箋淫倭名類聚抄」に之を註釋して「按五種不男、見法華經安樂行品、記云、五種不男、生劇妬、變半也、半謂半月、半月列在第五、此所引蓋、是又四分律云、黃門者、妬黃門、變黃門、半月黃門、半月黃門者、半月能男、半月不能男、亦半月在、五、十誦律云、五種不能男、二半月不能男、半月能姪、半月不能男、是爲半月不能男、亦是事、又玄應音義云、般茶迦

此云黃門、其類有五種、四博又般茶迦、謂半月作男半月女、注所引或脫卽是按、波爾和利蓋半割之義」とあり、「和漢三才圖會」には五雜俎云、晉惠常時、京洛有レ人、兼男女體、亦能再用入道者、今人謂之半男女、(中略)一云、上半月爲男、下半月爲女、般若經載博之又半擇迦是也」とある、是に由て之を觀れば、半陰陽を「人痴」といふのは亂氣の生ずる所なるに由り、「半月」といふのは、一ヶ月の上半期は男となり、一ヶ月の後半期は女となるに由り、「二形」といふのは男女の兩形を兼具するに由るのである。而して邦語にて之を「波爾和利」(Porehori)といふのは漢語の「半月」の訛言であるらしく、「類聚名義抄」に「半月、はにわり」と記し、「伊呂波字類抄」にも「半月、はにわり、十五日爲男、十五日爲女之稱也」とある。而して此の「半月」といふ語の出處は佛典であるが、又た「黃門」とも云つてゐる。我國に於ても半陰陽のことは古くより知られてゐたもので、

平安朝時代に出でたる「類聚三代格」中に「國不放之人、債員之人、黃門、奴婢之類云々」とあつて、黃門を擧げてある、(黃門は即ち佛典に記せる半陰陽の名である)又「異病草紙」に「都に鼓を首にかけてうらし歩く男あり、形男なれども、女のすがたに似たることゞもありけり、人之をおほつかなかりて、夜る寢入りたるに、潜かに衣をかき上げて見れば男女の根共に在りけり、これ二形のものなり」とある。されば王朝時代の頃より半陰陽の人間が世に知られてゐたことが分る。(「半男女」参照)

川柳に

ふたなりが來て畏却する女人堂

索引

ア	愛咬	二〇四	愛神	二〇五	愛藥	二〇六	愛慾神	二〇七	足狂崇	二〇八	吾妻形	二〇九	門渡	二一〇
イ	無花果	二一一	一妻多夫	二一二	一夫一婦制	二一三	一夫多妻	二一四	衣類的節片淫亂症	二一五	陰核剝除	二一六	陰核剝除	二一七
ウ	陰核感覺過敏症	一六〇	陰核勃起症	一六一	淫鬼	一六二	陰唇象皮病	一六三	陰阜	一六四	陰部露出症	一六五	陰囊	一六六
エ	淫夢女精	一六七	陰門搔痒症	一六八	陰門嘔僻	一六九	陰陽崇拜教	一七〇	淫樂的兇殺	一七一	淫亂無恥の女	一七二	維納斯	一七三
オ	海老鏡	一七四	艶書淫亂症	一七五	艶夢	一七六	エテイブス錯綜	一七七	男莖形	一七八	女追	一七九	力	一八〇
カ	海綿體	一八一	隔世遺傳	一八二	蔭間	一八三	割禮	一八四	迦摩	一八五	迦摩須多羅	一八六	觀淫症	一八七
ク	官官	一八八	看々踊	一八九	姦通	一九〇	花柳病	一九一	中	一九二	龜頭	一九三	僞人陽	一九四
キ	偶像姦	一九五	靴狂崇	一九六	窪	一九七	逆緣婚	一九八	擬媼	一九九	逆緣婚	二〇〇	逆緣婚	二〇一
ケ	強迫觀念	二〇二	莖袋	二〇三	嬌態	二〇四	強迫觀念	二〇五	局部義毛	二〇六	生娘	二〇七	去勢	二〇八
コ	近親姦淫	二〇九	近親相姦	二一〇	近親姦淫	二一一	去勢	二一二	近親姦淫	二一三	近親相姦	二一四	偶像姦	二一五
ク	靴狂崇	二一六	窪	二一七	窪	二一八	窪	二一九	窪	二二〇	窪	二二一	窪	二二二

索引

挺孔	一八〇	女人國	二四〇	糞尿嗜喰症	一九二
貞操	一八一	人相學	二四二	分婬	一四四
貞操帶	一八三	妊娠	二六三	非檢微主義	一六
臀部	一八四	尿淫症	二九二	歇斯帝利	二七一
ト	一八六	尿道	二九三	人身御供	二五
圓騰	一八七	尿道交接	二九七	飛緣魔	二九五
疼痛性淫亂症	一八八	ハ	病的性慾	變質者	九五
同性色情	一九〇	微毒	尿醜	鞭撻症	一三五
洞房	一九三	破瓜	品醜	ホ	
動物汚行	一九六	破瓜期	フ	包莖	二四二
動物虐待享樂症	一九七	發動的淫虐症	風俗	蜂腰	二四一
ドン・ファン型	一九八	張形	風俗警察	冒險癖	一
ナ	一九九	半陰陽	不淨物淫亂症	房中偽器	一四五
軟性下疳	二〇〇	半處女	婦人遺精	母系制度	二三五
ニ	二〇一	班猫	婦人部屋	荷孟液	一六四
乳房	二〇二	夜尿症	二形	マ	
二重結婚	二〇六	有夫の婦人に恩從職業	浮浪	摩擦症	一四〇
			浮浪性	魔術	三二七
			舞踊	呪咀	三三三
				魔に見込まる事	九四

魔法的信仰	三三	夜尿症	二二	流産	二〇
前垂開	一五一	裸體畫	二六	凌辱神	二四五
マルサス主義	三二	裸體寫真	二九	兩性症	二七
ミ	三六	喇叭管	三五	屢姦	二四
操の帶	四	卵珠	一九	輪の玉	二五
觀世物	二六二	卵巢	二〇・三五	淋病	二九〇
ミカ手術	二二〇	掠奪結婚	二四	戀愛	一六
ム	二四			レスボスの愛	四五
無月經	二四三			レ	
夢精	二四三			呂	三五
胸	二九			弄媚	一四〇
迷信	七			老老性癡呆	二七
モ				ワ	
模型陰莖	一六			猥褻歌謠	三三
門前射出	二二				
ヤ					

索引終

Universeel Sexual Lerikon



幼本

□ 無 斷 復 製 を 禁 ず □

昭和四年五月十五日印刷
昭和四年五月二十日發行

定價貳圓八十錢

序 閱 者

フツヒド・エス ク ラ ウ ス

序 閱 者

杉 田 直 樹

著 作 者

佐 藤 紅 霞

發 行 者

東京市神田區錦町壹丁目貳番地
米 林 保 吉

印 刷 者

東京市神田區平永町八番地
村 田 新 次 郎

發 行 所

東京市神田區錦町壹丁目貳番地

弘

文

社

振替東京三七六九番

弘文社出版圖書

	定價	送料
藤村 村 斌 助	2.00	10
山崎 時 一	1.50	8
大原 外 光	1.70	8
藤森 成 吉	1.00	6
井東 憲	2.80	12
石川 啄 木	3.00	12
一氏 義 良	近 刊	
黒田 鷗 心	1.60	8
一氏 義 良	1.20	6
黒田 鷗 心	近 刊	
佐藤 紅 霞	1.70	8
中村 岳 陵	1.80	8
鶴田 吾 郎	1.40	8
山本 鼎 秀	1.50	8
堀 旭 正	1.50	8
樟 島 勝 一	1.50	8
下川 四 天	1.50	8
同	1.50	8
仲木 貞 一	1.50	8
藤井 眞 澄	2.00	8
小寺 融 吉	1.00	8
佐々木 邦	1.50	8
同	近 刊	
牧野 元 次 郎	1.30	8
同	近 刊	

終

